
月下美人

月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月下美人

【Nコード】

N62890

【作者名】

月夜

【あらすじ】

ヒナタ、16歳からのお話です。

原作の諸事情等、ムシしていただけるとありがたいです。

どのような流れになるか漠然としていて不明ですが、安全策をとって、R15とさせていただきます。

ヒナタ 1

すきです。好きです。愛しています。
いったい、いくつの言葉を重ねたら、あなたにこの想いが伝わるのかしら。

彼に好まれていないことなど、わかっていた。

彼が好きなのは明るい人。

自分に自信を持った、明るくてはきはきとした人。

私の、正反対にいる人たち・・・

そもそも、忍の世界にいて、私のように優柔不断で内に籠もる性格をした者を探すほうが難しい。

私は、彼に好かれていない。

いや、違う。

彼にも、好かれていない、だ。

思えば、血の繋がった家族にさえ、私は愛されなかった。
生死を預け合うスリーマンセル仲間にも、疎まれていた。

シノくんは、彼はもともと単独行動を好む傾向にあったから、仕方ないのかもしれない。私たち三人の中でいち早く中忍となった彼が、どこかほっとしたような表情を浮かべて去っていったのが印象的だった。

キバくんは・・・

彼は単独より、チームでの行動で力を発揮する人だ。行動派で思い切りがいい。力強く、プライドが高い。自らの実力のなさもしっかりと受け止め、努力し這い上がっていく。行動にも、言動にも裏表がなく、自分の感情を包み隠すということもしない。またそれが、

仲間の絆を深め信頼を強くしていくために必要なことだと、信じて疑わない。

確かに、確かにそうかもしれない。

命の遣り取りをする私たちには、隣にいる仲間が何を考えているのか、相手がどのような場面でのような行動をとるのかわからない状況は、恐怖以外のなにものでもない。

ただ、洞察力に優れると言われる日向の世界で生まれ育った私には、彼の言動は鋭利な刃物を振り回されているのと同じことだった。彼らに迷惑をかけていることなど、わかっている。

私の不甲斐なさが、彼らを危険な目に合わせてしまっているということも、十分認識していた。謝罪する私に向けられるキバくんの言葉が心に痛く、シノくんのサングラス越しに見える眼差しが肌に痛く、紅先生の溜息が私の手足に枷をつけた。

「正直、お前とはもう組みたくねーよ」

これが、次に中忍となったキバくんと、チームメイトとして最後に交わした言葉だった。

シノくんから遅れること一年、キバくんから遅れること9ヶ月。

ようやく私が中忍の段階により登ったとき、紅先生は重い重い肩の荷が下りたことを隠そうともしなかった。

上忍として始めて受け持った生徒が私だったことは、本当に申し訳なく、未だに顔を上げて話すこともできない。

自分を変えようと何度も試みた。

両親は私に落胆していた。私はどうにか彼らに認められようと、受け入れられようと努力した。厳しい彼らの顔が僅かにでも綻べばと、無心にがんばった。

けれども、すべては無駄だったのだ。

3歳で事件が起こり、優秀な身内を亡くした。

要因は、私かもしれない。だが、今思っても、3歳の幼子にいったい何ができたというのだろうか？

どのような形にせよ友好条約を結んでいる相手と、手を切るだけの余裕は里にはない。また、木の葉という里において、何十人もの忍を失うことが確実な戦いを決意させるほどの価値が、叔父にはなかった。日向という一族においていくら優秀とはいえ、里単位で見れば、やはりただの忍なのだ。

父は半身を失った怒りと哀しみを、私にぶつけた。表だって何かを言われたわけではない。けれども、父の目が全てを物語っていた。

白眼も満足につかいこなせない私だが、洞察力だけは『日向』だった。

そして、母。

母は父よりも早く、そして事件よりも早く、私を見限っていた。

母は分家のひとつから嫁いできた。彼女自身は取り立てて優秀な忍だったというわけではない。ただ単に、父と年が近い日向の娘、だったのだ。母と同年齢で、生まれたときより何かと比べられた女性は、もう一人いた。彼女は母に何かと秀でていたらしい。本来なら、優秀な彼女のほうが宗主たる父のもとに嫁いでいたのだろう。

けれどもそうは、ならなかった。

なぜなら彼女には、とても愛し合った恋人がいたのだ。

本人の意思など構わず、誰であろうと何事を決めるのであると、人を駒のひとつとして勘定する日向の長老たちが彼女の恋を成就させたのは意外だ。だが必死に、若かりし頃の父が口添えしたのだと聞けば、少しは納得できる。父は彼女の意志を尊重し、恋人と結ばれるよう奔走したのだという。そして、自ら望んで母を娶った。

母より秀でていたという彼女の夫は、叔父である。

父が本当に心から母を望んでいたのか、母を愛していたのか、私にはわからない。微かに残る彼らの揃った姿からも、父の真意がどこにあったのかはわからない。

父は、自分より秀でていながら弟というだけで呪印を刻まれた叔父に、せめてもの償いをしたかっただけではないのだろうか。母は、そんな父の心を読みとっていたのではないのだろうか。

これは私の憶測に過ぎないが、さほど真実から離れているとも思えない。とにかく父より優秀だと言われた叔父と、母より秀でていると言われた叔母から産まれた従兄は、誰よりも日向の才に恵まれていた。

そして私は、従兄より一步も二歩も遅れをとった。

母はそんな私を齒痒く思っていたのだろう。産まれてから一度も勝てたことのない自分、そしてその子の代になってまでも負け続けるのか、と。もちろん記憶になど残っていないが、早く立て、早く歩め、と母の要望はそれはもうすごいものだったらしい。しかし、標準より大きく産まれた彼に比べて、一回りも小さく産まれた私の成長は遅く、母の期待を悉く裏切った。

物心ついた頃にはとうに見捨てられ、母は私を汚いものでも見るかのような目で見ていた。

今思えば、母も辛かったのだろう。

私が落ちこぼれなのは、母の血を引いているからだと言われているらしい。母ではなく、叔母を娶っていたら優秀な子が産まれただろうに、と。

母が次の子を欲しがっていたのは知っている。才に溢れた子を、望んでいた。

4才の頃、身籠もった母が見せた弾けんばかりの笑顔覚えていく。あれほど明るい笑顔を見たのは、後にも先にもない。

産まれた妹は、ハナビは才に恵まれていた。そして努力する事も厭わなかった。彼女は急速に上達し、あつと言う間に私を追い抜い

た。従兄には未だに敵わないが、それでも日向を背負って立つには十分な実力を身につけている。

そんな優秀な娘の姿を見ることなく逝った母は、不幸だと言えるのだろう。

『不幸な母』の言葉のひとつやふたつ、行動のひとつやふたつ、飲み込んでしまえばいいのに、未だに囚われ傷つく私の心は脆く狭量なのだろうか。

「お前にはほとんど愛想が尽きた」

「次の子が日向を継ぐ。この子の障害にだけは、なるな」

本番に向かうとき、失敗したとき、落ち込んだとき、ふいに響いてくる母の言葉。

重く、冷たく、痛くてくるしい。

妹、私の妹。ただ一人の妹、かわいい子。

小さい頃は、何かと私についてきた。亡くした母の代わりを、私に求めていたこともあるのだろう。私もしがみついてくる小さな手が愛おしくて、幾度も抱きしめた。彼女が眠りにつくまで、眠い目を擦り擦り、本を読んだ。ぐずる彼女をあやそうと、背負い歩いた。どんなに重くても、彼女が泣きやむまでおろすことはしなかった。

けれども、そんな彼女もいつかは見えるようになる。自分を取り囲む世界が、日向という世界が。

そして、私の置かれている状況を。

ハナビが7才の頃、私は始めての中忍試験を受けた。本選に進むことはできなかったけれど、そこで彼女が見た従兄の姿。聡い彼女はそれで全てを悟ったのだろう。自分の姉がいかに愚鈍な存在かということを。

このときを境に、妹は私を露骨に避けだした。

今ではもう、目も合わせない。

アカデミーで出会った金色の少年。

自分を信じ、自分の言葉をまっすぐに信じ決して曲げない。強い光を放つ、太陽のような人。

彼に憧れた。

彼のようにになりたいと願い、必死に手を伸ばした。

自分と同じように他から阻害されていた少年は、しかし、本物の太陽だった。

彼の光にいまは誰もが気付き、振り向く。

私などは住む世界が違ったのだ。そもそも、同じレベルで考えていたこと自体、ひどく失礼なことだったのだろう。彼がもしそのことを知ったら、いかに優しい彼でも眉を顰める違いない。

私が不用意に伸ばした手は無様に弾き飛ばされ、自分がいかに矮小な存在かを思い知った。

私は彼が好きだった。小さい頃からずっと、彼が好きだった。

金色の太陽に憧れていたときも、恋という感情で好きだったのは彼だ。金色の少年に対する感情は、あまりに失礼で決して本人にも誰にも言えないが、『同類相哀れむ』といったところだ。

私が好きなのは、静かで激しく、強くて優しい、冷たい彼。彼のどこを愛しているのか、何故好きなのか、そんなことはわからない。気付いたときには好きだった。この想いが消えることなど、考えられなかった。

彼に想いを告げようと考えたことは、一度もない。迷惑をかけることは望まなかったし、呆れられるのも嫌だった。

それに、彼が私に好意をもっていないこともわかっていて。

いえ、違う。

彼は私に好意をもっていないのではない。
私を、憎んでいるのだ。

金色の少年は、彼の冷たい心をも溶かしたようだ。中忍試験以降、彼の宗家に対する思いは変わっていった。だがしかし、彼の私に対する感情は何も変わらなかったのだ。

彼が私を嫌っていたのは、私が宗家だからではなく、私が、『私』だったからだ。

とても悲しいことだが、仕方がない。私が誰よりも秀でていようと胸を張って言えるのは、諦めやすいということとだけだ。褒められたことではないが、このときばかりは自分の諦めやすさに感謝した。私は早々に諦めた。

彼に対する想いを捨てたのではない。彼を愛することを諦めたのではなく、彼に好まれるよう努力することを諦めたのだ。これ以上嫌われないように。ただ一点、これに努めた。

だが人間生きてさえいれば、いいことって本当にあるのだ。父から話を聞いたとき、私は有頂天になった。うれしくて、うれしくて、うれしくて、本当にうれしくて、何もかも吹っ飛んでしまったのだ。どうしてこうなったのか考えもしなかったし、彼のことさえも、気遣う余裕を無くしていた。

だって、こんな思いも寄らなかった話、落ち着いて聞けると思う？
父上は確かに私にこう言った。

私に、彼のお嫁さんになりなさいって。

彼も断らなかつた。私はそれがまた、嬉しかった。彼に疎まれていると感じたのは、私の被害妄想じゃなかつたのかしらって。

でも決して、私の思い違いではなかつた。

ヒナタ 2

婚礼の日。

私は日向宗家の婚礼を見たことがなかったのだが、こんなものの、と首を傾げたくなるほどあつけないものだった。父と妹、幾人かの長老、そして彼と私。一人一人の前に並べられた膳は普段とさほど変わりなく、強いて言えば碗に盛られた赤飯が祝いの席だと教えていた。彼は忍衣だったし、私は母のお下がりの着物だった。

華やかな気持ちになるわけもなく、これはただの夕食会だったのかしら、などと何処かで私は思っていた。だが彼について彼の家へ行き、玄関扉を閉めたとき、私の胸は急に高鳴り出した。

先へ、と言われ入った風呂。夫よりも先に湯をつかうその不自然さにさえ、気付かなかった。

白い夜着を身につけ、彼の部屋で彼を待つ。もうその頃には、私は全身で鼓動を感じた。

長いような、短いような時間の後、襖が開いた。彼が部屋へ入ってきたのはわかったが、床に着かんばかりに下げた頭を上げることができなかった。震える指先を揃え、どうにかこうにか声を絞り出す。

「・・・ふ、ふつつか者ですが、未永く、お願いいたします」

蚊の泣くような声しか出なかったが、誰もいない静かなこの家。彼にも届いたはずだろう。

だが、彼からの返事はなかった。彼は部屋に入ってきたそのままの体勢で座ることもなく、立っている。

ああ、そうだ。私は彼に何も告げていない。もしかしたら、彼は私が仕方なく嫁いできたのだと、思っただけだろうか。

「私は、私は・・・ずっとネジ兄さんのことが好きでした。あなたの妻となれたことを、喜びに思います。ネジ兄さんを、ずっと、ずっと愛しています」

顔から火が出るようだった。けれど堰を切って溢れ出した彼への想いは、私自身でさえ驚くほど素直に大胆に、彼へと向かって流れ出す。

先程よりは大きな声が出せたこと、長年思い続けたことが漸く吐き出したこと、私はほっとした晴れ晴れとした感情に包まれていた。こんなにすつきりとした気持ちは、始めてかもしれない。

指先の震えはいつの間にか止まっていたし、鼓動も落ち着きを取り戻していた。

私は顔を上げ、彼を見上げた。

そして、何もかも間違っていたことに気付く。

腕を組み、私を見下ろす彼の目は冷たく、見窄らしいものを見るかのようにだった。そして苛々とした口調で、彼は言った。

「あなたと夫婦になったのは、宗家からの命令で仕方がなかったからだ。いずれは跡継ぎをつくるため、あなたに触れることもあるだろうが、それまではただの同居人。あなたを愛することなど、ない」

彼がないと言えば、本当にこの先もないのだろう。金色の少年とは違った意味で、彼もまた、自分の言葉を曲げなかったことを知っている。

「あなたが誰を愛そうとどうでもいいことだが、俺を愛しているだなどと、二度と口にするな。気分が悪い」

私は誰かに愛されたことはなかった。誰かに愛されるという状況は、どんなものなのだろう。興味があつたし、望んでもいた。好きな人に好かれたら、すごく嬉しい。思いも寄らない人から好かれても、やっぱり嬉しい。

誰かに好かれて、嫌だというのはどういうことだろう。

たくさんの人に好かれる彼ならば、これ以上誰かに好かれる必要

もないから、私にまで好かれるのが嫌なのだろうか。私たちの代のサスケくんのように、彼はアカデミー時代、同年代の女の子にとっても人気があったらしい。そして日々精悍になっていく今では、多くの女性に好かれていた。他を圧倒する強さは、若い忍たちの羨望を集めた。

だけど、一人より二人、二人より三人。人に好かれることって素敵だよな。

なのに嫌って、どういうこと？

彼の部屋を追い出され、私にあてがわれた部屋。まだ春浅い、冷たい夜気の中。私の馬鹿な脳味噌は、漸くひとつの真実に辿りついたのだ。

つまり、彼は私を嫌っているのだ。好かれることが許せないほど、私は彼に疎まれていた。

こうして私は16の春、人の妻となった。

花嫁衣装も祝福の言葉もなければ、庭の桜には花さえなく、全てに拒絶されているかのようなこの日に、私は嫁いだ。初夜に「夫」に告白すれば失恋し、憎しみにも似た嫌悪感を持たれていることを知り、それでもなお、私はこの家に留まった。

宗家を出た私に帰れる場所などない。彼の言うように宗家の命令で取り交わされた婚姻なら、離婚することも叶わない。

彼を苦しめることも、迷惑をかけることもわかっていたけれど、私はこの家を出なかった。彼が私の存在自体を嫌っていることを改めて知った後でも、私は彼を愛していた。色々と理由をつけて、彼に嫌がられつつもこの人の側に留まったほど、私は彼を愛していた。どのような形でも、彼の側にいたかった。

婚姻とともに、忍を辞めた。

同期が皆、中忍、上忍と着実に上がっていく中で、私は下忍で足踏み、中忍で躓いた。まだ向いているのではないのか、そう言われたアカデミー教師も医療班も私は満足にこなせなかった。妹のような聡い子は日向では珍しくなかったが、アカデミーに通うのはどちらかといえばナルトくんやキバくんのような子。私は悪童たちに散々振り回され、一ヶ月足らずで子供たちに引導を渡されてしまった。医療班も同じ。目の前で苦しんでいる人や傷ついている人を見ると、何かしなきゃとは思っけれど、何をすればいいのか、私の判断で間違っていないのか色々考え出すと怖くなった。患者を殺す気か、と医者に3度目の叱責を受けたところで辞表を書いた。

教師は子供の未来に関わるし、医療は人の生死に関わる。どちらも自分にひとつの自信も持てない私にはできないことだった。

他人の人生に関わることなど、私は2度としたくなかったのだ。

結婚して半年が過ぎようとした頃、季節は秋へと変わっていた。

当初の宣言どおり、『夫』は私に触れようとはしなかった。跡継ぎを、と日向はざわつき始めていたが、彼らは専ら私に言ってきた白眼も満足につかいこなせない落ちこぼれでも、せめて血を残すことぐらいはやれ、と。しかしこればかりは、私がいくら努力しても無理だ。どんなにすごい女性でも一人で子を成すことなど、できない。

一度だけ・・・、一度だけ、彼にお願いをした。

任務から帰ってくつろぐ彼の部屋へといき、一度だけお願いを試みた。

理由は色々あった。宗家が跡継ぎを望んでいること、分家もそうだとということ。彼が次の任務まで時間があったということ、思いつくかぎりの理由を並べた。煩い日向が、このときばかりはありがた

かった。口実をたくさん与えてくれた。

貧血で倒れそうだった。告白したときより、緊張していた。

あの時は、彼が結婚を了承してくれたということが、彼に受け入れられたと、少しは好かれていたのではと、ばかみたいに喜んでた。でも、違つとわかつた。

彼は結局、日向の籠の中。

突然、自分の籠に押し込められた私を拒絶する術も、追い出す力も持っていないかっただけだ。

私は全てわかつていた。彼に愛されてなど、いないことを。

それでもなお、私は彼を求めた。

一度だけ、本当に一度だけでもよかつた。嘘でも、よかつたのだ。錯覚でも、誰かに愛された記憶が欲しかった。誰かに抱きしめられた記憶が欲しかった。

「勘違いは、しないから。・・・ネジ兄さんに、愛されてるなんて、絶対に思つたりしないから・・・！」

私は必死だった。なぜだかわからないけれど、今を逃せば後がないと思ひこんでいた。自分で着物の胸元を広げ、彼にすがりついた。計算などなかった。習つたはずの房術もどこかに吹っ飛んでいた。

そう、房術。

私は房術を知らない。いや、正確には房術の実践をしらない。

くのークラスでは房術の授業を行う。けれどそれは机上でのこと。実践は下忍になってからだつた。

私はその実践授業を受けなかつた。

役立たずの血継限界継承者。だが少なくとも名門日向宗家宗主の第一子である私は下忍となつた後も、周りは日向の娘として私を見

た。つまりお嬢様のお遊び、と見たのだろう。いずれは飽きて日向に戻るのであれば傷物にしてはならないと。

しかしその特別扱いが、くのーたちの反感を買った。

同期も先輩も後輩も、くのーとなった以上、避けては通れない道。乗り越えなければならぬ大きな壁。嫌だけれど、くるしいけれど、あの子も一緒、彼女も一緒。皆そう思い、言い聞かせ走り過ぎた。

そこに、『特例』がいるのだ。彼女たちの憤りもわかる。

私はくの一からも、一線を引かれた。

彼はそのことを知らなかったのかもしれない。私が焦れば焦るほど、彼の目は冷めていった。術にかかるまい、そう身構えているようだった。

口にできることもなくなり訪れた静寂の中、私はとてもみつともない顔をしていたのだろう。彼は心底呆れたように溜息を吐いた。

「……まがりなりに、日向の血を引いているのであればそれ相応の振る舞いをしろ。男に抱いてくれと自らその身を開くなど、恥知らずにも程がある」

淫売と、言われなかっただけましなのだろうか？

彼の目は、口より多くを語っていたが。

これ以後、二度とばかな振る舞いをしないよう自分を強く戒めた。最も、彼自身が家に寄りつかなくなってしまうので、私の決意など無駄になっているのだが。

彼は任務に全てを捧げるような人ではなかった。もちろん手を抜くことなど絶対にあり得ないが、何が何でも仕事、というほどではなかった。任務と休暇を適度に挟む人だったのだ。休暇をとってもどこかに遊びに行くというのではなく、家で書物を読んだり瞑想したり、余暇を楽しむことのできる人だった。

だが私と結婚した後、彼は段々と家から離れる時間を増やしていった。

私が仕事をせず家にずっといるから、彼の任務がないときは必然的に顔を合わせることになる。それが嫌だったのだろう。そしてあの夜をきっかけに、彼はますます家から遠ざかっていった。

彼が花街にいると、親切な誰かが教えてくれた。任務もなく、家にもいないときは大抵、花街にいるのだという。

自己を律する人だが、健康な男子。色事のひとつやふたつ、あったとしてもおかしくはない。ただ、彼が女色に耽るという図は考え難かった。

いろいろと、私が調べることもなく、誰彼となく教えてくれた。日向やくの一の知り合い。女の勘というのは恐ろしいもので、私が上手に隠していたつもりも彼の彼への想いに彼女たちは勘付いていたのだ。初恋を実らせ、きれいなままで彼のもとへ嫁いだ私への、意趣返しなのだろう。

それはそれは懇切丁寧に、教えてくれた。

彼は、ただ一人の人のもとへ通っているらしい。

別に調べようと思ったわけではない。相手に会おうと思ったこともなかった。

偶然だったのだ。

所用で町に出かけたとき、偶然すれ違った人が、彼の思い人だったのだ。

きれいな人だと思った。凜とした、きれいな人。きりりとした眉に、意志の強そうな青い瞳。銀色の豊かな髪を無造作に結び、顔をつんと上げ歩いていた。擦れ違う端から男の人が振り向くにも彼女は全く意に介さない。

「アゲ八姫だ」

思わず足を止めて見惚れていた私の耳に、誰かの呟きが届いた。

ああ、彼女か。

その名は、私に注進をしてくれた者たちが幾度と無く、口にした名だった。

彼女が、そうか。

一目で全てを納得してしまった。彼女なら、彼が夢中になるのもわかる。あんなに自信に満ち溢れて、美しい人。好きにならない人などいない。とりわけ、彼の好みだと思った。

だって、私と正反対。

彼女なら彼の横に立っていたとしても、すんなりとその場に収まるだろう。

二人が寄り添っている姿を容易く想像できる。

ああ、本当によく似合う。

私は、忍に復歸した。

何をするでもなく、時間を無駄に食えることにも飽きた。それにこのままでは、何も変わらない。

私は彼を愛していた。今でも変わらず、愛していた。

彼に愛してもらおうなど、思わない。受け入れてもらおうなどと甘い夢、とっくの昔に捨ててしまった。

ただ、彼を愛したのだ。

何もかも、投げ捨てられるほど。彼以外の人間などどうでもいいくらい、彼の幸せだけを願った。

彼女の姿を見て、少しの日数を費やした後、私は日向宗家へと向かった。父、いや宗主に会い、一つの約束を取り付けた。生まれて始めて願い事を口にし、生涯ただ一つの契約を交わした。

捨て身になれば、強くなれる。

彼の幸せだけを願った。これ以上、あの人の邪魔になりたくなかった。

私はがむしゃらに任務をこなした。内容など聞きもしなかった。左手で報告書を提出し、右手で新しい任務書を掴んだ。

自分が傷つくことなど気にもならなかったし、敵が倒れることも頓着しなかった。かつて、何をあれほど恐れていたのか自分でも不思議なくらい、心は平静で体は軽い。

中忍に与えられる多くのCランク任務と、僅かなBランク任務の後、気付くと私は上忍になっていた。上忍になって、私は待っていたとばかりにBランク、Aランクの任務についた。危険だろうと構わなかった。むしろ危険であればあるほど、私は選んで任務につく命を無駄にするつもりか、何度もそう言われた。冷酷、だとも言わ

れた。敵を容赦なく倒す私に、以前の姿を知る人は別人を見るような目をした。

誰が傷つこうと、私が傷つこうと、構わないのだ。

私の歩くこの道の先に、彼の幸せがあると信じていた。

復帰して1年後、私は暗部へ配属された。

暗部は意外にも心地良かった。仮面を付けているからか、私が白眼だということはもちろん知っているだろうけれど、だからといって特段、白眼の能力を期待されなかった。常に見ていればどうしても、白眼の力をあてにされる。だが、暗部ではそういうことは一切なかった。血継限界だろうと何だろうと、皆得意な技を駆使していた。

私は復帰してから後、白眼に拘ることをやめた。向いていないのだ。白眼にも、教師にも、医療にも。向いていないのに日向だからと、白眼にしがみついていた。

暗部の仮面を付けた代わりに、今までつけていた仮面を完全に取り去った。

私はいつもいつも、誰かに愛されようとしていた。受け入れられようと、知らず知らずに媚を売っていた。おどおどと人の顔色を窺い、嫌われないように言動にも行動にも気をつけた。日向から見捨てられないように、白眼に固執した。優しくもないのに、優しさを装った。

それら全てが偽りだった。私の偽りの姿を、周りの人たちは見破っていたのだろうか。だから、あれほどまで悉く誰からも拒絶されたのか。

化けの皮の全てを脱ぎ捨てた今、私は徐々に受け入れられていた。

・・・暗部の仲間に限ってだが。

私の根は、冷酷で、無慈悲だった。私自身も驚くほど、恐れも気負いも良心の呵責もなく、振り上げた刃を降ろすことができた。い

くら返り血を浴びようと、何の感情もわかなかった。

むしろ・・・返り血に喜んでる自分がいた。引き身の余裕を無くし、大量に血を浴びたとき、知らない人肌の温もりを教わったような気がし、安心した。仮面の下で、笑みさえ浮かべた私に驚愕した。

あの人のためと言いつつ、私はただ、残酷な心を満たそうとして
いるだけなのだろうか。

暗部の任務は厳しかった。そして危険さは、今までの比ではなかった。だからこそ暗部は一度組み相性が良ければ、それでチームが定着する。任務毎にメンバーが替わるようでは、仲間の得意技が何なのか、力量がどれほどなのか、理解するまでに命を落とす。

私のチームは5人。暗部10年を越えた隊長、諜報活動を得意とする副隊長、医療スペシャリストのサク、5年目の力ズに1年目の私だ。彼らは皆、豊富に蓄えた経験と知識を惜しみなく私に与えてくれた。始めて仲間と言い合える人たちに出会えた。とても居心地が良かった。死地を越える度に、彼らとの絆が深まるようだった。私は漸く、何の気構えも必要としない仲間を得た。

私は家を空ける期間が長くなった。暗部の任務は、一度着くと数週間から数ヶ月を要する。通常、暗部は任務と任務の間に最低10日以上の休暇を挟む。死地から帰り、また戦場へ向かう鋭気を養うためだそうだ。だが幸か不幸か、私たちのチームは任務遂行率が高かった。木の葉くずし以降、未だに落ち着きを取り戻せない里の治安を守り、立場を堅固なものにするため、私たちは休暇も碌に取らずスクラスの任務に就いた。唯一の既婚者である私を隊長は気遣ってくれたが、私は望んで任務に赴く。

当然、彼とは擦れ違いの日々だった。連絡事項は専ら手紙だ。というよりはメモ。任務に就きます、帰里予定はいついつ、必要最低限の内容。その多くは私が書いた。

彼は多分、私が暗部にいることを知らない。

知らなくていいのだ。殊更知りたくもないだろうし、興味もないだろう。

任務で一緒になることはなかったし、たまに顔を合わせても聞かれたことはなかった。

暗部の世界でどうにか1年を生きながらえた頃、ご親切な方が私の耳元でまた囁いた。

彼が、彼女から遠ざかり始めた、と。

以前のように、任務のないときは家でいることが多いのだそうだ。それに関しては薄々感づいていた。買い置きしていた食材の減り具合や、新たに出現している食材の量を見れば、私が不在のとき彼がどのくらいの間、正確には食事回数が把握できる。そしてそこに他人が入ってきているのかどうかくらい、私にもわかった。

明らかに、彼は家にいる回数を増やしていた。家に誰か・・・彼女を招いているというわけでもなく、彼はひとりで家に居た。

それが何を意味するのか。私は気が気ではなかった。

彼女とうまくいっていないのだろうか。

彼女は彼に、とてもよく似合っている。もし彼が別の女性を好きになったというのなら、それでいい。

だが彼が未だ彼女を愛しているのに、彼女に愛想を尽かされようとしているのなら。

彼はとても見栄えが良いし、優しい人だ。けれど優しさを伝えるということに、不器用なところがある。

何か誤解されるような言動でもしたのではないだろうか？

直接本人に聞くなど、もちろんできるはずがない。だが、気にな

って気になって仕方がなかった。案外一途な人だから、今でも彼女のことが好きなのではないか。いや、そうに違いない。なのに疎遠になりかけているのだろうか。ああ、それならとても辛いだろう。彼のために、何かできないだろうか・・・

悶々と考える日々が続き始めた頃、私は他国の町に来ていた。タワーゲットの情報を集めつつ町を歩いて、それが目に留まった。

藍色の空に飛ぶ、銀色の蝶。螺鈿で細工された蝶は光に反射し、きらきらと輝いていた。小振りな扇形を冠したその簷は、少し地味かもしれない。だが彼女の銀色の髪に映えるだろう。

任務を終え帰宅したとき、彼は不在だった。置き手紙では5日後、帰宅するようだ。

私は明朝、新たな任務に就く。筆をとり、彼の手紙の余白に墨を置いた。

少しだけ逡巡し、もう一文書き足す。

そして私は僅かな仮眠の後、朝靄の中、家を出た。

ネジ 1

好きと嫌いは背中合わせ。どちらを向いているのか、わからない。

だが少なくとも、もう憎んではない。

帰宅したとき、予想通りと言おうか彼女の姿はなかった。何の任務についているのか知らないが、1年ほど前からよく家を空けるようになった。アカデミーの教師がいいところだと思うが、教師でこゝも不在になるものだろうか。以前、医療班にいたと聞いたことがある。あまり役に立っていなかったとも聞いたが、病院にでも勤めているのだろうか。それなら夜勤ぐらいあるだろう。

薄暗い廊下を歩き、居間へと入る。灯りをつけると見覚えのある紙片が目に入った。

彼女は一度も、帰宅しなかったのだろうか？

だが紙片の上に、見慣れないものがある。近寄って手にしてみた。彼女のものかと思っただが、それにしてもなぜここにあるのか。

不審に思いつつ紙片を見ると、自分のものとは違う字。丁寧に繊細な字は今まで幾度も見た。

いつもお勤めご苦労さまです。

8日に帰宅しました。

明日から、新しい任務に就きます。帰宅予定は一月後です。
それから、簪をどうぞ。

・・・？

前半部の言いたいことはわかるが、最後の一文がよくわからない。簪をどうしろと言うのだ？よもや俺に着けると言うわけでもあるまい。だがどうぞと書かれている以上、これは俺に渡しているつもり

なのだろう。

簪と睨み合った。彼女の意図がどこにあるのか問い質すように。

彼女はいつもこうだった。人の顔色を窺いながら、蚊の泣くような声で話をする。こちらが問いかけようものなら肩を震わせ逃げの体勢に入る。だが忍耐強く最後まで聞いたからいいというものでもない。要領を得ない自分の態度に嫌気が指すのか話の途中で自然消滅し、いつも気まずい沈黙が流れた。

彼女には彼女なりの考えがあるのだろう。だが要点を絞って話すという行為が苦手なのだ。相手を気遣い過ぎるが故に、あれも言わなければ、これも言わなければと話が迂回し続ける。その結果、話し相手が苛つき始め、それを感じ取って縮こまるのだ。

そんなに身構えなくてもよいだろうに。びくびくびくびくびくびくびく、一体俺が何をしたと言っのか。

いや・・・したか。身に覚えは、嫌というほどある。

彼女に優しくしようと思った。何度も。だがいつも、失敗に終わるのだ。

不用意な言葉が表情を曇らせるたびに、後悔する。なのにまた同じことを繰り返した。いい加減うんざりして、決めたのだ。今後一切、彼女には関わらないでおこうと。

だが、日向はどこまでも俺を翻弄する。

始めに話 came きたとき、即座に断ろうとした。実際に、そう言ったのだ。だが全ては決定事項だった。俺に選択権など始めからなかった。

仕方なくその日を迎え、仕方なく彼女を招き入れた。彼女も困惑しているようだった。被害者同士、できるだけ仲良くやっていこうかと、彼女の言葉を聞くまでは考えていた。

だが、彼女は言ったのだ。

風呂から出たとき、彼女が部屋にいるのはわかった。律儀な彼女は挨拶をしたいのだろう。仮にも俺は彼女の『夫』となったのだから。

彼女がよろしくと言ったところまでは計算内だった。だが続けた言葉は、想像もしていないことだった。

愛している。

ずっと好きだった。

確かに彼女はそう言った。常の姿からは想像もつかないほど、はつきりと。

だからこそ余計に、それが嘘だとわかった。

くのーは房術をつかう。彼女もその端くれ、術のひとつやふたつ知識はあるのだろう。俺に術をかけてどうするつもりなのかと考えたが、新たに自分が住まう世界をできるだけ生きやすくするつもりでもあったのか。

一度目は回避した。

だが、二度目は・・・

まさかあの人があのような行動に出るとは思わなかった。精一杯平静を装った。どこまで成功したかはわからない。

俺の声が震えていたことに、あの人は気付いただろうか。

冷静になれば、あそこまで言う必要はなかったと思う。

だが、あの時はどうしても我慢ができなかったのだ。

嫌われている自覚はある。露骨に避けられていたのだ。好かれていないはずがない。

父を亡くした動揺、理不尽な怒りの全てを彼女にぶつけた。何年も何年も。彼女のせいなどではないことぐらい、俺にもわかってい

た。だがもう、引き返せないところまで来ていたのだ。自分自身の力だけでは。

中忍試験でやりあった彼女の思い人。あいつのお陰で俺のばかなプライドも砕けた。あの時は気持ちが悪くなった。俺を取り巻く世界が、鮮やかに色を変えたのだ。思っていたより彼女の芯が強いことも知った。他人に流されてばかりだと思っていたのに、ちゃんと自分の意志を持っていたのかと。

これで漸く彼女との関係も変わる。そう、思ったのだ。

だが結局、何も変わらなかった。

ヒアシ様との関係は、少し変わった。会えばお互いに身構えることもなく、言葉を交わせるようになった。だが、『日向』は何も変わらなかった。

連綿と続く歴史で築かれた体勢を、直ぐさま変えられるはずはない。変えたいと願う人が多くなれば、少しずつ変わるものだろう。

俺は、日向を変えることに決めたのだ。

俺を落胆させたのは、彼女だった。

彼女は変わらなと思った。俺のように。ヒアシ様のように。

だが結局、何も変わらなかった。

中忍試験以降、彼女のスリーマンセルがうまくいかなかったことは聞いた。だからだろうか。彼女は余計に卑屈になっていったような気がする。時折見かけても、俯いていることが多くなった。なぜだかわからないが、同期のくの一たちにも避けられているようだ。普段、他人をむやみに卑下することなどないテンテンが、リーの口を上った彼女の名に剣呑な表情を浮かべ、取り付く島もなく切り捨てたことを、妙に強く記憶している。

だが周りに受け入れられないということが、自分を卑下する材料

になるだろうか。

相次いで両親を亡くした。気付いたときには、俺の周りに人はいなかった。与えられるものなど限られていたし、媚びてまで人に添おうとは考えなかった。欲しければ努力して手に入れる。これが俺の生き方で全てだった。

そんな俺から見ても、あの人に与えられたものは多かつたはずだ。忍としての才はなくとも地位はある。自らが立っている場所を利用すれば、俺を始め分家を従わせることなど造作もないはず。少なくとも呪印を結ぶことはできるのだから。

あの中忍試験のときも。

彼女は血を吐きながらも、決して俺の呪印をつかおうとはしなかった。それが彼女の思いやりからきているのか、プライドからかはわからない。ただ俺は、そんな彼女を少しだけ認めたのだ。日向として。

彼女につらくあたることを叱責しつつも止められない自分を悔いていた。申し訳ない気持ちと、なぜやり返さないのかと無責任にも苛つく俺がいた。悪いと感じ、それでも心の端では、彼女を卑小な者だと馬鹿にしていた。あのように覇気のない生き物が、俺と同じ血を流しているのに腹を立てた。同じ日向の性を名乗るのさえ許せなかつたのだ。

けれど彼女は俺の想像に反して、呪印を攻撃しなかった。予想外だった。化けの皮を剥がそうとばかりに、責め立てた。だがやはり、彼女は決して印を結ぼうとはしなかった。

彼女も日向の一族だったのだ。誇り高き血。

それなのに・・・！

二度目に彼女が俺の部屋を訪れたとき、あまりの不甲斐なさに

反吐が出る思いだった。仮にも日向の血を引くものが、恥もなく男の前でその身を晒せるものだ。中忍とはいえくの一として数年を過ごしたのだ。彼女が処女だとは思わない。だが、それとこれとは別問題だろう。任務で体を開くのではない。自分の意志でそうしたのだ。好きでもない男相手に。

あれ以後、俺はこの家に帰るのが嫌になった。生まれたときから暮らしている、亡き父母の僅かな記憶が残る家だ。唯一心安らく場所だった。だが、彼女と顔を突き合わせて暮らすには小さすぎたのだ。

俺は家に寄りつかなくなった。

手にした簪を何気なく動かす。部屋を灯す蠟燭の灯りに反射して、銀色の蝶が羽ばたいた。

・・・そうか。

俺は、家の代わりに花街へと行った。騒がしいのは嫌いだが、他に立ち寄れる場所もなかったのだ。そこで出会ったのがアゲ八だった。

彼女の側は、心地よかった。玄人らしく、俺の中に無遠慮に入り込むこともなく適度な距離を保つ。恋愛感情を持ち込むこともなかった。

彼女は、アゲ八の存在に気付いていたようだったが、それについて何かを言ったことはない。

彼女の愛など、やはり嘘だったということだ。

翌日、久しぶりにアゲ八のところへ行った。彼女の簪を渡すために。アゲ八は少し驚いた顔をして、徐に髪に挿した。

地味かと思っただけだが、彼女の銀の髪を背負って鮮やかに色づく。ヒナタは昔から、こういうことに関しては妙に才のある人だった。

野に咲くありふれた花も彼女の手に掛かれば、華やかに姿を変え床の間を飾った。

「センスのある人ね」

「ネジさん、愛されているわね」

彼女の言葉に、俺は僅かに目を見開く。

ヒナタが俺を愛していると。そんなことはありえない。

「だけどこれは、母親の愛ね。ネジさんに何も求めていない。無償の愛だわ」

無償の、愛。

家路へと向かいながら彼女との会話を思い出す。ヒナタは俺を愛していると言った、それは2年以上も前のこと。そしてアゲハは、彼女の愛は母親が息子に与えるようなものだと言う。無償の愛。だからアゲハに贈り物を用意したのか。俺との仲がうまくいくように。彼女は去り際、二度と来るなと言った。俺も、もう二度とアゲハに会うことはないだろう。少なくともあの、彼女の部屋では。

ヒナタとの息詰まる空間が嫌で逃げ出した。だが彼女が留守がちにし始めた家は、もとの寂しい冷たい木の塊に戻った。

逃げ出すだけでは何の解決にもならない。ふと沸き上がるこの感情がどこからくるのか、目を反らせずに向き合う時がきたのだろうか。

俺は・・・彼女を愛していたのだろうか・・・

ネジ 2

好きと嫌いは背中合わせ。この目がどちらを向いているのか、わからない。

だが、意地を張るのはもう止めた。

俺は、彼女を好きなのだろうか。

改めて考えてみれば、自分の気持ちなどと向き合ったことなどない。一度、じっくりと考えてみるのもいいだろう。少なくとも宗家からもらった嫁を、おいそれと離縁するわけにもいかない。これからあと数十年、共に過ごすのであればいがみ合うよりは愛し合ったほうが建設的というものだ。

・・・愛し合う？俺と彼女が？

はっ、乾いた笑いというのはこういうものだ。

確かに初対面は悪くなった。父親の着物を小さな手で握りしめ、そっと伺い見てきた小さな子。頬をほんのり桃色に染めて、恥ずかしそうに俺に笑いかけた。真っ黒な髪に触れてみたいと思った。小さな手を握りしめてみたいと。橙色の着物がよく似合っていた。

そう、初対面は悪くなった。

では、どこからおかしくなったのか・・・

呪印を受けたときも、父は不憫に感じていたようだが、俺は誇らしいと思わなかった。

父が亡くなったとき、周りは彼女の不甲斐なさ、宗家の理不尽さ

冷酷さを陰で俺に言いつのつたが、俺は聞き苦しい雑音としか感じなかった。彼女はまだ3歳で、だが、一歳しか違わないというのが信じられないほど小さくて、大人の忍に敵うとは思えなかった。そもそも本家への侵入を易々と許した分家にも非があるだろう。事を収めるためとはいえ、宗家の長を差し出すわけにはいかず、同じ顔をした者を差し出すのは理にかなっている。父を失った悲しみの中にあつてさえ、頭のどこかでそうわかつていた。

この時点でも、俺は彼女を嫌っていなかった。
いやむしろ氣遣つてさえいたはずだ。

父は日向一族にとつても、また分家にとつても一族を背負つて立つ者として位置づけられていた。長はヒアシ様であることに代わりはないが、いざ戦いが始まったときには、一族を率いて戦うであろう、強い日向の代名詞となる存在であろうと。

その父が戦いの中ではなく、政策によって殺される。

これは耐え難き苦痛であつたと思われる。

一族の口惜しさの全てが宗家へ、そしてヒアシ様を通り越して彼女へと向けられたのだ。日増しにきつくなつてくる彼女への待遇に、俺は焦りにも似た苛立ちを覚えていた。

物陰に隠れて泣いている彼女を見るたびに、駆け寄つて抱きしめて、安心させてやりたかつた。日向の道場で失敗した彼女を嘲笑する者たちを叩きのめし、何も恥じることなどないと言ってやりたかつた。あなたはあなたの年齢に見合つたことしかできなくても仕方がないのだと、言ってやりたかつた。

だが実際には、俺は何もできなかった。

所詮俺は4歳の子供で、父に手を引かれなければ本家に入入りすることもできない分家の子供だつた。

あの頃、俺の中を占めていたのは怒りだった。彼女への道を阻む者たちへの怒り、一族の掟に対しての怒り、そしてあらゆるしがらみを崩せない自分自身への怒り。

そうか・・・この頃も俺はまだ、彼女に対して負の感情は持っていなかったのだ。

俺は、彼女を好きなのかもしれない。

彼女がアカデミーに入ったとき、俺はとても嬉しかった。当時、アカデミーに通う日向は俺と彼女だけだった。これで日向の目を気にせず、彼女と接することができる。俺はそう思ったのだ。

だが、そろそろ彼女も落ち着いたらだろうと、彼女の教室に向かったあの夏の日。彼女は一際うるさいあいつを、頬を染めて見ていたのだ。彼女があいつに恋していることなど、誰の目にも鮮やかだった。

俺は腹立たしかった。彼女に振り向きもしないあいつが。振り向きもされないのに、相も変わらず見つめ続ける彼女が。出合ったのは俺のほうが先だった。なのに、話すことも近寄ることも禁じ続けた日向が。

何もかもが腹立たしかった。

彼女があいつのどこに恋しているのか。さっぱりわからなかった。落ちこぼれで、いたずらばかりで。教師たちが迷惑しているのも、同級生たちが迷惑しているのもわかっていないのか。とにかく何一つ、人を惹きつけるものを持っていない。

そんなあいつの、いったいどこに恋したというのだろうか。

俺は下忍となった。彼女は一年後、下忍となった。驚いたことに

あいつも下忍となった。

同じ中忍試験で俺たちは再会した。もちろん、あいつは俺のことなど知りもしないだろうが。

彼女は相変わらず、頬を染めてあいつを見ていた。彼女と同じスリーマンセルの仲間があいつに敗れたというのに。試合中も始終あいつを気遣い、試合後は薬を渡した。

あいつは・・・成長しているとは全く思えなかった。

俺は憎いと思った。

全く成長せず、勝ったことが奇跡としか思えないような泥くさい試合を続けたあいつを。そんなあいつを愛おしそうに見つめ続けた彼女を。対戦相手が俺だとわかって、怯えた目を向けた彼女を。すぐさま棄権すればいいものを、俺に拳を向けた彼女を。萎えかけたくせにあいつの声で生氣を取り戻し、俺に白眼を向けた彼女を。血を吐きながらも立ち上がり、向かってきた彼女を。

俺は、憎いと思ったのだ。

あいつは明るくへこたれない打たれ強さを持っていた。いまでは皆が眼を細めて見るような、輝く存在になった。彼女は誰よりも早く、あいつの存在に気づいていたのだ。あいつの輝きに気づいていたのだ。いまとなっては、あいつに恋する者は多く、彼女があいつを求めていたとしても何ら不思議ではない。

俺は・・・俺は、あいつとは違う。

あいつに負けない打たれ強さはあると自負しているが、自慢じゃないが明るくはない。あそこまで底なしに笑い飛ばすことなどできない。危難のときでさえあいつは笑う。アカデミー生のような子供にも笑い、話し、友となるのだ。

そんなこと、俺にできると思うか？

あいつと俺は正反対だ。

あいつに恋した彼女が、俺を好きになることなどないだろう。

そっだ、俺を愛することなど、決してない。

なぜもつと、日向の道場に通わなかったのか。なぜもつと、泣いている彼女に寄り添わなかったのか。なぜもつと、言葉を飲み込む彼女の声を待たなかったのか。

彼女があいつに恋する前に、なぜもつと、彼女の心に入っていけなかったのか・・・

そっか、俺は、彼女のが好きだったのか。

ネジ 3

俺は、彼女のことを好きなのだ。

でもだから、どうなると言っただろうか。
今更、どうなると言っただろうか。

彼女の好きなあいつと俺は正反対なのだ。彼女に好いてもらうために俺があいつのように振舞ったとしたら、下手すれば病院送りだろう。俺はあいつのようにけたたましく、いや、賑やかに笑うことなどできない。型に填められた技を使い、説明のつく行動をとる。あいつのように奇天烈な、いや、突拍子もない、いや、意外性のある行動はとれない。

俺とあいつは正反対なのだ。

だが、彼女の夫は俺だ。いまこの時点で、俺はあいつより何歩も前に進んでいる。

俺は、彼女の夫なのだ。

だが、しかし、裏を返せば、俺は彼女の恋を邪魔する存在だとも言える。

俺は、彼女に憎まれているのではないだろうか・・・？

彼女は俺を愛していると言った。結婚したその日、俺の部屋で、彼女は俺を愛していると言った。

彼女の真意は何だったのだろうか。

俺に愛していると言い、もし、俺が愛していると返したならば、彼女はどうするつもりだったのだろうか。

俺が愛しているなどと言うはずはないと確信したうえで、彼女はそう言ったのだろうか。

いまの俺は彼女を好んでいると言えるが、あの頃、俺は自分の心を誤解し、彼女を憎んでいると思っていたのだ。彼女に告白されてもああいう態度しかとらなかつただろう。俺を知っている者ならば、容易に想像できただろう。

彼女は、俺が彼女を拒絶するだろうと確信した上で、愛していると言ったのだろうか。

俺を牽制するために・・・？

そう考えれば彼女の作戦は成功した。俺はその後、彼女には一切構わなかつたのだから。

いやしかし、そう考えるには引がかかることが一つある。彼女は俺にその身を差し出そうとしたのだから。

あれには・・・驚いた。

まさか、彼女が、あんなに大胆な行動に出るとは思わなかつた。

あの日、俺は久しぶりの休暇を入れていた。彼女と共に暮らすようになってから居心地の悪くなつたこの家から少しでも遠のこうと、任務に任務を重ねていた。だがさすがに疲れていたのだ。柄にもなくリーに説得され、俺は数週間ぶりに休暇をとつた。

秋の日だつた。月がきれいな夜だつた。

やわらかな湯に浸かりながら、窓に差し込む月の光を感じていた。軽やかに虫が鳴く夜だつた。

襖を開ける前から、彼女が部屋にいるのはわかっていた。何をしているのかと訝しんだのを覚えている。白い布団に、白い夜衣を纏った彼女の姿を、枕元に置かれた行燈の灯りが朧気に照らしていた。美しい、と思った。

行燈の作り出す陰影が、彼女を妖しく美しく浮かび上がらせていた。俯いていた彼女が顔を上げる。さらさらと音をたてそうな髪が、彼女の絹糸のような髪が、白い顔を縁取っていた。薄い夜衣が、彼女の身体の丸みを教えていた。こくり、と俺の喉がなったことに、彼女は気づいただろうか。見たい、と思った。その夜衣を剥ぎ取って、触れたいと思った。

彼女は言い募っていた。俺に、必死に。彼女の思いか、日向の思いか。どちらでもよかった。目の前に晒された白い肌に抗うのに、俺は精一杯だった。

彼女が何を言ったのか、正直なところ、俺はあまり覚えていない。

俺が彼女に何を言ったのかも。

酷いことを言った自覚はある。憎いはずの俺にその身を晒し、一体彼女は何がしたかったのか。彼女がこれほど切羽詰って何かをしようとしている。その何かは、あいつの為なのだろう。

憎いと思った。殺してやりたいほど。ここまで彼女を墮とすあいつを、憎いと思った。

そのくせ、差し出されようとした極上の餌に、プライドなどかながら捨ててむしゃぶりつこうとしている獣の俺がいた。

そうか・・・俺は、彼女を愛していたのだ。

そつだ、俺は彼女を愛している。

自覚すると、心が浮き立つような感じを覚えた。外は、秋風に肌寒さを感じる時期だというのに、俺の中は春だった。ああ、なんといいこだらう。俺は彼女を愛している。俺は愛する人と夫婦になっている。

にも関わらず・・・

ああ、なんとということだらう。俺はなんと、自分の謝った認識に振り回され、彼女を傷つけたのだらうか・・・

彼女に愛されているとは到底思えない。好かれているとも。嫌われているのだらう。いや、むしろ、憎まれているのかもしれない。なぜ、あれほど辛くあたったのだらうか。なぜ、もっと優しくできなかつたのだらうか。後悔ばかりが俺を襲う。

俺は、彼女を愛している。

いまとなつては、狂おしいほど、彼女を求めている。

だが、彼女は俺を拒絶するだらう・・・愛してもいない男から告白されたところで、嬉しくも何ともないだらう。

かつて、テンテンが言っていた。好きになつてもらうのはいいことだと言つても、嫌いな男に好きになられることほど、身の毛のよだつことはない、と。

俺は彼女に好かれてはいない。

ならば、俺が彼女に告白したとしても、彼女にとっては気味が悪いだけのことなのだらう。

いま思えば、後悔ばかりだ。

彼女の真意がどこにあったとしても、あの日、彼女が俺を愛していると言ってくれた時に、俺もそうだと言えばよかった。彼女の退路を断つことになったとしても。

いま思えば、後悔しかできない。

彼女の真意がどこにあったとしても、あの日、彼女がその身を差し出そうとしてくれた時に、遠慮なくいただいていればよかった。俺のプライドや彼女のプライドを踏みにじったとしても。

卑怯の誹りを受けたとしても、用意された極上のご馳走に手をつけておけばよかったと、激しく後悔する俺がいた。

俺は、俺のすべてで彼女を愛していた。

信じられないことが起きた。

彼女を好きだと思い始めてから、任務はできるだけ入れないよう
にしていた。彼女の声や仕草や、あの時の白い肌を思い浮かべると、
何も手に着かなくなったからだ。自分の考えに沈み、思い悩み、狼
狽し、懺悔する。そんな頭で何ができようか。俺は、俺の生命と仲
間の生命のために、任務を受け取らなかつた。

だが、人手不足の激しい里で、いつまでも個人的理由など振りか
ざすわけにもいかない。半ば無理矢理に、俺は任務書を受け取らさ
れた。

任務自体は大したことはなかった。山中イノが、捕らえられた雲忍の頭を覗いて探し出した里の忍が、奈良シカマルの予想通りの行動をとることを確かめるだけ、だった。筋書き通りの行動をとる者の後をつけることなど、下忍でもできる。相手が暗部に身を置く上忍でなければ、だが。

俺たちは、多分、暇だったのだろう。お互い進んで口を開くほうでもないのに、珍しく近況報告などをしてしまったくらいには。

俺たちに後を着けられた忍は、奈良シカマルが見越した場所で落ち着いた。そこに誰が訪ねてくるのか、俺たちはずいぶん離れた場所で監視していた。白眼を持つ俺と、虫を操るあいつにとって、対象物から数キロ離れていたとしても、まるで問題はなかった。

そう、任務は大したことがなかったのだ。俺にとって大きな収穫物は、あいつ、油女シノの口からもたらされた。

彼女がずっと好きだったのは、俺だと言うのだ。

なぜだ？なぜ、そんなことが起こりうる。あいつはどうなのだ。あの、うるさく、眩しく輝く、あいつは？

なぜならば、と油女シノは続けた。

なぜならば、あいつは彼女にとって同類で、自分を重ね合わせるだけの存在だと。うまくいかない自分と、うまくできないあいつを重ね合わせ、あいつが諦めていないから自分も諦めない、あいつが頑張るから自分も頑張る。あいつは彼女にとって、自分を鼓舞するための存在であった、と。

では、なぜ、俺なのだ？

なぜならば、と続けた。

なぜならば、彼女はいつでも俺からの評価を気にした、と。

それは、同じ日向だからではないのか。

彼女が宗家であり、俺が分家だからではないのか。

それもあるだろう。だが、それだけではない。なぜならば・・・

二年前。

スリーマンセルを解消した後、滅多に会うこともなくなった彼女と油女シノだが、それでも狭い里内。すれ違うことは何度もあったらしい。彼女は、いつも気まずそうに視線を逸らすだけだったという。

だが、二年前のその日、彼女は一人で歩いていたのだが、とても幸せそうだったというのだ。それは彼女にしてはとても珍しいことだったので、思わず声をかけたらしい。彼女が出てきた店が婚礼物を取り扱う店だったのも、油女シノの興味を引いたのだろう。

彼女は恥ずかしそうに頬を染めて、俺と結婚するのだと告げたのだという。そして、花が綻ぶように笑ったのだと。スリーマンセルとして長年共に過ごした者でさえ見たこともない、幸せそうな、本当に幸せそうな笑みだった、と。

だから、彼女が俺を愛しているのは間違いない、そう確信に満ちた声言で言われた。

ネジ 4

任務はいよいよ手に着かなくなってきた。

彼女が俺を愛している。これほど幸せなことがあるだろうか。

彼女の帰りが待ち遠しくて、待ち遠しくて、待ちきれなくなってきた。精神の統一が図れない。チャクラも満足に練られず、手裏剣を投げる手元も狂った。危なくて修行さえできなかった。書物を読むにも集中力が続かず、丸一日かけて一行も進まない。彼女の任務が終わるのがいつになるのか訊ねたくて任務所に向かうが、守秘義務があったとわずかに残った理性が足を止める。

ああ、いつたい彼女はいつ戻ってくるのだ。

彼女の手紙では、あと10日もある。

そもそも彼女は里内にいつのか、里外にいるのか、それすらもわからない。夫婦間でも守秘義務はある。だが、全く何も言わないわけではない。里の中にいるのか外にいるのか、それぐらいは言い置く。だが彼女の手紙ではそれすらも伺えない。

そうなのだ。俺たちは普通の夫婦にあるべき会話が全くなかった。彼女に愛していると言ったところで、彼女はすんなりと受け入れてくれるだろうか。結婚して2年余り、彼女に不貞を働いたのだ。彼女はいまでも俺を受け入れてくれるだろうか。

こう考えると、いつも憂鬱な気持ちに苛まれる。俺ならどうだ。俺なら許すだろうか。いや、無理だ。だから、彼女も怒っているのではないか。呆れているのではないか、もう俺を愛することをやめ

たのではないか。鬱々とした気持ちに何度も襲われた。

だが、その度、アゲ八の言葉が俺を救った。

そう、彼女は俺を愛していると言ったのだ。油女シノがそう思ったのは2年以上前だが、アゲ八がそう思ったのはつい先日だ。しかもアゲ八は花街の女だ。色恋沙汰に関しては誰よりも明るい。その彼女が断言したのだから、俺は自信を持っていいはずだ。

だが・・・

何も求めていない愛。

そうも言ったが、それはこの際、聞かなかったところにしよう。

少なくともそこに愛はあるのだ。もし彼女がアゲ八が証したように、俺を愛しているが、俺に何も求めていないとしても、僅かながらにも愛があるのならその一点だけを見て突き進んでもいいだろう。

俺は彼女を愛している。

彼女は俺を愛している。

これほど幸せなことがあるだろうか。

いま、彼女が俺をただ愛しているだけだとしても、また、もう一度、俺を求めてくれるように、俺は愛を告げ続けなければならないのだ。いや、まずは許しを請おう。誤解だったと説明すべきか。俺は無骨者で己の心情にさえ疎かったのだと。いやいや、それは男らしくない。言い訳などすべきではないだろう。ただひとつ、謝ればいいのか。彼女もそのほうが喜ぶような気がする。そのほうが受け入れてくれるような気がする。

そうだ、謝って、頭を下げて、そうして愛を告げよう。

彼女の帰りが本当に待ちきれなくなった。

一日一日が、とても長く感じる。

任務を振り分ける者が、わざわざ任務書を手に訪ねてきた。俺があまりにも出向かないので、向こうから任務書がやってきたのだ。だが、他国に潜入する任務書など受け取れるわけがないだろう？彼女が戻ってくるまで、あと7日。任務が早く終わることも十分に考えられる。往復するだけで12日もかかる他国になど行けるわけがない。

俺は即断した。

・・・非難はされたが。

俺の様子がおかしいと、その者がわざわざご注進くださったようだ。翌日には奈良シカマルがやってきた。ああ、頼むからほっておいてくれ。俺はそう叫びたいのをぐっと堪えて招き入れた。しかし、任務は受け取らない、俺は全身でそう訴えていた。彼女が戻ってくるまであと5日。色惚けたこの頭でできることなど何も無い。一日に何十回と、彼女が戻ってきたら自分が言うべきことやるべきことを繰り返しているのだ。余所事など、ほんの微かなことでさえ考えられない。

さすがに察しのいいやつだ。俺の顔を見ながら一杯の茶を飲み、黙って差し出した任務書の任務地は里内のものだった。

近頃、里内の任務が増えたと思う。原因のひとつは、いま目の前にいる3人の子供だ。

ここ数年、下忍の教育は上忍ルーキーに任されていた。人を教えるということ、ここには多くの利点がある。自らの未熟さを振り返り、より高見を目指すためにも有効なことだ。

という理由からかどうかは知らないが、ご多分に漏れず、俺にも3人の下忍が押しつけられた。自分に教育者が向いているとは思えないが、任務ならば仕方がない。とにかく彼らの素質を見極めよう。

まあ、それより先に例の試験となるのだが。

特別難しい試験を課しているわけではないはずだが、今年のルーキーたちは未だ誰一人として合格していない。不合格通知書をアカデミー教師に渡すと、また別の3人の書類を渡された。目の前にいる子供で4回目。いい加減うんざりしてきた。アカデミーでの試験が甘すぎるんじゃないか、そう叫び出したくなるのを必死のところまで押さえている。

通常の10分の1、いや20分の1にまで押さえて動く俺を捕らえるどころか、着いていくこともできない。チャクラコントロールが悪いので、飛び移った木から2人の子供が落ちた。

今回も駄目だな。

俺は早々に見切りをつけた。彼らの悔しそうな表情を見ると僅かに良心が痛むが、いま甘えさせても意味がない。この先忍として任務に就いていく上で、実力が伴わないということがいかに危険か、俺は身を以て知っている。彼らの実力では、下忍のDクラス任務でも危うい。

とぼとぼと去っていく小さな後ろ姿を身ながら、我が身を振り返った。

さすがにあそこまでひどかったとは思えないが、未熟なくせに妙に片意地だけは張っていた。実力も経験もないのに、変に自信だけはあったものだ。世界が狭すぎたから余計に、おかしな自信が持てたのだろう。僅かながらにでも視野の広がった今は、己の実力も客観的に見ることができる。自信を無くす、というのではなく、自分と他人の力量の差を冷静に見られるようになった。

これが大人になる、ということなのだろうか。

それにしても・・・

あの頃の言動を思い出すと、赤面せずにはいられない。あの時は嫌で嫌で仕方がなかった担当教官の寛容さと器の大きさに、感謝している。よくもまああれほど忍耐強く、厳しくも暖かく見守ってくれたものだ。

4回目の不合格通知を出しにアカデミーへと向かいながら、次回は断ろうと強く心に決めた。

どう考えても俺にあの人の真似はできない。つまり人として未熟すぎるんだ。他人の未熟さを甘受できないほどに。

俺が渡した紙を見ながらアカデミー教師は、ああやはりな、という顔をした。やはりと思うような者を寄越すなど言いたかったが、静かに飲み込んだ。思ったことをすぐ口にしないということと、皮肉屋を卒業できるくらいには俺も成長した。

5回目がかかるか、と僅かに身構えた俺に彼は笑って首を振った。そして、火影の部屋へ行くようにと告げた。

新しい任務だろうか。ここ数日、子供の試験ばかりだったのでそれから解放されるのは正直嬉しいが、一つ気がかりな事がある。彼女の帰宅予定が明日なのだ。

そう明日。

お互い忍。予定はあくまでも予定で、いくらでも狂うことはわかっているが、それでも踊り出す気持ちを抑えられない。漸く会える。

「ネジ、なんだか嬉しそうですね。いいことでもありました？」

2日前、偶然アカデミーで擦れ違ったりに言われてしまった。顔に出しているつもりはなかったのだが、スリーマンセル時代からの仲間はごまかせないということだろうか。改めて気を、というか表情を引き締めた。

こんなに誰かに会うのを、楽しみにしたことなどかつてなかった。

火影の部屋へ行くと、そこには見知った顔がいくつもあつた。先程思い浮かべたガイにリー、俺と同時期に上忍となつたサスケにナルト、火影補佐として里の中核に早くも座つたシカマル、ヒナタのスリーマンセル仲間だつたキバにシノ、そして今では一人の忍として以前の部下たちと共に任務に就くカカシにアスマ。彼らの他にも上忍や特別上忍たちばかり、俺を含め総勢20名。彼らは皆、なぜ集められたか知らされていないようだつた。ただこのメンバーで何かをするのだとしたら、任務の困難さは杳として知れる。

さすがに、シカマルだけは何かを知っているようだつた。ただ火影が現れるまでは口を開くつもりがないのだろう、訊ねられても言葉が濁っていた。

だが俺は、奴の視線が気になつた。

何かを言いたそうで、言いにくそうで、気遣うような視線で俺を見た。

とても、とても、嫌な予感がした。

火影が現れ、水を打つたように静まる。彼女はゆっくりと部屋を進み、俺たちの正面に立つた。集まつた全員を見渡すと、静かな声で任務を告げた。

「なんでヒナタが、暗部なんかにいるんだ？」

呆然とキバが呟く。この場にいる誰もが疑問に思うことだった。

「俺も今日知ったが、1年前からだそうだ」

「1年!? あいつ、1年もいたのか？」

シカマルの情報にも、キバは納得がいかない。自分の知っているヒナタは、暗部などで一日も生きながられる少女ではなかった。

「・・・ネジ、あんたも知らなかったのか？」

シノの静かな声に、ネジは無言で首を振る。部屋がまた静まりかえる。彼らの結婚はあまりにも質素だったため、この場にいる多くの者が二人が夫婦であることを、今、始めて知った。

「・・・とにかく、時間がない。4班集体で動く、班内の動きはそれぞれの隊長に任せる」

全員の視線がシカマルに集まる。火影は常にいくつもの案件を抱えているため、任務だけを告げて退室した。今回の指揮権の全てはシカマルが握る。上忍となつてから、彼自身が里を出ることは激減したが、里の最重要事項で彼が関わっていないことも稀となった。

「暗部第7部隊が定期報告を絶つてから5時間が過ぎた。・・・最後に報告があつたのが、ここだ」

床に直接広げられた地図の一面を指し示す。

「第7部隊の任務はある巻物の探索と、多分他国にあるだろうそれを奪つてくることだった。巻物は手に入れたと報告されたから、この地点から木の葉に向かう間に部隊がいるはずだ」

「・・・巻物って、何だ？」

「Sクラスの任務だからな、詳しくは話せない」

「S!? ヒナタがいて、Sなんてやれるのか？」

「・・・キバ、この際だから言っておくが。お前の知っている日向ヒナタだと思わない方がいい。俺も情報だけで実際に見たわけで

はないから確かなことは言えないが。・・・データだけでみてもこの一年、第7部隊はAクラスが3、Sクラスにいたっては7つの任務に就いている。しかも任務遂行率が8割を越えているんだ」

「・・・異様な数だな」

自身もかつて暗部に席を置いたカカシには、その数の異常さがわかる。ランクが上がれば任務に掛ける日数が増えるわけではない。だが確実に危険度は上がる。カカシも以前暗部にいた頃は、例え3日で終わる任務であっても、その後の休養に半月を要した。死地を潜り抜けた後、僅かな期間でまた任務に就くということが人の精神にとってどれほど危険か、暗部という世界は教えてくれた。何人、何十人の狂人をつくりだした末に、里の得た教訓だった。

「特例中の特例だ。普通ならば一年に、Aクラスに5個も就けばよく働いた方だろう。Sなんて2つもやれば十分だ」

この場にいる何人かの暗部経験者も、シカマルの意見に頷いた。「だが知つてのとおり、6年前の木の葉崩しからこの里はまだ完全に立ち直っていない。諸国の信頼を得ていくためにも、任務を選べれる状態じゃないんだ。かといって、あるとき失った忍の穴を埋められるほどの、数も実力者も育っていないのが現状だ。今の暗部隊の任務遂行率平均は5割、その中で第7部隊の8割という数字がいかに貴重かわかるだろう？」

今の里の状況で、この任務は無理だと言つのは容易い。大事な忍を失わないためにもそれが正しい選択だ。だがそればかりでは、いつかは依頼者にそっぽを向かれる。里が十分な力をつけて改めて周りを見てみれば、信頼の全てを失っていた、それでは意味がないのだ。初代から地道に任務を遂行し得てきた近隣諸国からの信頼は、何者にも代え難い木の葉の宝だ。少し無理をしても受けた依頼をできるだけ着実に完了するために、第7部隊に白羽の矢が立ち続けたのだろう。

「ヒナタは、医療スペシャリストにでもなつたのか？」
ネジが僅かに浮かんだ可能性を呟く。

「・・・違う。・・・俺も信じられないが、相手が子供だろうが何だろうが構わず・・・殺っているらしい。暗部にいく前、ヒナタと一緒に任務に就いた奴が言うには、全身に返り血を浴びたとしても顔色一つ変えず、戦う様が鬼のようだったと・・・」

ヒナタを知る誰もが、信じられないという表情を浮かべた。普段、表情を変えることなどないシノでさえ、僅かに顔を歪めた。

「さつきも言ったが、4班でいく。巻物が奪い返されている可能性が高いからな、ひとつは巻物の所在を追ってくれ。残りの3班は共に行動して第7部隊の搜索。敵がまだいるかもしれないから、1班は実働部隊、もう1班は医療部隊。・・・残りの1班は、死体処理班だ」

シカマルの最後の言葉に、ネジは息を呑む。彼女の『今』があまりに想像し難く、夢を見ているようだった。だが、彼女自身に真実を確かめるにしても、ヒナタが今もどこかで息をしている保証はないということ、改めて思い知らされたのだ。

搜索にはネジとキバ、そしてカカシの犬が全面に立った。彼らの大凡の行程はわかったとしても、それが確実だとは誰にも言えない。危険を避けるため、迂回していることなど十分に考えられる。

時間が経てば経つほど、彼らの生存率は下がるだろう。暗部が消息を絶つという事は、そういうことなのだ。

ふと、前方に行く赤丸の足が止まった。小さな子犬も、今では立派にたくましい成犬だ。

「見つけたのか!？」
ネジがキバに駆け寄る。

「わかんね。・・・だが、すっげー血の臭いだ」

この先と指さした方向に、白眼をつかう。覚悟はしていた。だが一番見たくはなかった光景が、ネジの目に飛び込んできた。

「・・・どうだ？」

「約1キロ先、複数の死体が転がっている」
感情を抑えた声で告げると、ネジは全速力で駆け出した。
まだだ、まだ望みを捨てる気はない。この目で見て、この手で確かめなければ諦める気などない。
背後から仲間が着いてきているかどうかなど確かめもせず、ネジは走り続けた。

そこは、血の海だった。

かつて人であったものがいくつも、いくつも転がっている。最大の5人体勢で組まれた医療班の出る幕はなく、同じく5人体勢で組まれた死体処理班だけが動き続けた。何人いるのか想像もつかない人、というより、人を成していただろう部品が赤い水溜まりに落ちていた。

まだ修羅場に慣れていない者が、耐えきれなかったのか草むらに駆け込む。咳込み嘔吐する声を聞きながら、キバは辛うじて平静を保った。目の前に広がる光景より、彼の鼻にはこの場に漂う臭いの方がもつと耐え難い。だがチャクラを鼻に集中させることだけは、止めなかった。噎せ返る血の臭い。この中に懐かしい少女の香りが混ざっていないか、彼もまた、希望は捨ててはいなかった。

「大丈夫か？」

何気なく掛けられた声に、ネジが振り返る。そこにはカカシが立っていた。相変わらず片目しか見えないせいで、表情は読みとり難い。しかしその声音から、彼が少しも心乱されていないことがわかる。さすがに暗部か、妙に冷めた頭でネジは考えた。彼を永遠のライバルだと豪語するガイや、リー、サスケ、ナルト、シノの5人はこの場にいなかった。彼らはいま、奪われたかもしれない巻物を追っている。

「まだこの中に、ヒナタがいるとは限らない」

「・・・そうだな」

短く交わす会話の間も、ネジの白眼は開眼したままだ。この状況では忍犬やキバの鼻より、自分の白眼が頼りだとわかっている。

まだ、何も伝えていない。彼女がもてる勇気を総動員して伝えてくれた想いに、卑怯にも逃げた。今度は自分から向き合って、目を見て話して、正直な想いを伝えたい。そして彼女が寛大にも許してくれるのなら、応えてくれるのなら、思いっきり抱きしめて絶対に離したりしないのだ。そう決心したばかりだというのに、なぜこんなことが起きてしまったのだ。ネジは不安と後悔に押し潰されそうになりながら、泣きたくなるのを必死に堪える。

冷静になるんだと、何度も自分に言い聞かせヒナタを探した。今できる最善の方法を、実行していた。

周囲を隈無く探した。360度、注意深く視界に入れながら徐々に距離を伸ばす。やがて、500mを超えたところでネジの目が新たな赤を捕らえた。

駆け出すネジに、キバとカカシも動く。そこはもうひとつの血溜まり。だがこちらはちゃんと、人の形をしていた。遺体はふたつ。

「・・・ヒナタじゃない。あつちは木の葉だが、男だ」

彼らから距離を置いて3人は止まった。死体に見せかけて、ということもあれば畏が仕掛けられていることもある。死体だからと不用意に近づくことは危険だった。

死体がヒナタではなかったという安心と、見つからないという落胆にネジの顔が曇る。

「ぜってー、生きてる。悔しいが、この臭いじゃ俺の鼻は役に立たない。お前の白眼だけが頼りなんだからな！」

キバがネジの背を、ばんと強く叩いた。手加減なしで一瞬、息が詰まったがお陰でカツが入った。

ネジは微かに笑むと、また白眼をつかい始める。

「・・・ところでな・・・」

そんな二人を横目で見つつ、どこかのほほんとカカシが口を開いた。

「あの死体の下。もひとり、いない？」

肩からばさりと、ほぼ真つ二つに切られた木の葉の男の死体の下。現れたのは、小さな顔。彼らのよく知る、白くて小さな顔だった。ネジが震える手で、華奢な体を抱きしめる。冷たい体は、濡れた血のせいだと思いたい。ゆっくりと指を、細い首筋に添わせる。そこに微かだが、確かな動きを確認し、ネジの目から涙が一粒零れた。医療班を呼びに駆け出したキバの、カカシを罵倒する声がどこか遠くで聞こえる。

「よかった・・・もう、大丈夫だ。よく、よく、がんばったな・・・」

ネジは何度も囁きながら、小さく浅い息を繰り返す青ざめた唇に口吻けた。

木の葉で生き残ったのは、ヒナタひとりだった。

ヒナタは何日も、生死の境を彷徨った。幾度か呼吸が止まり、その都度、もうだめかという空気が白い部屋に流れたのを、ネジは感じ取った。親族だからとただ一人病室に入ることを許されたが、慌ただしく動き回る医師や看護師の中で、彼らの邪魔にならないように壁に張り付くことしかできない無力な自分に、血が出るほど拳を握り絞めた。

やがて灰色の空から真っ白い粉雪が舞い始めた頃、彼女の病室は静かになった。部屋を埋め尽くしていた機器が一つ二つと姿を消し、扉に付けられていた『面会謝絶』の札は取り外された。訪れる医師や看護師の回数は少なくなり、代わりに知己の者たちが顔を覗かせた。

だが彼らが交わす静かな会話に、ヒナタが加わることはなかった。白い床、白い壁、白い天井。窓から見える景色まで白い。そんな中、白い寝具に横たわる彼女の相貌も白く、清廉なまでに白いこの世界に溶け込んで、今にも消えてしまいそうだ。ただ、彼女の艶やかな黒髪だけが色鮮やかで、唯一ヒナタをこの世に留めているものようだった。

彼女は眠り姫のように、昏々と眠り続けた。

知己の顔に混ざり、招かれざる客も訪れた。木の葉の重鎮たちである。

結局、巻物は見つからなかった。ヒナタ以外、敵も味方も、生き残った者はいなかった。あつたのは大量の死体だけで、情報は何もなかった。彼女以外、あの場で何が起こったのか知り得る者はいなかったのだ。

呼吸も脈も不安定で苦しむ人を前に無体を働く者は少ないが、た

だ眠り続ける彼女に段々と余裕を無くしていくようだった。ネジが止めなければ華奢な肩を鷲掴み、無理矢理にでも起こそうとする者さえ現れた。

静かなのは、ヒナタの部屋だけだった。

普段見るはずもない重鎮や火影補佐役、そして五代目火影自身を病院内で目にする度、ネジの心に不安の影が広がった。ヒナタが今こうして生きているのは、五代目のお陰である。だが安定している今でも、彼女が姿を現すことに奇妙な違和感を覚えるのだ。火影はヒナタを見舞っているわけではない。彼女の容態を気に掛けているわけでもない。ただヒナタが目覚めたとき、彼女の第一声を聞き逃すまいとしているようだった。

理由はわからない。聞いたところで答えるとも思えない。消えた巻物が鍵を握っているのだろうが、あれに何が書かれていたのか知らない以上、推測することさえできない。

日増しに焦りを増していく顔を隠そうともしない彼らにヒナタが危害を加えられないよう、ネジは彼女の側を離れなかった。

「凶悪な顔、してるぞ」

重鎮とは言えないがそれでも里の中枢近くにいるシカマルも、毎日やってきていた。相変わらずやる気を感じられない顔をしているが、その頭には里の機密事項が整然と詰め込まれているのだろう。今回の事態も全て知っているのだろうが、その素振りさえ見せない。苛立つ空気を撒き散らす者たちとは対照的で、ネジは改めて彼の大器を思い知る。

この男はどのような脅しをかけられようが、例え死の淵に面したとしても口を割ることはしない。

ネジも無駄なことではない性分だ。彼らの間で、消えた巻物が話題に上ったことはなかった。

「八エが煩くて、かなわん」

「ま、仕方ねーだろ。きれいな花に虫が集るのは」
ネジがじとりと睨め付ける。

「・・・睨むなって」

シカマルが例え話をしたということとはわかつている。だが彼女の容貌について言っているということにも、気付いていた。

ヒナタは、綺麗になったと思う。本当に美しくなった。もともと整った顔立ちをしていたし、かわいらしい子だったが、今は花のようだ。自己主張の激しい鮮やかな花ではなく、そう、月夜に輝く月下美人。ネジは一度だけ、その花を見たことがあった。

一年に一度、ただその一夜だけに咲く、神秘の花。月下のもと、まるで花自身が光を放っているかのように白く煌めいていた。

彼らが夫婦となって何年もの月日が流れたが、ネジが妻の顔をこんなに長い時間、正面から見ているのは初めてだった。眠る彼女の姿は美しいだけに、精巧に作られた人形なのではないかと思わせる時々、ネジはその柔らかな髪を梳いてやり、少し痩せた頬に手をあて、そこに広がる確かな暖かさに安堵した。

「親父さん、来てんだろ？」

「ああ」

「毎日か？」

「・・・ああ」

ヒナタが里に戻ったときから、ヒアシは毎日病院に通っていた。名門日向一族を束ねる宗主として、彼も里の中核にある。今回のことは事後知らされたようだが、姿を現しては何も言わず彼女の枕元に座るヒアシに、ネジはざわつく己を必死に止める。ヒナタが背負う影の半分が、この男のせいだと思つと平静ではいられなかった。もちろん残りの半分が自分のせいだということも、嫌というほど認識している。

「・・・何をしに、来ているんだか」

「心配してるんだろ」

「まさか・・・」

あの人に限って、そんなことはない。続く言葉を飲み込んだ。

自分に土下座してまで謝罪したとき、ああこの人にも人の血が通っているのかと思った。だが曲がったことを極端に嫌う、あの人の流儀に反していたからではないのか。弟が死に、その事実がねじ曲がって甥に伝わっていることが、許せなかっただけではないのか。そう感じる。

ネジも、ヒアシの信条に添うところはあつた。まっすぐ自己を律して生きようとする、叔父の姿は嫌いではない。ただ彼のその生き様が、今では最愛の妻となつたヒナタを苦しめているのが許せないのだ。

彼女が元気になつて退院したら、日向のあらゆる呪縛から自らの力の全てをつかつて、守つてやるう。ヒナタの前に立ち、この両手を広げて、義父から流れる冷たい風を防いでやるう。出来損ないだと公言して憚らない娘に、彼から近づくことなど考えられないからさほど難しいことではないはずだ。

そう決心していたのに彼女が目覚める前から、毎日毎日、毎日毎日、無表情でやってくる。一体何がしたいのか。ヒアシも、彼女の口から漏れる巻物の行方を知りたいのだから、はつきり言つて迷惑だつた。手土産もなければネジに挨拶を向けるわけでもなく、ただ無言で重い空気を纏い付かせたまま一頻り、ヒナタの顔を覗き込んでいくのが不快だつた。彼女がいつまでも目覚めないのはこのせいではないのかと、ネジは思い始めていたのだ。

微かに人の気配を感じ、ネジとシカマルは振り向いた。そこにはヒアシの姿があつた。静かに交わされていた彼らの会話は聞こえていなかっただろうが、相変わらずの無表情で入ってくる。シカマルに僅かに会釈し、立ち上がったネジが今まで座っていたヒナタの枕元の椅子に、当然の如く腰掛けた。

そしていつものように陰湿な空気を背負つたまま、無言で彼女の顔をじつと見つめる。そんなヒアシの背を、『不快』と顔に張り付

けたまま、無言でネジが睨みつけた。

一人の眠り姫と、三人のいい大人が、決して広くもない部屋に詰め込まれ、誰一人口を開くこともなく、無言で時間が過ぎていく。さすがに空気の重さに耐えかねたシカマルが部屋を出ようと椅子から立ち上がったとき、ふわりと、やわらかな風が通り過ぎた。

何気なく振り返れば、食い入るように見つめるネジとヒアシの視線の先で、ヒナタの長い睫毛が揺れた。

そしてゆっくりと、花が綻ぶように神秘の瞳が現れた

静かな彼女の部屋は一変し、狭い室内で十数人がひしめき合った。ネジは退室するよう命じられたが、頑として聞き入れなかった。無理矢理、身を起こした彼女の背後に、ぴたりと寄り添う。彼らが本気で向かってくれば自分など、ものの数秒も保たないだろうが譲る気はなかった。

「これは一介の忍ごときが聞いていいような話ではない。出ていけ」

「後始末に20人が動いた。事はもう、我らの中だけで収まりはせん。それにネジとて忍、口は堅い。心配せんでも、殊更公言して廻るようなことはないだろう」

初老の男が吐き捨てるのを、火影補佐役の一人が宥める。

「確かに。あれほどの人数が動いたのは、ここ数年ない。極秘に進めたとはいえ、里の者も何かを感じているはずだ。それに、我らが雁首揃えてこうも出歩いていれば、隠しようもない」

笑いを含んだ火影の一言で、ネジの在室が認められた。

「巻物は、小さな祠の中になりました」

息の詰まりそうな室内で、ヒナタのか細い声だけが聞こえた。

「封印をされていたような名残がありました。札はぼろぼろで印の字も読めないほどでした。隊長が巻物を手にし、その場を去ろうとしたとき、雲忍が現れました。あちらは3人でしたので隊長とカズと私で対応しました。巻物はサクが持ち、副隊長と共に里へ向かいました」

いくつも重ねた枕に背を預け、ヒナタは浅く呼吸を繰り返した。声に力はなかったが、彼女の呼吸ほど乱れることもなかった。

「隊長が二人、私とカズで一人を倒し、彼らを追いかけました。」

ですが、音忍が待ち伏せていたんです。6人……いました。私たちが追いつく前に戦闘が始まり、サクが倒され巻物が持ち去られました」

「では巻物は音忍が!!」
身を乗り出した一人を、シカマルが制す。

「副隊長が後を追いました。私たちもすぐに合流し、音忍の行く手を塞ぎました。サクと副隊長が4人倒していましたので、あちらは2人。副隊長も深手を負い……息を引き取りましたが、隊長以下3名、難なく奪い返せるはずでした」

青ざめていくヒナタの脈を火影がとる。秀麗な眉が顰められたが、そのまま話は続けられた。

「倒した雲忍には仲間がいたようです。私たちが対峙している中、新たに3名現れました。三つ巴となり、誰も動くことはできません。時間だけが流れました。長かったのか、短かったのか、……とても、長く感じました。やがて音忍の一人が倒れました。彼は深手を負っていたのです。これで音忍は一人となりました。均衡が破れる、そう思ったとき音忍が巻物の紐を解いたのです」

「……なんだとっ!?!」

静かに聞いていた火影が、声を荒げた。思わずネジと、そしてヒアシが身構えた。

「一瞬でした。強い風が吹いたと感じたときにはもう、音忍は生きていませんでした。血と、肉が飛び散って……その上に獣が立っていました」

「何が……出たんだ?」

ネジは火影と、その後ろに従う者たちの顔を見渡した。彼らは巻物に固執していたが、その中身について知っていたわけではなかったのか。木の葉に雲に音。三つの里が争奪戦をしたというのなら、それ相応の代物だ。

「大きな、とても大きな犬……いえ、狼と言った方がよいでしょう。真っ黒な体で鋭い牙と、爪を持っていました。獰猛な顔で

唸り声を上げ、とても大きかった。・・・人の言葉も、話していません」

「奴は何と言った？」

「漸く出られた、感謝する、と」

火影が短く舌打ちする。

ヒナタたちが見つかったのは、火の国境の森だった。火影たちは国境のどこかにある巻物に、化け物が封印されていることを知ったのだろう。どういう化け物で、しかも、ここまで強大なものだとは思っていなかっただろうが、万が一封印が解かれるようなことがあれば火の国に危害を及ぼす。そうさせないためにも、巻物を手元で保管することに決めたのか。

それにしても・・・

ネジはもう一度、火影たちを見渡した。

話を聞いているだけでも、暗部5人では手に余る相手だ。封印された化け物を、甘く見過ぎたようだ。彼らの不手際に、心中で皮肉に口元が歪む。彼女の同期である、うずまきナルト。彼の腹に九尾の狐が収まっていることは、仲間内ではすでに周知の事実であった。自分たちの年代ならともかく、彼らの年代なら未だ記憶に鮮やかなことだろう。あれほど甚大な被害を出したのだ、薄れるはずがない。その記憶を持つてなお、この体たらくだ。彼らの認識の甘さが、ヒナタに生死の境を彷徨させたのだ。

怒りの炎が、ネジの体内で暴れ狂った。

「チャクラが具現化していて、圧倒的な力の差を感じました。雲忍が二人、前足の一降りで薙ぎ倒されました。身構える間も、声一つ出すこともできません。絶対に敵うはずがないと、覚悟しましたが隊長が・・・」

ヒナタの肩が、僅かに動いた。その強ばりをほぐすように、ネジ

がそつと手を置く。

「隊長が、私たちに逃げろと。躊躇する私の腕をとり、カズが走りました。・・・隊長は、足止めになつてくれたのです。残りの雲忍が付いてきていましたが、構わず走りました。でも、すぐに追いつかれ・・・後ろで重い音がして振り返ると、血飛沫が舞い上がっていました。・・・もう、無理だと。獣の前足が目の前で上がっていましたから、もう一度、覚悟を決めたんです」

一呼吸、置いた。

「・・・無理だと、立ち止まった私の前に、カズが飛び込んできました。彼を切り裂く獣の爪が、私の肩も切り裂いていきました。・・・それで、全てです。その後の記憶は、何もありません」

「化け物は、どこへ行つたんだ？」

「わかりません。私には、自分が倒れたという記憶も残っていないのです」

ネジも目の当たりにした人の形も成さない遺体の、これが真相だった。

「わからぬだと！？これでは何の情報もないに等しいではないか！何度も諦めおつて、それでも暗部か！この役立たずが！！」

「おやめ！！」

ヒナタを罵る側近の声に、火影の鋭い叱責が被さる。ただ彼女が本当に止めたのは側近か、白眼を開眼させたネジか、定かでなかった。半身を背後に控える者たちに向けながらも、その鋭い眼光はネジを見据えていた。

「強い者ほど、敵の力量を的確に図ることができる。ヒナタが潔く抵抗を止めたからこそ、我らは優秀な忍を一人、失わずに済んだんだ。それに、これはどうみても我らの落ち度だ。3代目が亡くなられてから安穩と暮らしてきたとは言わないが、日々に忙殺され、大事なことを忘れたようだね。・・・お前は、かつての狐に一人で立ち向かうことができるのか？」

狐の一言で電流が走つたように、その場の空気が締まる。

「案じずとも、そこまででかけりや隠れることもできんだろ。用事があれば向こうからやってくるだろうし、無けりや消えたままだ。・・・ただ、里の警備は強化しろ」

火影たちが去り、妙にがらんとした室内にネジと、ヒアシだけが残った。なぜヒアシまでここにいるのかネジには不審だったが出ていけと言えるわけもない。壁に凭れるようにして、椅子に座るヒアシの背を見ていた。

ヒナタはベッドに身を横たえていたが、その大きな瞳は開かれたまま空を見つめていた。唯一安否のわからなかった隊長の死を教えられ、彼女は仲間の全てを失ったのだと知った。それでも涙の一粒見せることなく、落ち着いていた。聞かれる質問にも丁寧な答え、一度も取り乱さず、罵声を浴びせられたときも怯えることはなかった。

気丈だと、思った。ネジの知る、芯の強い彼女の姿がそこにはあった。

だが火影たちが去ったいま、抜け殻のようだ。表情はなく、空虚な瞳は人形に似ている。彼女が萎縮して止まない父が側にいることにも気付いていないのか、臍氣に天井を見ていた。

いつのまにか、窓から見える景色は白から黒へと変わっていた。ネジは開け放たれたままだったカーテンを引こうと、窓辺に近寄る。柔らかな布地に触れ、手を止めた。

ヒナタが、窓に映る自分の姿を見ていた。

「・・・あの人、生きろってぼつり、と言った。」

「お前は、生きろって言ったの」

誰かに聞かそうと思って口にはしていない。

「カズのほうが、強かった。あの人なら逃げ切れただろうに。私

を庇って、生きろって……」

ゆっくりと身を起こして、窓に映る自分に向かい合う。

「生きろって言ったの、生きろって。私は、私は死んでもよかったのに。私など、死んでもよかったのに。……どうして、そんなこと言ったの？」

小さな右手が握り絞められる。ヒナタは左肩から右脇腹にかけて、切られていた。そのせいで彼女の左腕は自由に動けないままだ。

「どうして、あんなことしたの？庇う必要などなかったのに。私など捨てて、逃げてくれてよかったのに。どうして、助けたりしたの？」

白い瞳から透明な水が溢れ出す。ヒアシが背後から、躊躇いがちにその背に触れた。

「……どうして生きているの。みんな死んだのに、どうしてお前だけ、生きているの……」

ヒナタが憎しみの表情を浮かべるのを、ネジは始めて見た。ヒアシも同じなのだろう、その目が驚愕に見開かれる。彼女が誰かを嫌うのを、そして『お前』などと言うのを誰も知らない。

「どうして、どうして、どうしてお前が生きているの！お前だけ、生きているの！あんななんか、死んでしまえばいい！！」

どこにそんな力かと思うほど、ヒナタは手にしたものを遮二無二窓に叩きつけた。派手な音を立ててガラスが砕け散る。ヒアシが抱きすくめるその腕から逃れようと身を振り、僅かに出来た空間で包帯の巻かれた自分の傷を打ち据る。何度も何度も、自由に動く右手で。ネジが華奢なその腕を止めるまで、手加減なく打ち続けた。包帯から滲み出た赤い血が白い着物を染め、鮮やかな花を咲かせる。

騒ぎを聞きつけ入ってきた医師に鎮静剤を打たれるまで、彼女の慟哭は続いた。

冷えた廊下の冷たい椅子に、ネジとヒアシは並んで腰掛けた。処置室の曇りガラスに映る人の影が動くのを、二人はぼんやりと見る。傷口は開いたが、命に別状はなかった。ただ彼女の心の傷は、目に見えるものより酷い。そしてその傷の多くが今回付いたものではなく、彼らが何年にも渡って振り下ろした刃によるものだということを思い知った。

「ヒナタは、死ぬつもりだったのか・・・」

ヒアシの吐く息は白かった。

「死ぬつもりで、暗部に入ったのか」

ヒアシの声に、いつもの強さはなかった。

「・・・お前たちが結婚して半年が過ぎた頃、ヒナタが私を訪ねてきてな、お前を自由にさせてやって欲しいと言ったのだ。・・・知っておったか？」

初耳だった。

「呪印を消すことはできんだろうがこれ以上、日向に縛らないで欲しいと。もし自分が死んだら、その後は誰を娶ろうが、それが例え日向の者でなかったとしても好きにさせてやって欲しいと言ってきた」

ネジは驚いてヒアシを見た。彼女がアゲハの存在を知っているのは感じていたが、まさかそんなことを考えているとは思ってもみなかったのだ。

「それで、了承したのですか？」

「ああ・・・深く、考えなかった。忍を辞めておったし、何十年も先のことだと思ったのだ。復帰したと聞いても、アカデミーの教師が事務をしているのだとばかり・・・暗部にいたことも、此度の件で始めて知った」

「・・・俺も、同じです」

重い溜息が二人の口から漏れた。

「ネジ・・・別れたいか？ヒナタと」

ヒアシは俯いて、両手の親指を眉間に押しあてていた。声は平靜

だったが、表情は見えない。

「俺は、あの人に甘えていました。ヒナタが与えてくれるものや、寛大に許してくれることにも気付かず、受け取っていた。許されるなら……いえ、例え許されなかったとしてもヒナタに何度でも詫びて、もう一度やり直したい」

ヒアシに向き直り、ネジはきつぱりと言い切った。

「……本当か……？」

「はい」

迷いのないネジの返答を聞き、ヒアシは顔を上げた。頭上から照らす廊下の灯りが、顔の皺をより深いものに見せている。滅多に表情の現れないその顔に、僅かばかり残念な色が浮かんでいた。

「……本当に、本当なのか？お前もまだ若い。無理にやり直さなくとも、まだまだいくらでも取り返しがつく。それに好いたおなごがいるのだろうか？私も、それくらい知っておる」

「本当に、本当です！……それにアゲハのことをおっしゃっているのですから、ご心配は無用です。あなたもご存じのとおり、花街で本気になるほど馬鹿げたことはない。俺もその辺のところは弁えているつもりです。……それとも、俺がヒナタとやり直すことに何か不都合でもあるのですか？」

ネジは、確信を揺さぶった。なぜだかわからないが、ヒアシは自分たちが別れることを望んでいる。

「不都合というのではない……ただ、私もやり直したいと思っただけだ」

「何をです？」

「だから、ヒナタとの関係をだ」

ヒアシは照れたように、ふいと視線を逸らした。

「お前がもし別れるというのなら……私は宗主をハナビに譲ってヒナタと二人、どこか日向から離れた一軒家でも借りて暮らそうかと考えていた」

ネジの眉間に皺が寄せられる。

「あれは何も言わんから・・・私もお前と同じだ。ヒナタに甘えていた。強くなつてほしいという親心からとはいえ、酷なことをいくつもした。今思えば、ヒナタほど優しい娘はおらん。ハナビが優しくないとはいわんが、何分あいつは私に似てきついところがある。ヒナタは、本当に心根の優しい子だ。弱くても、そういうところを見てやればよかった。・・・私はヒナタの父親だ。あの子の逃げ場所になつてやらねばならなかったのだ」

「あなたがそう思っているのなら、いくらでもやり直すことができます。ヒアシ様も、ヒナタも生きていますから。・・・でも、渡しませんよ」

「無理はせんでいいぞ」

「してません」

「では、こうしよう。ヒナタの傷が癒えるまで、私が面倒を見よう」

「結構です。傷ついた妻の身の回りの世話を、夫がするのは当たり前のことです」

「お前も任務があるだろう？」

「休みます。幸い、今は何の任務にも就いていませんから。新たに命じられる前に休暇願いを出しておきましょう」

「・・・心の狭い男だ。こんな奴にやらねばよかった・・・」

ぼそりと呟いたヒアシの言葉は、しっかりネジの耳にも届いていたが黙殺した。父の決意は、困惑しつつも喜ばれながら娘に受け入れられることだろう。だがいまは自分の決意の程を見せたかったし、ネジ自身がヒナタに受け入れられたかったのだ。

夜の廊下で静かに激しい戦いを繰り広げていた男二人はしかし、ヒナタの心の傷を本当には理解していなかったのだ。

ヒナタの傷の処置はその夜のうちに終わり、翌日にはもとの病室

に戻された。朝日の中、目覚めた彼女を何人もの人間が見下ろす。

誰もが、ヒナタがまた取り乱すのではないかと身構えた。

だがヒナタが慟哭したのはあの夜、一度きりとなった。

その日を境に彼女の心は、硬く閉ざされたままだ。

ヒナタが入院して一月が過ぎた。

彼女の心は硬く閉ざされたままだった。

ヒアシは毎日やってきた。始めの頃とうってかわって何かしらの手土産を持ってくる。その多くは花だった。お陰で彼女の部屋は、花畑のような賑やかさだ。そして話を、した。ヒナタの幼い頃の話あまり引き出しの多くない親子関係のせいで、すぐに尽きてしまうのだが。彼は毎日やってきては、ほぼ毎日、同じ話を繰り返した。

ヒナタはいつも険しい目で、窓の外を見ている。

ハナビもやってきた。父と共に来ることもあれば、一人で顔を出すこともある。手土産は、いつも甘いシナモンロール。毎日ひとつ、買ってくる。そして彼女も話すのだ。今は埃を被った多くの引き出しをいくつも開けて。

そうしていつも、頂垂れて帰っていく。彼女の後悔もまた、遅すぎたのだ。

ヒナタは強い光を湛えた目で、窓の外を見ている。

キバヤシノも来た。変幻した赤丸も連れて来た。ナルトと、そしてサスケまできたことにネジは驚いた。シカマルが来て、チョージも来た。かつてのぼっちゃり系は巨漢に成長していて、窮屈そうに椅子に座りハナビの置いていったシナモンロールを勝手に食べた。それを意地汚いというのが注意し、サクラが笑った。リーに引きずられてテンテンがやって来て、病院食ばかりではつまらないだろうと重箱をネジに押しつけた。色とりどりの食材が消化の良さそうな料理に変身して、きれいに収まっていた。紅がアスマとやって来た。

彼らはこの春、式を挙げるのだと言う。まだだったのかと、唯一見える目を力カシが丸くすれば、茶化してやるなとガイが指を立てた。賑やかに会話が弾んで、そして彼らは気落ちして帰っていく。

ヒナタはまだ窓の外を、冬の空を睨みつけている。

誰が来ても、何を話しても同じだった。ヒナタの心は硬く閉ざされ、決して開くことはなかった。誰の声も、懐かしい思い出も、甘い匂いも、美しい花も、彼女の琴線に触れることはなかった。そして漸く誰もを理解する。

もう誰も、優しい彼女の『特別』ではなくなったことを。

ヒナタは空を見ていた。朝でも昼でも夜でも、起きているときはいつも空を見ていた。

青、蒼、碧、朱、橙、白、灰色、藍、そして黒。様々に色を変える空を、ずっと見ている。

ネジはそんな彼女のために、夜でも厚い布で空を隠すのは止めた。彼もまた、空を見ていた。

見舞客がいなかったときは、ヒナタと一緒に空を見た。彼女の心に少しでも近づければと、ネジはヒナタと静かな時間を過ごした。

ヒナタのもとを訪れる者は、少なくなっていた。ヒアシヤハナビは相変わらずやってきたが、もう手土産も会話も消えていた。

段々と、二人だけで過ごす時間が増えていた。

19の誕生日、ヒナタは退院した。

胸の傷は塞がっていたが、心の傷は開いたままで血を流し続けている。

険しい目で、睨みつける。誰を、というのではない。見えない敵

をずっと睨みつけていた。彼女はまだ、戦っているのだ。

ネジはヒナタに着物を贈った。薄紅、淡黄、孔雀蒼、色鮮やかな錦を。ヒナタの持っていた着物は全て、彼女の母のものだ。藍や紺色。落ち着いた色はヒナタにとてもよく似合っていたが、ネジは彼女の目に入るものはできるだけ明るい色で揃えたかった。

夜は同じ布団で寝た。深々と雪の降る寒い夜には人肌を求めてか、ヒナタはネジの胸にぴたりと寄り添う。ネジは小さな体をすっぽりと腕に納め、安心させるように華奢な背を撫でた。入院中はうなされ夜中何度も目を覚ました彼女だが、ネジの腕の中にいるときだけは穏やかな寝息をたてた。起きているときはずっと気を張り詰め、何かと戦い続ける彼女を、せめて夢の中だけでも安心させてやりたかった。

日向の年賀行事を欠席し、始めて迎えた二人っきりの正月。ネジは松、竹、梅を庭木で揃え、水盆に生けた。

自分にもできると思ったが、意外に難しい。どうにか刺さっているがちぐはぐで、収まらない。何度かやり直し、その度に茎が割かれた。4度目でネジは諦め、これはこれでいいかと、床の間に置いた。

「梅を、もう少し短くして、松を後ろに・・・」

後ろを振り返ると、ヒナタが座っていた。その目は確かにネジの生け花を見ている。

ネジはヒナタの言うとおりに生け直した。こうかと確かめれば、返事が返ってくる。それが嬉しくて、何度もヒナタに話しかけた。彼女の指示で生けた始めての祝い花は、不思議にすっきりと纏まって、昨年彼女が飾ったものに似ていた。

あんなに深かった傷は、うっすらと痕を残すだけになった。左腕

は自由に動くし、最後まで強ばっていた指も、毎日ネジが丹念にほぐしていたので今では器用さを取り戻している。

見えない傷も、完治しているようだった。実際はどうなのかわからないが、表面上は以前の彼女に戻った。

いや正確には、ネジたちの知るヒナタではなかった。

脅えず、誰と向かい合っても、視線を彷徨わせることはなかった。彼女の持つていたはにかんだ明るさは消え、代わりに何事にも動じない平静さが現れた。それは『日向』のようでもあり、だが日向ほど冷たくはない。ただ平然と受け止め、冷静に反応を返す。ヒアシやハナビは当惑し、それはヒナタがどこかで得た自信のなせる業だと判断した。

ヒナタには、確かに自信がついたのだろう。それだけの経験を積んだのだから。だが彼女の見せる平静さは彼女の自信が背中を押しているからではないと、ネジは思う。ヒナタにしてみれば同じものになったのだ。庭に転がる小石も、父も妹も。

そして、夫も。

ネジの白眼には、ヒナタの欲するものがずっと見えていた。父に愛されたがり、日向に居場所を探していた。彼の濁った目ではヒナタが自分にまで愛されたがっていたことには気付けなかったが、それでも日向にいた誰より愛されたがっていたことを知っていた。ずっとずっと手を伸ばし必死に居場所を求めている。だが決して与えられないことはなかった。

19年。19年、ずっと求めていた。とても長かったに違いない。そして彼女は遂に、諦めてしまったのだ。父や妹がぎこちない優しさをみせても、かつての仲間が騒ぎにきても、彼女はお愛想でも笑うことはなかった。ヒナタはもう誰にも気遣うことはなかったし、優しさを与えることもなかった。彼女の両手は自分自身を抱き留めるためだけにつかわれた。固い殻に閉じこもり、誰一人としてヒビ

ひとつ入れることは適わなかった。

一人一人が乗せたものは小さかったのかもしれない。だが19年をかけて誰もが無意識に乗せた小さな石はヒナタの背を覆い、やがて大きな岩となって彼女自身を押し潰した。

ネジにはヒナタの気持ちが届きしめて、今の彼女の姿は、幼い頃の自分を思い出させた。自分自身を抱きしめて、何もいらぬ誰もいらぬと必死に虚勢を張っていた。そして裏では狂おしいほど、誰かを求めていた。

ヒナタも同じではないかと思う。だが同時に、彼女の闇は自分のものなどとは比べものにならないほど深く暗いということもわかってきた。少なくともネジには父に愛された記憶も、母に抱きしめられた記憶もあるのだから。

彼女には、それら一切がない。

ヒナタは誰も求めない、何も欲さない。深い深い闇の底で、固く固く蹲る。

だがそんな彼女の闇にも、一筋の光が差すことがあった。誰が来ようと何を話そうと何をみせられようと決して表情を変えないヒナタが唯一、ネジの前でだけ戸惑いをみせた。

もうその桜色の唇が愛を囁くことはなかったが、ネジは構わずヒナタに愛を告げた。その度彼女の白い瞳は戸惑って彷徨い、ネジの胸は痛んだ。

それでも、嫌われてはいないと信じている。

誰に対しても態度を変えないヒナタが唯一、自分に対してだけ表情を変えるのだ。戸惑いであったとしてもヒナタがその瞳を揺らすのは唯一、ネジに対してだけだ。

だからまだ、嫌われていないと信じている。

ヒナタにまだ求められていると確信しているからこそ、ネジはヒナタが可哀想でならない。彼女が想いを告げてくれたあの日、すん

なりと受け入れていれば状況は大きく変わったろうにと、思わずにはいられない。あんなに酷い言葉を投げつけたりしなければ、ヒナタの心はこれほどまで哀しくはならなかっただろうにと。

ヒナタは信じない。自分が誰かに愛されることなど。

彼女は固く固く目を閉じて、目の前にある花を見ようとしない。

それはヒナタが自分の心を守ろうとする自己防衛ゆえだ。ネジはヒナタを抱きしめる。もうそんなに脅えなくていいのだと伝えるように。

許されるならあの日に帰り、彼女を傷つける自分自身を消し去りたい。

毎日、毎日繰り返した。どれだけ時間がかかろうがネジに諦める気はない。

これだけは絶対に譲れない。

少しずつ、彼女は慣れてくれた。まだネジの言葉を頭から受け入れているわけではなかったが、抱きしめられても強ばることはなくなった。時々、笑ってくれるようになった。

ネジは任務に就き始めた。朝出て、夜には帰る。そんな、里内で終えられるものだけに限ったが、長い休暇を終わりにした。

雪はまだ根深かった。だが気を配ってよく見てみれば、春の気配は確かに近づいていた。

2月も終わりが見えた頃、月光に輝く雪の道をネジは歩いてきた。夕べから降り積もった名残雪で、どこもかしこも白く染まった。早朝から駆り出された大通りの雪かきは、予想外に時間を要した。下忍ルーキーが今年はず、単純作業を行うはずの下忍の数が圧倒的に不足していた。自分たち、特にヒナタたちの代は豊作と言われたことを思い出す。確かにここ数年、不作が続いていた。あの頃は考えられないが今では、雪かきだろうが迷い猫の捜索だろうが、中忍クラスが普通に動いている。今朝に至ってはネジたち上忍の姿が雪の中、あちこちで見られた。

「人手不足にも程がある・・・」

白い息を吐きながら、ネジは思わず不平を漏らす。里内、それが大前提で任務に就いたのだから何を与えられようと文句は言わないつもりでいた。アカデミー教師か、下忍の指導だと思っていた。だがこの一月足らずで探した犬は6匹、猫に至っては28匹だ。さすがに打たれ強いネジでも、そろそろ不満のひとつも出る頃だった。

「犬も猫も、きつちり繋いでおけ！・・・にしても、何でこんなに下忍が少ないんだ？アカデミーの質が落ちたんじゃないのか」

DランクCランクの任務が、こんなに鬱憤の溜まるものとは思わなかった。危険性は少ないが、ストレスは多い。ちらほらと雪が降り始めた暗い空を、うんざりと見上げた。

ヒナタは冬が好きだった。いや彼女は春も夏も秋も好きだ。どんなに厳しい環境でも、小さな美しい自然を見つける。だからネジも冬が好きになった。

彼女と話していると、新しい発見がいくつもある。こんなに長い時間共に在るのに、本当に会話が少なかったのだと気付かされた。

ネジはヒナタの柔らかな笑みを思い出し、家路を急ぐ。雪の中、遠くに見える我が家の灯りに、頬が緩んだ。

扉を開けると、違和感があった。音がなく、人の気配がしない。今日の帰宅はいつもより遅くなった。こんな時間に雪の中、ヒナタが出かけるとは思えなかった。

冷たい廊下に歩を進める。台所には夕飯と思わしき煮物が鍋に入っていた。腕を組み、少し考えて居間へと向かう。

そこにもやはり、彼女の姿はなかった。あったのは白い紙片。居間に置かれた大きめの机の上に、かつて見慣れた紙があった。

不吉な予感を押さえつつ、ネジはそれを手に取り、見た。

瞬間、ネジの中を激流が走る。怒りや後悔、戸惑いや不安、そして疑問。それらが絡まり合い、龍となって駆け抜ける。

彼は手の中の紙をぐしゃりと握りつぶし、居間の障子を勢いよく開け放つ。裸足のまま庭へと進み、根深い雪に踝まで埋めながら仁王立った。

「ご苦労さまです。

急で申し訳ないのですが、任務が入りました。
帰里予定は夏です。

「夏・・・夏だと？この雪を見る、いまは冬だ！夏・・・夏・・・夏つていつだ？7月か？8月か？それとも9月かー！！！」

きんと冷えた空気、音を無くした冬の夜。ネジの虚しい叫び声だけが、暗い空に響いた。

ネジの行動は早かった。

翌日、朝一番に受付に駆け込む。まだ準備中だったテンテンを引っ掴み、詰め寄った。

「そんなこと、言えるわけないでしょ」

「何故だ？俺は夫だ！」

「夫だろ？何が何だろ？が、関係ない。守秘義務つーもんがあるでしょう」

真つ正面から睨みつけるネジの眼光を、平然と受け止める。隣で中忍になりたての見習い受付が肩を震わせ助けを呼ぼうと動いたとき、ふつと空気が緩んだ。振り返るとテンテンが腰に手をあて、心底呆れ返った様子で長い溜息を吐いていた。

「頑固者が開き直ったら、かわいくなっちゃって。ほんとにもう！・・・ま、おもしろいもの見せてくれたから、意地悪しないで教えてあげるわ」

テンテンは壁に添え付けられた本棚に近づくと、ファイルのひとつを取り出した。

「でも、ね。教えてあげられるものなんて、ほとんどないんだけど。これ、ヒナタちゃんの。見たらわかるでしょ？長期、としか書かれてないし、受付を通していない任務なのよ」

任務には二通りある。受付から渡される任務は、比較的簡単なものだ。複数の人間の間を通るだけに、秘密も少ない。だが受付を通さず、直接火影やその周辺から命じられる任務は機密度が高く、困難だ。Aランクなら約7割が、Sランクはその全てが受付を通さない。

「・・・まさか、また暗部に・・・」

「さあ、それはどうかしら。現在暗部に配属されている人たちのファイルも調べてみたんだけど、どれもヒナタちゃんと重ならないのよね。ヒナタちゃん昨日からでしょ？他の暗部はずっと前から任務についてたり、里にいたりだもの。暗部は基本的に、一人では動かさないし」

「そうだな・・・で、何故テンテンがそこまで知ってるんだ？」

「だってこの長期、私が書いたんだもの」

「・・・誰に、言われた？」

「えー、どうしようかなあ・・・」

「テンテン」

腹の底から絞り出すような声で名を呼ばれ、さすがにこれ以上は危険だと判断した。

「・・・シカマル。だけどそう簡単に口は割らないでしょ」

「どんな手をつかっても、割らせてみせるさ」

不敵な笑みを残し去っていくネジに、テンテンは思わずついていきそうになる。怖いもの見たさにふらふらと動く足を、ぐっと抑えた。危ない、危ない。この大きすぎる好奇心で、何度危険な目に遭わせたことか。テンテンは胸を押さえ、渋々椅子に座る。

「おはようございます。テンテン」

いつの間に来たのか、彼女の好奇心の被害者が、爽やかに挨拶してくれた。

「黒の森だ」

やっと捕まえたシカマルは、意外にも簡単に口を開いた。

「黒の森？なぜ、あんな所に・・・」

木の葉隠れの里から遠く離れた、水の国との国境に広大な森がある。鬱蒼と生い茂る木々が空を覆い隠し、昼でも暗い。木々の特性かその葉は皆一様に黒みがかった緑で、遠目には黒に見える。故に、黒の森と呼ばれた。

「お前も知っているだろう？あの森には案内人が必要だ。・・・」

だがその案内人が、先月亡くなったんだ」

「それに何の意味がある」

「・・・つまり、ヒナタが・・・」

「まさか、あの人が後任か！」

ネジはシカマルの胸ぐらを掴み、背後の壁に押しつけた。

「・・・って！・・・落ち着け！後任が決まるまでの、補充だよ」

「補充・・・？」

漸く解放された首をさすりながら、シカマルが説明を始める。

「黒の森は案内人がいなきや抜けられない。今は、あのばかでない森を日々迂回しているのが現状だ。だがこのままでは火急の時、間に合わねえ。んで、とにかく正式な案内人が見つかるまで別の奴で間に合わせる、つーことでヒナタが浮かんだんだ」

「なぜ、そこでヒナタなんだ？」

「あいつは黒の森で、任務に就いたことがあるんだよ。言っとくが、駆け抜けたってんじゃねーからな。前ん奴が生きてたときに、代わりに就いたことがあるんだ。暗部第7班が遂行したAクラスの2つは、黒の森での任務だ」

「経験者、ということか」

「ま、そーいうことだ。今里にいる奴でヒナタ以上の適任者はいねーんだ。つーことでお前には悪いんだけど、行ってもらった」

シカマルの説明に、ネジは渋々ながら了承した。今更自分が騒いだところで、どうにもならない。だがどうしても、確かめたいひとつは口にした。

「・・・前任者は死んだ、と言ったな？理由は？」

「え・・・あーまあ、なんだ・・・その・・・労災だ」

想像していたとおりの答えを得て、ネジは溜息を吐いて首を振った。

黒の森。

彼女はこの森で、多くのことを学んだ。

黒の森に棲む生き物は大凡、植物も動物も他の地域で生きるものと変わらない。ただ常識外れに巨大で凶暴で、その多くが毒を持つ。禁を犯したり注意を怠ったりすれば、一瞬で命を失う。そういうところだった。ヒナタたちが中忍試験を受けた『死の森』。死の森でさえ黒の森の足下にも及ばない。例え上忍であろうと、暗部集団であろうとも、案内人もなしに無事に抜けきることは不可能だった。

案内人は必要不可欠だ。一度案内人の任に就いたものは長期間、森のただけで生活する。任務期間が数年に及ぶこともざらで、ヒナタの前任のように死を迎えるまで森を出ない者も多かった。だからなのか、一度任に就けばおいそれと里に帰ることも叶わない、それを望んでいるかのような者が黒の森を選んだ。

森も、人を選ぶ。

ただ腕が立つだけでは、駄目なのだ。精神が強い者でなければ耐えられない。常に危険と隣り合わせで息を吐くこともできず、ただ一人で行動し眠る。四六時中気を張り、それでいて平静を保つ。強い精神と、それに負けない忍としての実力を持つ者。里が今躍起になって探しているのは、この条件に見合う人物。だが木の葉崩れで失った忍の補充も満足にできない里に、このような人物がいるのかどうか。例えいたとしても、一度任に就けばいつ出られるかわからない黒の森に入る覚悟がその者にあるのかどうか。

後任の選抜には時間がかかるだろう。ヒナタの任務は後任が決まるまで、そういうことになっていた。どんなに遅くとも秋には決まる、シカマルはそう言ったが、ヒナタには秋がきたからといって任務が終わる保証はどこにもないとわかっていた。

任務が長くなる。それはヒナタにとって好都合だ。
彼女は、考える時間が欲しかった。

曇りガラスの向こうから、世界を覗いているようだった。

あんなに気の合う仲間を得たことはなかった。これから先も、あ
ると思えない。彼らは強く、優しくかった。彼女の在るがままを受
け入れてくれた。

始めて、自分の居場所を得た。

死ぬのなら、まず自分だと思っていた。ヒナタは仲間の誰よりも、
自分が弱いと自覚していた。仲間の全てを失ったとわかったとき、
頭の中で何かが弾けた。一人一人の顔が浮かび、逃げろと叫んだ隊
長の声と、生きろと叫んだカズの声が響いた。そして、疑問を呟く
自分の声。

なぜ、なぜ、なぜ……？

どうして生きねばならなかった？ 敵も、味方も誰一人助からなか
ったのに、なぜ自分だけが生き残った？ 強いカズが死に、彼に守ら
れてまで、なぜ生き残ったのだ？ 何の益も生み出せない、不要な者
が……

ヒナタの頭には、疑問と怒りが渦巻いた。死を望みながら、生に
執着する自分に怒りを感じた。

そう彼女は、生き残った事実にあ堵した。生きている、そう感じ
たとき彼女のどこかでほつと息を吐いた者がいた。死ななかったこ
とに安心し、そんな自分に愕然とした。

忍に復帰したのは死ぬため。暗部に入ったのは、死ぬため。

ネジを愛していた。自分が死ねば、彼は幸せになるはず。今でも
そう信じている。

日向の、渦の中心から出たかった。

そして、誰の目からも逃れたかった。生まれた瞬間からずっと、誰かの目に晒されてきた。批判の目。何もかもから逃げたかった。それがあちら側になるのだとしても、よかった。

ただ、自殺だけは避けねばならない。弱い愚か者と、これ以上『日向』に泥を塗るのは嫌だった。ネジに迷惑をかけるのは、もっと嫌だった。

覚悟など、とっくの昔に決めていた。そう思っていたのに、いざというとき何故留まったのか。立ち塞がるカズの体を越え、振り下ろされる化け物の爪にその身を晒すこともできたはず。

最後の最後で、生にしがみついた。

結局、これもまた偽善か。ネジのため、ハナビのため、父のため、日向のため。そう言いながら、結局最後は自分のため。一番手軽な方法で楽になりたかったただけだ。ただ逃げようとしていただけに過ぎないのに、誰かのためだなどと卑怯な言い訳をしていた。

自ら望んで危険に飛び込み、無責任に火の粉を振りまき、最後にはかけがえのない仲間を死に追いやった。

ヒナタは自分を憎んだ。本当に殺してやりたいほど嫌悪した。

白い部屋にいた頃、たくさんの人がやってきた。

ハナビやヒアシがやってきた。キバやシノ、いのにサクラ、サスケやナルトや、リーにテンテン、それに紅までやってきた。ヒナタが嫁いで3年が経ったが、今まで一度もヒナタを訪ねて誰かがきたことはなかった。自分の様子を聞けば、ああ気にかけてくれたのかと思うのだが、彼らに心配されるほどの付き合いがあったとは思えない。皆一様に、他愛ない話をしては去っていく。

ヒナタには、彼らの行動が理解できなかった。

今まで、ばったり出会っても挨拶しか交わさなかった人々。若し

くは目も合わせてもらえなかった人々。そんな人たちが、急に親しみを持って接してくる。死に瀕したヒナタが見つつけられてから意識を取り戻すまで数十日、彼らにしてみれば数十日をかけて変わったのかもしれないが、ヒナタにしてみれば昨日と今日ほどの違いしかないのだ。夜寝て朝目覚めれば、自分を取り巻く人々の接し方が天と地ほど違っていた。そんな状況に直ぐさま順応できるほど、ヒナタの神経は図太くなかった。

そして、ネジ。彼は、誰よりも変わっていた。ずっと、ヒナタの側にいた。口数も多くなつた。おしゃべりというほどではないが、以前の彼とは雲泥の差だった。抱きしめてくれる。

そして・・・愛を囁いてくれた。

始めは、幻かと思つた。あまりに望んでいたから、幻想を見ているのかと。彼に包まれて腕の強さを知り、頬を撫でられてその手の温かさを知つた。夢ではないとわかつた。

次に、誰かのいたずらかと思つた。変幻の術をつかつて、誰かが自分をからかっているのではないかと。ずいぶんと長い間、偽物だと疑い、たくさんの時間をかけて違うとわかつた。

失礼な話だが、ヒナタはネジが狂つたのかとも思つた。彼女にはネジの行動が信じられなかった。誰がどう変わるうとも、ネジの変わり様だけは信じられなかった。

ネジの行動は信じ難かつた。けれども、嬉しかった。彼が本気だとは決して思わないけれど、もう少しだけ夢をみたい、そう望む自分があった。

何もいらぬ、そう思っていたのは本当。彼の幸せの中に自分がいなくても、仕方がない。そう思っていたのも、本当。だが思わぬ事態に舞い上がり、もっともつと、と貪欲に手を伸ばしてしまう。

嘘でいいから好きだと言って、一度でいいから抱きしめて。全部、嘘。

好かれないし、愛されたいし、抱きしめられたい。彼の隣に座ろうとする誰かを殺してでも、側にいたいと願う己の姿に気付いた。ずっと、見ようとしなかった真実。

これが、本当。
ネジが任務に就きはじめ、少しずつ考える時間を与えられた。そこで気付いた自分の心。
生まれて始めて誰かを愛した。諦められるはずなど、なかったのだ。

ネジは任務から帰宅すると、一番に抱きしめてくれた。ヒナタが悩んでいるとき、動揺しているとき、哀しんでいるとき。いつも側にいて抱きしめてくれた。悩みがあれば受け止められると、言ってくれた。

それはまるで、夢の時間。
だが同時に恐ろしかった。彼の目に映っているのは、本当に『日向ヒナタ』？

ヒナタはヒナタの目で世界を見ているけれど、この体が本当に日向ヒナタの形をしているのかと疑った。日に何度も鏡を覗いた。形を映し出すものなら、ガラスでも何でも覗いてみた。手に持つ湯飲みでさえ覗いてみた。その都度、自分の姿を見つけ信じられない思いに駆られる。

眠っていた間に、一体何が起きたのか。
何度考えても、自分の都合の良い方になってしまう。そうして、もう一人のヒナタが声を荒げて叫ぶのだ。

違う、違う、騙されるな。
ずっと一人だった。家族も仲間も名ばかり。偽善の仮面を被って、媚を売って、必死に自分を変えようと試みた。それでも全て無駄だった。

そして漸く悟ったのだ。

産みの母にさえ愛されなかった自分が、赤の他人に愛されることなど決してないということに。何度も言い聞かせ、やっと飲み込んだ結論。これで空虚な寂しさを感じても、渴望の苦しみを味わうことはなくなつた。一族も何もかも捨て去り、独りとしての虚しい自由を得たのだ。

なのにまた、この手を伸ばそうというのか？ どうせ、また裏切られるのに。

喜びと恐怖が、手を繋いでやってきているようだった。だが日増しに、恐怖の方が大きくなる。蜜が甘ければ甘いほど、失ったときの絶望感がどれほどのものになるのか知っている。ヒナタの人生はいつも、その繰り返しだった。僅かな期待と、無くした絶望。彼女はいつも、微かな喜びの影で身構えていた。

ネジがヒナタに愛を告げれば告げるほど、彼女の恐怖心は膨らみ続けた。シカマルの提案は、ヒナタにとって渡りに船というもの。彼女は考える時間も欲しかったが、何よりもネジの前から逃げ出したかった。

案内人の需要がどれほどのものか知らないが、彼女が任務について1ヶ月、案内したのは暗部1部隊一件のみであった。ヒナタが以前、仲間と共に任務に就いたときはわずか数日で何人も忍を案内した。たまたま今の時期に水の国へ行く任務が少ないのか、それとも急ぎでないのか。

だがヒナタには、別の理由で通る者が少ないのだと感じていた。つまり、避けられているのだ。彼女がいかに実績を重ねようと命を預けられる存在として、信頼を勝ち得ていないのだ。

薄々確信したが、ヒナタの心は傷つかなかった。信頼されないこ

とに彼女は慣れていた。

始めの数日は森の散策に明け暮れた。どこが危険で、どこが安全か。森は刻々と姿を変える。経験が確かだとは限らない。ヒナタは十数日をかけて、どこに何の動物がいるのか、何の植物があるのかを覚えた。そしてどうにか安心して眠れる場所を得た。

夜の森は、幻想的に美しい。それは光苔や動物や昆虫が発する光のせいだった。黄や赤や青。様々な光は緩やかに宙を舞う。魅惑的で、危険な光。

警戒していないわけではない。ただ神経がすり減る程警戒しても、何の意味もないと知った。

相変わらず森は騒がしい。かといって、獣の音がするわけではない。何も知らない者ならば、森の意外な静けさに驚くことだろう。黒の森は他の森に比べて、不気味なくらい静かだ。だが確かに生き物の息づかいをあちらこちらで感じられる。ヒナタは耳でも目でもなく、肌でそれらを感じ、避けた。

黒の森に棲む生き物たちは、知能が高い。人語を解するものも多い。だが例え同じ種であっても、解するものと解さぬもの、話すものと話さぬものがある。違いは個の知能にもあるだろうが、いくら生きながらえてきたかという個の時間にもあるようだった。

黒の森で生まれたものの知能が高いのか。それとも、知能の高い生き物が森に集まるのか。はたまた知能が高いから、生き残ったのか。それはヒナタにもわからない。ただ彼女には疑問に思い続けることがあった。

それは、『違い』。

ナルトに封じられていると言われる、九尾の化け物。口寄せで呼ばれる動物。里に山に、普通にいる生き物たち。彼らの違いはどこにあるのだろう。化け物が巨大と言うのなら、口寄せで呼ばれる大将クラスの生き物も同じく巨大だ。凶暴性と言うのなら、山に生き

る動物にも凶暴なものはいる。

そもそも違いなど、ないのかもしれない。人に益を与えるものを動物と呼び、害を与えるものを化け物と呼ぶ。それが一番近いような気がした。

自分も同じだと、ヒナタは思う。もし忍として人並み以上の力を、いや例え人並み程度の能力でも幼い頃から発揮していれば、状況は変わったのだろう。日向の子としてハナビのように、それなりの扱いを受けたのだろう。

ヒナタは黒の森に、心地よさを感じ始めていた。肌を刺すような危険を感じる。気を抜けばそれで終わりだと、わかっている。生と死の境界線に立つようなもの。

それを、楽しいと感じた。

彼女は日々、新しい何かを発見した。森で出会った植物も動物も、何もかもが新鮮。以前任務に就いたときは、決められた箇所しか動かなかった。それでも広いと感じたが、今自由に動いてみると森はもっと広大で奥深い。

奥へ奥へと進む。命の終わりを覚悟するのは日に一度や二度ではないが、それでも構わず行動範囲を広げた。

ヒナタは己の手を見る。血に濡れた両の手。この森に入ってから、他国の忍を幾人も殺めた。命を狙う獣を殺めた。彼女の手は、血の匂いが消える間もなく、また赤に染まる。

その身を生臭い鉄の匂いに晒せば晒すほど、彼女の心は消えていく。かつての仲間はどこにもなく、ヒナタをこちらに留めるものは誰もいなかった。ヒナタは独りで戦い、独りで眠り、独りで死地を彷徨い、独りで還った。

もう誰もいない。誰も、いない。

キバやシノであっても、父や妹であっても、例えあれほど憧れたナルトであっても、敵として立ち塞がるのなら躊躇なく殺し合える

だろうと、どこかで冷たく確信する。

だれもいない。

だが、ふと浮かぶのだ。白い瞳。包み込むように暖かで、優しい瞳。静かに響く、心地よい声。ネジの顔や声、匂いを思い出す。その度に、死にかけてヒナタの心に僅かな光が灯る。

寒い夜、幾重にも重なる木々の葉をぬって雪が土を覆う。少し暖かみを増せば、曇混じりの雨に変わってヒナタを濡らす。そんな夜、ヒナタは無性にネジに会いたくなかった。

どうして、なぜ、もう少しだけ夢をみていられなかったのか。捨てた涙に頬を濡らし、痩せた体を固く抱きしめて眠った。

誰もいない、誰もいない、誰もいない。

ただひとりを除いては・・・

森のあちこちで、咲いている花を見かけることが多くなって、春が来たことを知った。

任務は夏まで。シカマルの声が響く。長ければ長いほど良いと思っただ。でも今はよくわからない。

ネジに会いたいと願った。会いたくないと震えた。彼がまだ、優しいとは思えなかった。ネジの冷たい声を思い出すと、今でも心が凍りつく。どうせなら暖かい記憶を最後にしたかった。

それでも、会いたいと叫ぶヒナタがいた。

時折、どこかからか『声』が響いてくる。

・・・！

時間や日にちの感覚が消えていた。一日三食、そんな習慣も消え

ていた。華奢な体は一層細くなり、白い瞳は鋭さを増した。心を揺らすものなどなく、ただ平穩で血生臭い日々が続く。

水の冷たさを心地よいと感じ、夏を知る。案内した木の葉の忍はやはり少なく、反対に不用意に入り込む他国の忍は増えていた。明らかに、現案内人が未熟だと思われていた。

ネジへの想いは消えない。何度消そうと試みても無駄だった。気まぐれに与えられた、彼の優しさばかりを思い出す。

好きだった、好きだった。何もかも諦めてばかりの人生でただ一つ、ただひとり渴望した想い。忘れられるはずなどない。

ヒナタの『人』が消えていく。そんな中でただひとつ、ネジへの想いだけが彼女を人へと繋げていた。

冷たい小川の水に身を晒し、こびりついた血を落とす。伸びた髪を鬱陶しそうに後ろにやる。切ってしまったおつかと思ったが、自分の不器用さを思い出し止めた。見る者などいないのでどのようになるかと構わないが、『日向』が浮かんだ。このような所にあつてまで日向から逃れられないのかと自嘲の笑みも浮かんだが、結局染みついたものはそうそう消えることはないのだと諦めた。

顔に、白い手を近づけた。これも同じ。洗っても洗っても、この手に染みついた血の匂いは消えない。どうしても錆びた鉄の匂いにするように念入りに何度も洗う。

ヒナタはもう一度、水に手を浸けた。その時、光を反射しきらきらと輝く川の水に、何か影を落とした。咄嗟にホルスターからクナイを取り出す。衣服を身につけていなくても、武器だけは手放さない、そんな習慣が身に付いた。鬱蒼と生い茂る濃緑の葉の中で、目立つ白が横切る。それが木の葉が使う忍鳥であることを確認して、クナイを戻した。

黒の森が危険であっても構わない。ネジは何度もヒナタに会いに行こうと画策した。だがそれを阻むように、任務が入ってくる。受付から自らの意志で受け取る任務ではない。火影や、シカマルなど側近の者から直で下りてくる任務だった。さすがに断るわけにもいかず、ネジは渋々とこなす。

春が過ぎ、夏の気配を感じる頃、ネジの焦りも限界に達し始めていた。

そう、ネジは焦っていた。自分がどれだけ誠意を尽くそうと、わずか一月で伝えられたことなど限られている。ヒナタは、脅える手負いの小動物のようなもの。彼女の疑心が消えるまで、何度も何度も語らなければならぬ。壊れやすいガラスを扱うように、優しく包み込んで側にいたかった。ヒナタの心の奥底まで自分の真意を伝えるためならば、どれだけ時間が掛かろうと構わない。彼女を手に入れ、また好きだと囁いてもらえるなら、どんなことでもしようと誓ったのだ。そして今度こそ、もてる力の全てをつかいヒナタを守るのだ。

そう決意したのに、彼女はいいない。

ネジには焦りとともに、不安が募る。黒の森でただひとり、無事なのか。怪我などしていいのだろうか、血を流してはいないだろうか。怖がっていないだろうか、震えてはいないだろうか。

そして、泣いていないだろうか。義務も義理もかなぐり捨てて、駆け出したい衝動に幾度も駆られた。

眠れぬ夜は月を眺めた。月は、どこことなくヒナタに似ていた。冷たくて暖かで、静かにいながら存在感が強い。強烈な光を放つ太陽ではなく、手に入れられるのではないかと錯覚を起こしそんな淡い光。

だが、決して手に入れることはできない遠い存在。
もう二度と、彼女に触れることなどできないのではないか。どこかでそんな声がある。離れているこの間に、彼女に完全に見限られることを何よりも恐れた。

会いたい、会いたい、今すぐに。

ネジの悲痛な声なき叫びを、月は静かに吸い込む。

「ネジ、Bランクで悪いが頼まれてくれ」

呼び出され何事かと出向いた先でのシカマルの言葉に、ネジの眉が寄せられた。Bランクなど中忍がこなすものを、わざわざシカマルから言い伝えらるると思ってもいなかった。

「・・・まあ、言いたいこともわかるけどさ・・・」

ネジから発せられる無言の圧力にシカマルが視線を逸らす。

「任務としては、そんなに難しいものでもない。小箱をひとつ、

水の国の大名に届けてくれればいい・・・」

「そんなものは中忍にでもやらせる」

「・・・黒の森を、通ってほしいんだ」

シカマルの言葉を遮って言い捨てたネジの目が、『黒の森』という単語に見開く。

「気になることがあつてな。まだ憶測の段階だから、口に出せね

ーんだけどさ・・・ただ、できるだけ情報を集めておきたいんだ。

・黒の森ってのは、いろんな意味で重要なんだよ」

ネジは、ちろりとシカマルを見た。

「ま、これは俺個人の頼みで、今回の任務とは全く関係ないんだがな」

ヒナタに会いたい、そう切望するネジに断る理由などなかった。

「Bランクにこのメンバーって、なんかなあ・・・」

「嫌なら帰ってもいいぞ。どちらにしろ、俺一人で行くつもりだつたんだからな」

「まあまあそう言わず、摩訶不思議な森を楽しもうよ」

高台から、遙か彼方の黒の塊を見つつ、のんびりとカカシが口を開く。何年経つても、この上忍は掴みにくい。ネジは横目で覆面忍者を見ながら思う。

黒の森の様子を見てきてほしい、そうシカマルに命じられた今回の任務。Bランクに上忍が就くこと自体異例だが、それが3人もなれば異常としか言いようがない。

「別に嫌だとは言ってない・・・」

「シカマルに何か、聞いたのか？」

「特別何かを言ったわけじゃねーけどさ、森の状況が知りたいんだろ」

ランクの低さ、決められた行程、そしてこのメンバー。これだけ条件が揃っていて何も感づかないほど、キバは鈍くはなかった。

「オレの鼻とお前の目で、見てこいつってことなんだろ？・・・まあ、カカシがいるわけがわかんねーけどさ。・・・年の功か・・・？」

「失敬な。たいして変わんないでしょ」

「違うつて・・・それに、オレとしてはもうひとつ気になることがあるんだよなあ」

「何だ？」

「問い掛けたネジを横目で見る。」

「・・・ヒナタ、だよ。気になっていたんだよな。あいつ前と様子が違うつて言うか・・・いや、スリーマンセル解消してからまとも会ってねーから、前と言っても何年も前になるし、それだけあればさ、人間なんて変わるもんだとは思うけど・・・でも、なんか違うんだよな」

「ふくん、何が？」

カカシが空を見たまま問う。真っ青な空に、真っ白な雲。眼下に広がる田は青々と稲が育ち、その身を風に揺らしていた。何もかもが、夏だった。

「なんつーか・・・違う。ヒナタなんだけど、ヒナタじゃねーっ
てか、うーん、なんて言やいいんだ？・・・怖い・・・」

「怖い？」

「いや！ヒナタが怖いっーんじゃねーんだ。・・・ただ・・・退
院してから行っただろ？お前んち。そんな時にさ、ふとあいつと目が
合って、なんつーか、こっ背筋がぞくりとしたんだよなあ」

「まあ、美人さんになってたよな。・・・壮絶な、という言葉が
ぴったりくるような」

「そうじゃねーって。・・・そりゃきれいになったと思うけどさ、
そういう見てくれじゃなくて、雰囲気だよ。纏ってるもんが違うん
だ。オレが知ってた前のヒナタとは」

「変わったとしても、あの人在必死に足掻いて手に入れたものだ。
あの人がどのように変わろうとも、俺にとってヒナタはヒナタで、
何も変わりはない」

言い切るネジに、キバが照れたように頭を掻いた。

「黒の森を通りたいのって・・・？」

「そ、オレら」

黒の森の入り口で案内する木の葉の忍を待っていたヒナタは、現
れたネジたちに驚いた。忍鳥が告げるのは忍が到着する大凡の日に
ちだけだ。誰で何人で、そんな詳しいことはいつも会ってみなけれ
ばわからない。ヒナタが知り合いを案内するのはこれが始めてだっ
た。

「え・・・と、それじゃ注意事項だけ」

誰が相手であろうとも案内人である以上、最重要事項は全員を無

事に通過させることだ。ヒナタは多少のやり難さを感じつつも、任務に専念する。

「移動は昼の間、夜は休んで動きません。それから私の前を決して行かないでください。戦うときは私だけ、みなさんは決して手を出さないようにお願いします」

「ヒナタに守ってもらわなくても、自分の身は自分で守る」
守られるという状況に、キバが敏感に反応した。

「守る、と言われるればそうなんだけど。無駄に殺し合いをしたって意味がないでしょ。ここは獣が多いけどそれなりの決まりがあって、こちらが戦意を見せなければやり過ぎせることも多い。だから戦う相手を見誤らないように、私が動くの」

ヒナタは静かに言った。以前の彼女ならキバに押し切られていただろうが、今のヒナタは違う。自分の意見をはっきりと告げた。その白い瞳は脅えに揺らぐこともない。

「キバ、この森で俺たちは素人だよ。・・・ヒナタ、お前に任せ
る」

「はい」

少しだけ笑って、ヒナタはカカシに頭を下げた。

黒の森を駆け抜ける。巨木の根が張りだし、平坦な場所などない。枝から枝へ、4人の忍は宙を飛ぶ。不慣れな者なら行く手を遮る幹や枝、方々から感じる獣の気配に心惑わされ道を失うだろう。だがヒナタは迷いなく進む。途中何度か獣に会い、その度に彼女はネジたちを止まらせやり過ぎた。

ネジは以前森を抜けたとき、ヒナタの前任が出会う獣の全てを倒していたことを思い出す。大小拘わらず、明らかに脅えているとわかる相手でも容赦なく殺していた。確かにその方が手っ取り早いし時間も掛からないのだが、ネジはヒナタのやり方を好んだ。彼女らしい、そう思う。

ヒナタの雰囲気が変わったことなど、キバに言われなくとも気付

いていた。憂いや脅え、迷いの影が薄くなった。優しさや僅かな明るさもどこかへ行ってしまったと感じたが、それでもこのような小さなところでネジの愛する『ヒナタ』を見つけた。

「少し、構わないか？」

夜、ヒナタは当初言ったとおり動かなかった。比較的安全なところで休息する。ネジは数日、ヒナタの様子を黙って窺ったが彼女が動くつもりがないようなので、自分から動くことにした。シカマルの依頼など知らない。ネジが何より優先したいのは、自分がヒナタをどう思っているのかを伝えることだった。

「・・・はい」

俯き、小さく返事を返したヒナタを伴い、ネジはキバたちから離れた。

ずっと、ネジと目を合わせないようにしていた。

森で半年を過ごし、心が死んでいくのを感じた。限られた武器を回収するため、死体の内蔵を探ることも平気になった。森に入った頃ほど荒んでもいなかったが、誰も求めていないのは同じだった。

今のヒナタを見て誰が何を言おうと、何を思うと関係ない。だがネジだけは駄目だ。彼が今の自分を見てどう思うのか、怖かった。ただそれだけが、怖かった。

獣を殺さなかったのは、無駄な戦いを避けるためでもある。だが本当の理由は、血にまみれる自分を見せたくなかったのだ。

愛している、愛している、愛している。こんなになってもなお、ネジに嫌われなくなかった。

二人だけで話が出たかたといえ、仲間から離れすぎるのは危

険だ。ネジもこの森がどういふところか忘れたわけではない。キバたちから適当な距離を離して、ネジは立ち止まった。僅かな距離でも森の木々は視界を遮ってくれる。そんなに離れたわけではないが、二人の姿は完全に見えない。ただ気配を感じるだけだった。

ネジはヒナタと向き合った。俯かれてしまうと、長身のネジにはヒナタの頭しか見えない。細い顎に手をかけ、小さな顔を優しく上げた。震える唇に吸い寄せられそうになったが、寸でのところで抑える。

「怪我は、していないか？」

「・・・大丈夫です」

「体調などは、崩していないか？」

「・・・はい」

ぎこちない会話だった。彼女を自宅に連れ帰ってから一月余りで近づけた距離は、とつくの昔に元に戻ってしまったらしい。ネジは今更ながらに、離れていたこの半年を呪った。

「あなたはまだ、信じてはくれないのだろうか。いや、責めているわけではないんだ。あなたに信じてもらえるだけのことを、俺はしていない。だから、何度でも言おう。俺は、あなたを愛しているんだ」

華奢な肩がびくりとはねた。

「あなたが必要だし、あなたの側にいたい。・・・あなたの力になりたいんだ」

「・・・ネジ兄さんは、いま、気弱になっただけだと、思う。・・・アゲ八さんとうまくいかなくなって、少しだけ、気持ちが弱くなってるんだよ。・・・だから、私なんか、そんなに優しくしてくれるんだと・・・思う」

ネジは、その秀麗な眉を顰めた。

「もう少し経てば、きつと、また、アゲ八さんと仲良くなれるよ。・・・もし・・・もし、ダメだったとしても、必ずまた、いい人が

現れるよ。・・・きつと、大丈夫。ネジ兄さん、格好いいもの」
微かに笑うヒナタの目は、泣きそうだった。必死に強がってみせるその姿に、ネジの胸は軋んだ音を立てる。

彼女をここまで追い詰めたのは、俺だ。

幾度、幾日、愛を告げ続けても信じられないほど、彼女の心を壊したのは、俺だ。

かつて感じたことのない恐怖が襲ってきた。

このままずっと信じてもらえず、空しく愛を囁き続け、いつか、その姿を見失うのではないのか。

掌から砂が零れるように、希望が落ちていく。

だが、しかし。

諦めることは許されていない。

彼女は、ネジよりずっと長く、愛してくれていたのだ。叶わぬ愛だと思いつつ、ずっと想い続けてくれていたのだ。そして今も、誰よりも深く、彼女はネジを愛してくれているのだ。

「俺が愛しているのは、ヒナタ、あなただ。もうすぐ、黒の森から出られるのだろう？俺は、あなたが信じてくれるまで、いや、もっともつと年老いて、死に逝くその瞬間まで、あなたに愛を告げよう」

ネジは小さなその手を両手で包み込むようにとり、深く頭を下げ額につけた。

「どうか、信じてほしい。俺を、信じてほしい。あなたを・・・愛しているんだ・・・」

黒の森を駆け抜ければ所詮Bランクの仕事など、たいしたことではない。早々に水の国での用事を済ませ、彼らは黒の森へ戻ってきた。僅か1日前に抜けたばかりの森だが、それでも案内人がいなければ

ればまた無事に通りきれるとは限らない。帰り道もヒナタが案内する。

あの日、ヒナタと語ったあの夜の日、彼女から明確な答えはもらえなかった。だがネジは、焦るのはやめた。彼女が自分を愛し、そして諦めようと思うに至った年月と同じくらい、いや、その倍以上の月日を要して、自分は愛を告げ続けなければならぬと決めたのだ。それが、いままで彼女を傷つけ続けた自分へ与えられた罰だとも思う。

己の仕打ちを考えれば、一月や二月で信頼を勝ち得ようなどと、甘えるにも程があるというものだ。

何事もなく、帰りも無事に森を通り抜けた。いや、何事もなくというのは語弊がある。道中彼らは雲忍3人、音忍2人、霧忍2人と会った。もちろん擦れ違ったわけでも、ばったり出会ったわけでもない。森を通り抜けようとした彼らをヒナタが察知し、彼女が始末するのに立ち会ったのだ。

各国には国境がある。他国の者が通り抜けようとするときは、それなりの許可が必要。それは忍の世界に置いて同じこと。一般人が持っている入国許可証とは違うが、彼らも許可証もなく他国を彷徨くことは御法度だった。有無を言わさず殺されても文句のひとつも言えないという点では、一般人のそれより容赦ない。

もちろん許可を取って任務に就くなど、余程ランクの低いものに限られる。ランクが高くなれば高くなるほど、許可などという正式で形に残るものは他国にも自国にもできるものではない。よって許可証を持たない忍は他国においてその地の忍に見つからないよう行動し、もしそのような忍を発見したときはできるだけ生きたまま捕らえて情報を引き出すのが常套手段だった。だが黒の森のように案内人一人で広範囲を動き一人で多人数を相手にするような場合、生け捕りなどに努めても返り討ちに遭う可能性が高い。それ故黒の森に限っては出会った他国の忍が許可証を持っていない場合、即座に

討つよう決められていた。

一応許可証を持っているかどうかを確かめて、無いとわかれば顔色ひとつ変えることなくヒナタは侵入者を倒した。自ら手を下すこともあつたが森の特性を生かして不慣れな敵を上手に追い込み、食肉花に落としたり、巨大虎に食わせた。断末魔の叫び声を上げ食われる者を見ていたときも、その手に握るクナイで容赦なく喉を掻き切ったときも、ヒナタの表情は変わらなかった。飛び散った血で濡れた頬に指をやり、赤を拭い取るときも彼女は無表情だった。ただ、全てが片づいたと判断したときだけ、ヒナタは表情を変えた。雲忍のときも、音忍のときも、霧忍のときも、最後の忍が息絶えたとき、彼女は静かに嗤った。

白皙の肌が目立つ赤い唇がゆつくりと笑みの形をつくるのを、壮絶に美しいとネジは思った。彼女が戦いの中で生まれた意味を見つけ、何十人も死体の上に立つ人生を選んだのだとしても、生きて自分の側にいてくれるのならネジに不都合なことは何もなかった。

確実に相手を倒す姿に安心した。これほどの強さを手に入れたのなら、彼女自身の力だけで無事に帰ってきてくれるだろう。夏まで、そういう約束だったはずだ。だが夏となった今でも、ヒナタの任務が近日中に解かれるとはネジには思えなかった。里の状況など一々聞かなくてもネジにはわかっている。約束が違ふなどと騒いでも仕方のないことで、そもそも任務が予定通りに進むはずがないのだ。だが『黒の森』と畏怖の念を込めて言われる場所に、愛する妻をこれ以上置いておくことなど心配で心配で仕方がなかった。

ネジはヒナタの強さを目の当たりにし、漸く安堵の息をついた。これなら後10日くらいは黙って、彼女の後任が現れるのを待っていてやるう。

妻に惚れ直すネジの後ろでは、キバが悪寒に耐えていた。確かに強くなった。美しくなった。だがその容赦のない姿に、ぞくりと背筋が凍り付く。隣で赤丸が不安そうに鼻を鳴らして、尻尾を股の間

に巻き込む。その姿に、恐怖を感じているのは自分だけではないと安心してちらりと隣を見れば、「やり方が暗部だねー」などとか懐かしげにカカシが呟いていた。

結局この場で恐怖を感じている人間はキバだけで、彼はそれに気付くと慌てて虚勢を張ったのだった。

8月が過ぎて9月を迎えてもヒナタが帰ってくる気配はなかった。ネジは8月中はと自分に言い聞かせ耐えたが、さすがに9月になると焦り初めていた。このままなし崩しに彼女が正式な案内人に任命されることを怖れたのだ。だが9月に入ってすぐ新たな任務を与えられ、里外に出なければならなかった。Sランクの諜報活動任務は困難を極め、彼が漸く里に戻れたのは9月も半ば過ぎ。ヒナタの後任が決まったのかどうかシカマルに問い質すため彼を捕まえられたときには、10月の足音がすぐそこに聞こえていた。

「一体、どうなっているんだ!？」

さすがに公衆の面前で怒鳴りつけるわけにもいかず、数人に指示を与えていたシカマルの腕を掴み有無を言わず資料室へ連れ込む。

「・・・悪い」

「そう思うのなら、今すぐヒナタを戻せ!」

「そうしてやりたいのは山々なんだけどさー・・・」

歯切れの悪い返事で、未だ後任が決まっていないことがわかった。だがこれ以上、一日たりともものんびり待つつもりはない。

「あの人が帰って来られないというのなら、俺が黒の森へ行く。」

案内人が二人になったところで何も不都合はないだろう?」

「いや待て、いまお前に抜けられると困る。まだやってもらいたいことがあるんだからな」

この一月でネジの就いた任務は3つ。すべてシカマルからのもので、3つとも諜報活動だった。何か、起きている。ネジはとっくに覚っていたが、今現在彼の最重要事項はヒナタがいつ戻るかで、申し訳ないが里の状況など二の次だった。

「・・・そうか、二人・・・ネジ、ヒナタ帰してやることができそうぞぞ」

何を思いついたのか、シカマルはにやりと笑ってネジに告げた。

彼女が戻ってきたのは、それから丸一月後。11月を目前に控えてからだった。

シカマルは黒の森の案内人を3人体勢に変えた。つまり彼は、候補者を絞るのに時間を費やしていたのだ。一人は力が僅かに足りず、一人は僅かに決意が足りず、もう一人はそのどちらもが僅かに欠けていた。ヒナタ以上の適任者を見つけることはできなかったが、3人でなら彼女以上と言えなくもない。そして複数の案内人ならば、森に閉じ込めることにもならない。適度に休暇が取れる職場なら、相当の覚悟は必要ないのだった。

ヒナタが戻ってからの数日は平穩に過ぎた。ネジはできるだけ里内の任務を選び、長く家を空けるということはしなかった。ヒナタが戻って、まずネジが言ったことは、お互いの間にあったメモでのやり取りは止めようということであった。もちろん緊急事態の場合は仕方がないが、それ以外ならお互いに話して連絡しよう、と。

ネジは努めて会話をもとうとした。愛を囁き続けることよりも、会話を重視した。彼女との溝を、早く埋めたかった。人として、信頼を勝ち得たかったのだ。

ヒナタと再び暮らし始めてすぐに、ネジは彼女が他の忍と明らかに違う部分を見つけた。

彼女は順応性が高いのだ。

普通、黒の森のような、僅かな気の弛みが即、死に繋がるような場所で半年以上も任務に就いていれば、里に戻ったとしてもなかなか平穩な空気に馴染めないものだ。酷い者になると精神の正常を取り戻すまで、医師の厳重な監視下に置かれることもある。ネジでさ

え、他国で命の遣り取りをした後は、心の平穏を取り戻すまでに数日間を要する。微かな物音にでも身構え、武器が手に届く範囲にあつても落ち着いて眠ることはできない。人の心は、身体よりもよほど繊細にできているのだ。

だが、ヒナタは違った。里に戻ったその時にはもう、彼女はここからみても平穏な心を持っていた。まるで近所に買い物に出かけていたかのように、穏やかで何事もない。彼女の部隊がどの部隊よりも任務を請け負っていた理由がわかったような気がした。多分、彼女とその仲間は、戦地にあつても里内にあつても、すぐにその場に相応しい精神を保てるのだろう。暗部第7部隊は、どこの部隊よりも忍術や体術でなく、精神力が強かったのだ。

シカマルから極秘の召集があつたのは、彼女が戻つて二十日が過ぎた頃だった。

召集場所は、かつて試験を受けた死の森だった。

「急で悪いな。・・・確認する。お前らはいま、何の任務にも就いていないな？」

その場にいた者、ネジ、ヒナタ、キバは頷いた。

「・・・よし。んじゃ悪いが、いますぐに出る」

「・・・どこに？」

キバの問いかけにシカマルが言いよどんだ。彼にしては珍しいことだった。シカマルが視線をネジに寄こす。目を合わせた後、その視線を周囲に移した。

「・・・半径500m。誰もいない」

ネジは白眼を発動し、周囲を見渡す。

「そうか・・・んじゃまあ、大丈夫だろう。シノ並の耳があればやっかいだが、幸いにも油女一族は信頼できる」

「時間がないから、手短かに状況説明だけする」

ようやくその肩から力を抜き、シカマルは話し始めた。

「ヒナタ、例の化け物が見つかった」

化け物、その言葉にヒナタの鼓動が激しく脈打ち始めた。

「ど……どこに？」

「里から南、数十キロの地点だ。お前らが消息を絶ったあの森から、3キロほど離れたとこだな」

「じゃあ早く行ってやらなきゃならねーだろ！なんで、んなところで、俺らぐだぐだしてんだ？」

「落ち着け、キバ。少々やかいなことがあつてな」

「どういうことだ？そもそも、見つけた、ということは里の者が動いていたということだろう？なぜ、こんなところで話さなければならぬ。しかも、人の目を気にして……」

「見つけたのはシノだ。暗部第7部隊が倒されてから今まで、油女一族は化け物と戦った森を起点に半径10キロ、蟲を使わずと監視していたんだ」

「一年も!？」

「ああ、姿を消したということは、深手を負った可能性が高い。そうそう移動できるとは思えない。どういう術で姿を消せるのかわかんねーが、いつかは絶対に出てくると思っていたんだ。自分を傷つけた奴を、人間を、恨んでいることも考えられるし、そもそも何十年も封印されていたんだ。おいそれと大人しく修まつたりはしないだろう」

「……それで最近、シノを見かけなかったのか……」

「油女一族には極秘で任務に就いてもらった。監視箇所は広大だし、結局一年にもなったが……奴が現れたら、どこよりも、誰よりも早く、情報が欲しかったんだ」

「一体、何をしようとしている？」

「倒すんだ。火の国で、倒す。どこの国にも渡さない。だが……まだ、はっきりしたことは言えねーが、木の葉の……誰か、が信

じられない。誰だかわかんねーが・・・だから、これは俺らでやる」
シカマルがはつきりと言い渡し、ネジとキバは頷いた。彼らも偵察を得意とする忍。里内の不穏な空気は薄々感じていた。中枢部に席を置くシカマルならば、もっと色濃く感じていたことだろう。

「本当は、ナルトやサスケらにも来てもらいたいんだが、あいつらはいま、国外にいるからな。リーも出ているし・・・チョウジは別任務に入っている。いま、動かせるのはここにいる4人だけだ」
暗部一部隊がほぼ全滅した相手。そんな相手にわずか4人で立ち向かえるのか。キバは両手を握り締める。

「医療忍者は多分、つか絶対に必要になるだろう。いのがサクラを呼びに走っている。あいつはいま火影さまの命で里外にいるが、急げば半日で連れ帰ってこれる」

ヒナタは身の内が沸々と騒ぐのを感じた。あいつと戦える。もう一度、あいつと対峙できる。黒の森で何度も耳元に響いた声。声が聞こえた。

・・・逃げろっ！

・・・生きろっ！

・・・！

カズの声が響いた。

逃げない！逃げない！逃げない！逃げない！

私は、逃げない！！

仲間だと、思っていた。誰よりも掛け替えのない、信頼できる、

仲間だと。

仲間だと、認められていると思っていた。命を預けてくれる、仲間だと。

だが、最後の最後で、仲間から外れた。逃げろと言われた。生きると言われた。

・・・一緒に、戦うことも許されなかったのか。

ヒナタは地を蹴って走り出した。後ろから慌てて三人と一匹がついてくる足音が聞こえた。

いま、ここで、戦わなければ先はない。この先、どれほどの戦いが待っていてようと、いまここで、あいつを倒さなければ生きていけない。信じた仲間の命を無駄にした。自分を庇わなければ、少なくともカズは生きていたのではないか。ずっとそう思っていた。あの時、隊長の声に躊躇しなければ、もっと早く走っていれば、カズは自分を庇うことはなかったのではないか。いや、もっと強ければ、一緒に戦うことを選んでくれたのではないか。

仲間だったのだ。とても大切な仲間だったのだ。

四つの命、彼らの命を踏みつけて、ネジと笑って暮らそうなどと許されることではなかったのだ。

獣の臭いが充満していた。大木が何本も薙ぎ倒されていた。巨大な犬が、そこにいた。

巨大な・・・だが、ナルトの九尾ほどではない。うまくやれば倒せる、シカマルはそう思った。

「シノ、悪かったな」

「問題ない。だが、俺は戦闘に加われないだろう。なぜならば、チャクラがほとんど残っていない」

さすがに疲労の色が濃かった。長期に渡る監視の上、現れた化け物をずつと足止めしていたのだ。おまけにシカマルへの連絡のため、チャクラを分断して使っていた。

「ああ、わかってている。お前は休んでいてくれ」

シカマルは、シノの蟲に体中を縛られている獣に向けて影を伸ばす。獣と対峙したとき、ヒナタがどう出るか気が気ではなかったが、いまのところはとりあえずチームで動くことにしたようだ。万が一、彼女が一人で攻撃を続けるようなことがあれば、影で縛らなければならなかった。たとえ結果的に化け物を倒せたとしても、仲間を失うことは最大限、避けねばならない。

「・・・よしっ！シノ、もういい」

『人間めがつ！』

巨大な身体を影で縛る。蟲が離れると、ぐん、と引っ張られるのを感じた。なりは九尾より小さいが、力はあるそうだった。

「ネジ！キバ！ヒナタ！・・・あまり保たねーかもしんねえ」

対象物の意に反してその身を縛る、というのは見た目より体力を使う。つまり、チャクラの消耗が激しいのだ。

「わかった！」

真っ先にキバが飛び出した。白い犬も飛び出す。こちらも犬にし

ては巨大だが、それでも目の前の化け物に比べれば子犬だ。身動きのとれない化け物に打撃を与える。

「ちいっ！」

弾き飛ばされ、木を蹴って、再び飛びかかる。先ほどより多くのチャクラを込めて打撃を加えたが、相手の皮膚にも届かなかった。

「・・・くそっ！なんかしんねーが、むちゃくちゃ硬いぞ！」

キバの忠告を耳に入れながら、ネジが飛び出す。チャクラを指先に込めて柔拳を繰り出す。

『ぐっ！』

いくつかの神経を切ることはできたようだ。だが、そこまでだった。剛毛と硬い皮膚、ぶ厚い筋肉を傷つけることはできない。数本の小さな神経を切りつけたところで、そのダメージは高がしれている。倒すまでにあと何百発打てばいいのか・・・

思わず愕然としたネジの視線の先を、小柄な人影が横切った。

ヒナタは走りながら、背負った剣を後ろ手に抜き、獣の巨大な後ろ足を斬りつけた。

『ぐわああ！』

ざっくりと切裂かれた切り口から血が噴出す。

ヒナタは飛び退きざま、数枚の札を取り出して獣へ投げつける。獣から十分な距離を保てる場所まで下がり、剣の血を払った。

「・・・そこが、暗部との戦いで負った傷か」

「そうみたい。わずかにだけど、庇っていたから」

シカマルは額に流れる汗を拭うこともできなかった。痛みにした打とうとする獣を、そのチャクラで押さえつけるのは並大抵のことではなかった。今にも振り払われそうになる。

『くそっ！人間風情が・・・！！』

「いまだ！一気にくぜっ！！」

「待て！！キバ！！」

獣が一際高く咆哮したとき、その身体に力が溜まるのをシカマルは感じた。やばい！そう思ったときには影が半分振り払われていた。

「うわあっ！」

獣の巨大な尾がキバと赤丸を捕らえ、巨岩へと叩きつけていた。

「キバ！」

シカマルは慌てて印を結びなおしたが一瞬間に合わず、巨大な左前足がネジを踏みつけた。

「・・・ぐっ！」

固い地面と圧倒的な重量に踏み潰され、息が詰まる。巨大な爪が肩に食い込んでいた。

「ネジー！」

あつという間の出来事だった。ヒナタには獣の強さがわかっていて。その身に染みて、嫌というほど理解していた。だからこそ、決して油断はしなかった。だが、初めて対峙するネジやキバにはわからなかったのだ。あの化け物がどれ程の力を蓄えているのか。どれほどの速さで動くのか。シカマルの影に縛られ、この距離なら、とネジが判断した距離は不十分であった。足を斬りつけられ、もはや動けない、とキバが判断したのはあまりにも甘かったのだ。

左足でネジを踏みつけたまま、もう片方の前足をシカマルへ向ける。だが、今度は影縛りが間に合った。間近に爪先を見ながら、背中中に冷たい汗が流れるのを感じた。

『命拾いしたな・・・人間』

獣が、にやりと口を開く。

『だが、どれほど保てるか・・・』

「くそっ！・・・ヒナタ、やれるか？・・・」

キバも赤丸も倒れたままぴくりとも動かない。ネジは踏みつけられたまま、その足の下から抜けられないようだ。肩に爪が食い込んでいる。無理に動くことはできないのだろう。シノが参戦しようとして背を預けていた木から身体を起そうとするが、立つのがやっとの状態だ。シカマルは辛うじて影を繋げているだけで、攻撃を加える余裕などどこにもなかった。

ヒナタだけが、頼りだった。

「・・・化け犬の身体の中に、何か、見える・・・」
獣を睨みつけたまま、わずかに視線をヒナタに向ける。

「何か・・・そうか！シカマルくん、もう少しがんばって」

ヒナタは剣を片手に獣へと飛ぶ。空中で縛られたままの前足を踏み場に、その頭上へ。獣の額中央に立つと、剣を突き入れた。

『ぐわああ！』

シカマルは慌てて獣の頭も縛り、ヒナタを援護する。彼女が何をしようとしているのかわからないが、一瞬の気の弛みで再度、仲間を傷つけることは避けたかった。

ヒナタの全体重をかけても剣は、三分の一を突き入れるのが精一杯だった。仕方がない。剣から手を離し、両手で素早く印を結ぶ。

「火遁！火竜！！」

剣を両手で握ると、彼女の手から発動された火炎が竜となり、剣を介して獣の身体に潜りこんだ。

『・・・ぐおおおおお！！』

慟哭が響く。

「ちっ！・・・ヒナタ！離れろっ！！」

カズは爆薬を使うことを得意とした。

巨大な獣の身体の中には、カズの残した無数の爆薬があった。小さなそれは、獣自身にも気づかれず、今まで眠っていたのだろう。

獣に突き刺した剣を媒介として、ヒナタの放った火がいま、その眠りから揺り起こしたのだ。

シカマルの影縛りはチャクラの消耗が激しい。巨大な獣を縛り続けることは難しいだろうとわかっていた。体中の爆薬を起爆させれば、その痛みでがむしゃらに動くだろう獣を縛り続けることはできないだろうと。

だが、わずかに振り回されたとしても、倒せると思っていた。
獣に埋め込まれた爆薬を、全て起爆させれば・・・

「ヒナタっ!!」

シカマルの声が、一瞬遠のいた意識を取り戻させる。

「……!!」

ヒナタは素早く、己の置かれた状況を理解した。ヒナタの華奢な左腕は、獣の巨大な右前足により木に縫い付けられていた。

詰めていた息をどうにか吐き出し、足裏にチャクラを集中させ木に立つ。これで全体重が左脇にかかるのを防ぐことはできたが、体勢は苦しいままだ。獣の足は重く、腕を僅かに動かせることもできない。

化け犬はもはや、後ろ足の自由を失っているだけに過ぎなかった。シカマルの影は辛うじて両後ろ足に絡みつくばかりで、延ばすことなどできそうにもない。

勝ち誇ったような獣の咆哮が響く。

『思い上がるなよ！人間!!』

ネジはヒナタの姿を仰ぎ見ながら、どうしようもなく焦る自分を落ち着かせようとした。状況を判断する。いま、この足の下から抜け出せれば、まだ、自分は戦える。彼女が何をしようとしたのかわかっていた。彼女が起爆させられなかった爆薬を、ネジの白眼も捉えていた。

どうにか身体を捻ろうとするが、肩に食い込む爪で動けない。ネジは己を踏みつける足を白眼でじつくりと見た。・・・ある。この足の中にも、小さな爆薬は仕掛けられていた。辛うじて動く右手でクナイを握り締め、突き刺そうとした。だが体勢が悪すぎて、その硬い皮膚を貫くことはできない。

シカマルはじつとりと汗の滲む両手で印を結び続けた。キバは身じろぎしているが足を負傷したようだ。動けたとしても、彼らの技を使いこなすことは難しいだろう。

「あいつの左前足を動かす。数センチでいい。なぜなら、ネジな

らばそれだけの空間があれば十分だからだ」

いつの間にかシノが横に立っていた。残り少ないチャクラを総動員して蟲を操っている。シカマルも、獣の傷ついた左後ろ足から影を外し、加勢する。

ふつと、身体が軽くなるのを感じた。ネジはシカマルとシノが何をしているのか、その白眼で見ていた。彼らが作ってくれた空間を利用し、クナイを握った右手を左肩に引きつけ、肩の力も使って突き刺した。微かに、その切っ先が獣の肉体に潜り込むのを感じる。

「雷遁！雷切！」

覆面忍者の得意技だが、ネジとて使えないわけではない。この体勢では威力は落ちるが、それでも十分な攻撃力を持っている。そう、微かに潜り込んだ切っ先を介して、己を押さえつけ続けるこの足に仕掛けられた爆薬を起爆させるくらいには。

『ちつ・・・！』

巨大な足の下からネジが飛び出すのが見えた。だが、最後に残った力を使い切ったのだらう。シカマルとシノがその場に崩れるように座り込む。ネジの腕からは血が流れていた。長時間踏みつけられていたせいで体力の消耗が激しく、縛られていない獣の巨大な牙や爪を避けるのが精一杯のようだった。

ヒナタは無理な体勢のまま、目前に広がる光景を見ていた。

あの時のようだった。あの時も、隊長が一人で戦うのを見ていた。逃げる、と叫び続けながら戦っていた。いまもまた、見ているだけなのだ。最愛の人が戦うのを。彼の命が奪われるのを、このまま見ているだけなのか・・・！

・・・逃げろっ！

・・・生きろっ！

・・・!

カズの声が響いた。ネジの、声なき声が響いてくる。彼もまた、ヒナタに生きよと叫んでいた。

嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だ！

生き延びるために戦ったのではない！自分だけが生き延びるために走り続けたんじゃない！

ネジのためだった。自分が死ねば彼が幸せになると信じて戦ったのだ。

初めて得た仲間のためだった。仲間が信じてくれるから、その身を挺して走ったのだ。

安全なところから見る夢など、いらぬ。

逃げる心など、いらぬ。

ヒナタはその指先にチャクラの糸を紡ぎだす。

『何をやる気だ？』

侮った拳、散々傷つけられた獣は、ヒナタの僅かな動きも見逃さなかつた。

『そんな糸で、我に何が出来る！』
より強く押さえつけられた。

『卑小なる存在よ！お前などに、何が出来る！』
獣の咆哮が、その手を介して身体に響いた。

きつ、と臍を上げ、獣を睨む。己の、弱い心を踏み殺す。ネジを見る。彼の幸せを願った。

腹が、据わった。

チャクラの糸が空を舞い、ヒナタの左腕に巻きつく。

「命を棄てようというこのときに、腕一本惜しんでどうなるというの!」

まるで自分に言い聞かせるように叫ぶと、チャクラの糸を力一杯引いた。

・・・逃げろっ!

・・・生きろっ!

・・・えっ!

呪縛から、解かれるようだった。身体が落下する。うまく着地したと思ったのに、バランスを崩し地面へと倒れこんだ。瞬間遅れて、激痛に切裂かれた。

「・・・!!」

奥歯を噛み締め、悲鳴を飲み込む。膝を曲げ、大地を踏みしめる。右拳を握り、左脇下を強く抑えつけた。

出血を甘く見てはいけない。

どんな傷であったとしても、まず、血を止めることを優先するんだ。

サクの声が聞こえた。彼は医療忍者として、ヒナタに応急処置の仕方を教えてくれた。チャクラを使わなくてもできる、実践に感じたものを。

「子!」

遠のく意識を叱咤するように叫んだ。

両手が使えないなら片手、片手も駄目なら口だ。
最後まで、戦う方法を考えろ。

副隊長の声が響いた。彼はどんなときでも、戦うことを教えてくれた。片手印も口印も、彼に叩き込まれた。

「戌、亥！」

ヒナタの名を叫ぶネジヤシカマルの声が遠くで聞こえた。

「酉、申、丑！」

ぐつと力を込めて立ち上がった。

「巳、辰!!!・・・捕縛！」

ヒナタが投げておいた札から墨で書かれた印が浮き出る。獣の周りを駆け抜けた黒い墨の旋風は、あつという間に絡み合い、獣を固定した。

『・・・!!』

・・・逃げろっ!

・・・生きろっ!

そして・・・!

ヒナタは大地を蹴って駆ける。一步、二歩。踏みしめる。右腕をしっかりと身体に引きつけ、失った腕とのバランスをとる。素人のする止血など嘲笑うかのように、血が噴出す。だが、あと数歩。まだ倒れるわけにはいかない。

歯を食いしばって飛んだ。札で縛った獣の腕を踏み台にする。だが、先ほどのように一步で頭まではいけない。一度着いた肩を蹴って再び飛び上がる。

『うおおおお!!』

獣が叫び、その身を擦る。札の呪縛など、あと数秒も持たない。

だが、それだけあればいい。残された右手で素早く片手印を結ぶ。

「雷遁！線鋭！！」

爆発させるには火が一番だけどさ、大きな物体に埋め込んだ爆薬を起爆させるのなら、雷のほうがいいんだ。

火より、雷のほうが早く深く、伝わるからな。

ネジの攻撃が、カズとの思い出を呼び起こした。カズは暇さえあれば任務中であろうと、いつも爆薬を作っていた。それはもう、楽しそうに。ヒナタは彼の手元を見ながら、爆発物に関する講義を聴いていたものだ。

『ぐわあああああああああ！！！！！！』

足下で、獣の身体に埋め込まれた爆薬が次々と弾けるのを感じる。遮二無二、獣が身体を振り回す。呪縛は完全に解けていた。剣の柄からヒナタの手が離れる。

冬の空が見えた。あの日、カズの身体の下から見た夏の空。あの時も、薄れ行く意識の中で、冷たくなっていくカズの体温を惜しみながら、夏の青い空を見ていた。

・・・逃げろっ！

・・・生きろっ！

そして・・・戦えっ！

カズの、声が届いた。

ああ、そうだった。どうして忘れていられたのだろうか。彼は、戦えと言ったのだ。逃げて、生きて、勝機を掴めと、そう言ってくれたのだ。

大きな瞳から涙が溢れた。隊長の追わせた傷が、獣の自由を奪ってくれた。サクの教えが、腕を失くしてなお、この身を動かさせてく

れた。副隊長の課した修練が、腕一本でも戦う術を与えてくれた。そして、カズが死に面しながらも必死に埋め込んでくれた爆薬が、突破口を切り開かせてくれたのだ。

独りではなかった。独りなどではなかったのだ。

何をいじけていたのだろうか。不幸だと呟き、不幸だと叫び、何を卑屈にいじけていたのだろうか。いつだって仲間がいたのだ。ずっとずっと声が聞こえていたのに、なぜ最後まで聞こうとしなかったのか。皆、ずっと、戦えと言ってくれていたのに。

仲間がいた。最高の仲間だった。

そしていまも、大切な仲間がここにいる。

叫び続ける獣、焦げた臭い、振り回される巨大な足、尾、巨大な口からは唾液が飛び散る。振り回される頭から空に投げ出されたヒナタを、ネジは抱き止めた。

「ネジ！ヒナタを貸せ！お前は、止めを刺すんだっ！！」

シカマルの言葉に僅かながらに躊躇した。それでも苦しげに眉を寄せるヒナタをシカマルに託し、一足飛びに獣の頭へ辿りつく。チャクラを足下に集め、振り落とされないようにする。剣の柄を両手で握り、力任せに根元まで突き入れた。そして、残りのチャクラを使い切るように、雷遁を発動させた。

ネジはヒナタの左腕を大事そうに抱え、息絶えた獣の傍らを通り過ぎる。軽い腕だった。

「・・・ヒナタ・・・」

傍らに座り込む。血の気を失った小さな顔が、これから起きるところをネジに突きつけていた。

「・・・ネジ兄さん・・・どこ？・・・」

彼女の瞳は開いていたが、もはや見る力を失っているようだった。

足を引きずりながら側に来ていたキバや、座り込むシカマル、シノとネジの別がついていなかった。

「……ここだ」

ヒナタの右手を取り、頬を寄せた。

ふっ、とヒナタが笑う。ネジに握られた右手が器用に動き、印を結んだ。

「なにをつ！？」

驚くネジの額に、人差し指と中指をとん、と付けた。

「……っつ！」

鋭い痛みが額を突き抜ける。何をしたんだ。だが、遠い昔の記憶にある痛みだった。

「……よかった……これで、もう、日向に縛られることはないよ……」

彼女の言葉にもしやと気づき、ネジはクナイを取り出した。額宛を片手で除け、クナイに映す。呪われた印は、きれいに消えていた。

「どうしてこんなっ！」

ネジ自身は呪印の結び方など知らない。だが、体力もチャクラも使わずに発動する術などない。ヒナタのこの状態で術を発動させることがどういうことか、誰の目にも明らかだった。

「ネジ兄さんに……幸せになってもらいたいの……」

彼女は大きく息を吐き出した。

「……ネジ兄さんが……大好きなの……」

囁くようにそう告げると、忙しなく動いていた彼女の胸が止まった。

「……！！」

何を、どうすればよいのかわからなかった。どうして医療忍術を修めておかなかったのか！ネジは己の怠惰を罵った。

「・・・ヒナタ・・・ヒナタ・・・」

華奢な身体をそつと抱きしめ、血に濡れた髪をなでた。小さな身体が暖かみを失っていく。指から砂が零れ落ちるように命の灯火が消える。

どうすればいいのかわからなかった。何をすればいいのか、わからない。

呼吸を止め、鼓動を止めた彼女の身体からはもはや、流れ出す血はない。では止血は必要ないのか。呼吸を取り戻させるためにはどうすればいいのだ。鼓動を取り戻すためにはどうすればいいのだ。

ネジの頭の中はぐるぐると駆け巡り、焦点が定まらない。頭のどこかで冷静な自分が言うのだ。

何もかも、もう終わったのだ、と。

そんな言葉を振り払い、必死に考える。

一体、何が悪かったのだ？何がきっかけでこんなことになったのだ？

自分がもつと強ければ、あんな化け物すぐに倒していればよかったのだ。もつと修行を積んでいればよかった。

足の下から抜け出したとき、もつと余裕を見せて動いていれば彼女はあんな無茶をしなかつたはずだ。いや、あの時油断しなければ無様に踏みつけられることもなく、彼女も無理な戦いを挑まなかつたはずだ。

死の森で任務を告げられたとき、彼女を縛つてでも来させるべきではなかったのだ。いや、シカマルが召集したとき、彼女が別の、もつと安全な任務に就いていればこんなことにはならなかつたはずだ。

幸せと言えなくとも、平凡な妻だつたはずだ。俺の、妻だつたはずだ。そうか、あれがいけなかつたのか。自分と結婚なぞしなければ、彼女は忍であつたとしてもせいぜい中忍で、暗部へいくことも

こんな化け物と対峙することもなかったはずだ。

結婚していてもちゃんと始めから愛していると言っていれば、彼女は結婚生活に満足し、忍へ復帰することもなかったのではないか。

ああ、一体、どこからやり直せばいいんだ・・・

もっと彼女に対して素直になっただけなら、こんなことにはならなかったはずだ。ああ、そうだ。あの時も無視なんかするんじゃないか。あの時も、もっと優しい言葉をかけていればよかった。中忍試験の時も、もっとやりようがあったはずだ。父上がヒアシ様の身代わりにならなければ、彼女がこれほど負い目に感じることもなかっただろう。それならば、彼女が誘拐されるような事態がなければ。里の、日向家のだ真ん中で、宗主の娘が攫われるなどといった無様なことを起さなければよかったのだ。

どこまで降りていけば、このような事態を招かなかったのか・・・

そもそもなぜ、彼女が死ななければならないんだ。彼女は誰よりも幸せになるべきなんだ。いままでの苦しみは何だったのだ。これからの幸せのために苦しんだんじゃないのか。これでは苦しいだけの一生ではないか。そんなのは不公平だ。

彼女よりも死ねばいいやつなんていくらでもいる。あいつも、あいつも、あいつも、あいつも。なのに、なぜ、彼女でなければならないんだ。

死神がいるのなら、いま、一個の命を持っていかねばならないのなら、あいつにしる。

ネジは、かつて対峙した敵の顔を思い浮かべた。

白眼でなければならぬのなら、あいつでもいい。

ネジは、どうしても好きになれない分家の者の顔を浮かべた。

いや、彼女のようなすばらしい人の命ひとつと、あいつらの命が同等のわけがない。それならば、あいつとあいつを連れていってくれてもいい。二つで足りないのなら、あいつも連れていけ！

ネジは浅ましくも、命の数を数えた。

ひとつふたつみつつよつつ、いつつの命を数えても、いくつの命を差し出しても、彼女が戻ることはないのだとわかっていながら・

誰でもいい！どいつでもいい！どんなに穢い技を使ってもいい！世界を破滅させる奴でもいいんだ・

頼むから、誰か、彼女を助けてくれ！

「・・・ん！・・・ネジさんっ！・・・ちよつと・・・！！・・・どきなさいっ！！！」

強烈な衝撃を受けてネジはヒナタから引き剥がされ、あつと言つ間もなく弾き飛ばされていた。数本の木を薙ぎ倒し、背中に激しい痛みを感じて止まった。

何が起きたのか、全くわからなかった。衝撃で倒れてきた枯木や枝、葉といったものに覆われ、呆然と空を見上げたネジを、シカマルが助け起こす。

「・・・大丈夫か？」

数十メートル先に人影が見える。ヒナタの横で二人の人物が膝を着いていた。少し離れてシノとキバ、そして赤丸が心配そうに見ていた。

「いの！左腕を頼むわよ！細かいのは里でやるから、血流だけ確保できるように血管を繋いで！！私は生命線を確保する」

「どうやら、間に合ったようだな・・・」
シカマルが溜息を吐いた。

ネジも、詰めていた息をゆっくりと吐き出した。体中から力が抜けていくのを感じる。彼女たちが小柄な身体を背負い駆け出したのを見た。

空を仰ぎ、感謝した。先手を打ってくれていたシカマルに。走り続けてくれたのに。全てを置いて駆けつけてくれたサクラに。

全てのものに感謝した。安堵の涙が、泣き濡れた頬を再び濡らした。

目覚めたとき、まず視線に入ったのはネジの顔だった。泣いているような笑っているような、今まで見たこともない顔だった。「よかった・・・」そう、息と共に吐き出すように呟くと抱きしめてきた。「まだ駄目よ！」と怒ったサクラの声にも涙が混じっていた。

集中治療室から一般病棟に移って、一番にやってきたのはキバだった。泣いているような怒っているような顔で、「ばかやろう！」と叫び抱きしめられた。「勝手に触るな！」そう叫んだネジの声は本気で怒っていた。

キバが来た翌日にはシカマルが顔を覗かせた。安堵して、そして呆れたような顔をして「お前・・・むちゃするなあ・・・」と言われた。

シカマルが来た午後にはシノがやってきた。無言で長時間見下ろしたあと、ぼん、と白い箱をベッドの上に置いていった。陰気なやつだ、とネジは言ったが、なんとなく二人は似ているとヒナタは思

った。シノの置いていった箱には無数の蟲が入れられていた。「・・・！！なんだ！これは！？」ネジは絶叫してすぐさま棄ててしまったから、それが油女一族に伝わる抜群の滋養強壮剤だとは言えなかった。

たくさんの方がお見舞いに来てくれた。今度は素直に笑えた。楽しく、話げできた。
優しい時間だった。

心が満たされていたからだだろうか。入院生活は短かった。多少の不自由さが残っていたが、腕も使える。

ネジと過ごす五度目の正月も、家で迎えることができた。

12月の終わり、ヒナタの二十歳の誕生日にネジは簪を贈った。腕の良い職人に特注で頼んだそれは品があり、彼女によく似合っていた。派手ではないが随所に職人の技が映え、一見ただけで高価なものだとわかる。昨年贈った着物を纏い、艶やかな漆黒の髪に銀色の簪を挿して幸せそうに笑うヒナタを、ネジは強く抱きしめた。彼女がどんな思いでアゲハに贈る簪を選んだのかと思うと、己の仕打ちの酷さを悔やむ。そして、二度と彼女の心に影は落とすまいと、ネジは改めて誓ったのだ。

それから数日で新年を迎えた。昨年のように日向の年賀行事を欠席することもできず、彼らは夫婦で出席した。ネジの心配をよそに、概ね穏やかに時間は過ぎた。さすがに洞察力を誇る日向一族、彼女の微妙な変化を感じ取ったのかもしれないが、その理由の多くはヒアシとハナビの変わり様だろう。今までのあれは何だったのかとネジが呆れるほど、彼らの態度は一変していた。日向の鼻つまみ者がいつのまにか宗主、そして次期宗主の掌中の玉になったことを一族は理解した。当のヒナタはただ困惑しただけなのだが。

1月5日、彼らは近くの神社へ赴いた。特別信心深いわけでもないネジと、全く信じないヒナタとでは縁のないところである。そんな彼らが神社へ向かったのには訳がある。

中忍となつてからはいつもかならず誰かが里外におり、仲間が集まることなど皆無に等しかったが今年は珍しく、全員が里内にいた。この機を逃してなるものかと、サクラといのが奔走し全員を招集することに成功したのだ。面倒くさがりのうえに多忙を極めるシカマルと、群れることを嫌うサスケ、シノを説得すれば後は早かった。始めはヒナタの同期だけで会う予定だったのがいつのまにかネジに

テンテン、リーまで加わり総勢12人となった。

「たくさんだね」

「大丈夫か？」

どちらかという人酔いし易いヒナタを気遣う。小さく笑って頷いた彼女をサクラが呼ぶ。本日の打ち合わせを始めた女性陣3人の輪に入っていくヒナタの後ろ姿にネジは見惚れる。

ネジを始め男は全員忍衣だったが、4人の女性は皆少しだけ着飾っていた。ヒナタも忍衣で行こうとしていたのだが、ネジが無理に着物を着させた。薄い紅色の花柄。ヒナタはどんな着物もきれいに着こなす。結んで垂らした黒地に金系の帯が彼女が動くたびに揺れ、美しくもかわいらしい。

「・・・うちの奥さんが一番かわいい・・・」

頭に浮かんだ言葉をそのまま音にされ、ネジは慌てて振り返る。

そこには、にやにやと笑うシカマルの顔があった。

「よ、あけましておめでとさん」

「・・・」

「正月早々睨むなよ・・・一年の始まりじゃねーか。正月くらいにこやかにいこーぜ」

「5日にもなれば正月ではない」

「ま、そうなんだけどさ・・・お、シノが来た。めっずらしいなあ」

「・・・お前の差し金じゃないのか？」

「・・・さあ？」

ネジはシカマルの本意がどこにあるのか探るように、見た。だが彼の表情からは何も窺えない。やはりこいつの腹を探るのは無理かと諦めかけたとき、神社の階段をナルトとチヨウジが上ってきた。

「全員揃ったわね。じゃあ移動するわよー」

いのの号令で毛色の違った同窓会が始まった。

移動した先は、うちは邸であった。初めて訪れたキバヤリーはそ

の広大さに、玄関で立ち竦む。

「でっけー・・・オレの部屋、お前んちの玄関に入るわ」

「邪魔なだけだ」

広さだけなら日向宗家に敵わないだろうが住んでいる人間がサスケひとりなのだから、無駄に広いと言わざるを得ない。呆然と呟いたキバにサスケがそっけなく言い捨てた。「どうぞ」も「上げれ」もなく一人でさっさと家の中に進んでいくサスケを、サクラというのが慌てて追いかける。いつも彼を追いかけていた少女たちも、現実を見極められる女性になった。だが今は、サスケについていかなければ、このだだっ広い屋敷のどこに台所があるのかわからない。その彼女たちの後ろを重そうな荷物を提げてナルトとチョージ、リーが続く。

「大丈夫なのか？」

「何が？」

「この人数の料理が作れるのか？」

「いけんじゃねーの。サクラは何やつても手際がいいし、いのだつて負けてねー。女が4人いて、それにナルトもサスケも手伝うだろ？あいつら1人暮らしが長いからなー、ナルトのメシなんて下手な料理人よりうまいぜ？」

もちろん全く手伝う気などないシカマルはネジにそう言うと、彼らとは反対の方向へ家の中を進む。

「どこにいくつもりだ？」

「どんだけ広くても、家なんて似たようなもんだろ」

そう言っただんずん進むシカマルの後に、シノとキバ、ネジが続いた。いくつかの襖を開け進み、目当ての場所に辿り着く。

「ほら見て見るよ。なかなかいいじゃねーか」

十何年も手入れを怠られた庭に面した縁側を見つければ、シカマルが座る。少し離れてシノも座り、まあいいかとネジも座った。必要最低限の掃除しかされていない家だが、他人の家の中で犬を歩かせるわけにもいかず小さく変幻させて小脇に抱えて連れてきた赤丸を、

キバが庭に放す。その場に落ち着いてのんびり庭を、もとい雑草地を眺める4人のもとにチヨージがやってきた。

「何してんの？」

「いや、別に」

答えになっていないシカマルの言葉に気分を害した風でもなく、いのから与えられた菓子の袋を開けると豪快に食べ始めた。

「何、してるの？」

チヨウジが来てから数分も経たないうちに、湯飲みを盆に乗せたヒナタとテンテンがやってきた。

「庭を見ていた」

「・・・庭、ねえー」

シノの答えにテンテンが顔を引きつらせる。

「もうご飯できたの？」

「できるわけないでしょ。こんな短時間で」

チヨウジに即答すると、テンテンはネジに振り向く。

「ネジ、迎えに来たわよ。台所にきて」

「何故？」

「だってヒナタちゃん、役に立たないんだもの。責任取って、旦那が代わりに働きなさい」

「・・・承知した」

立ち上がったネジの袖を、ヒナタが小さく引いた。

「ごめんなさい・・・」

「構わない。気にするな」

ぼんぼんと軽く叩くようにヒナタの頭に触れて、ネジはテンテンに連れて行かれた。

「お前、何やったんだよ？」

「いや役に立ってねーつうんだから、何もやってないんだろ」

「ヒナタ、ネジと結婚してから使用人はいないのだろう？食事はどうしていたんだ？」

「始めの頃は私が作ってたんだけど、今はほとんどネジ兄さんが作ってくれるの・・・ちゃんとやってるつもりだったんだけど、みんなのお料理見てたら、私ほんと無茶苦茶やってたんだなあ・・・」

「・・・何、やってたんだよ？」

キバが怖る怖る訊ねる。

「お米を洗うの知らなかったから、そのまま炊いていたし、野菜は石鹸で洗ってたんだよね。お料理にお酒をつかうことも知らなかったし、みりんなんて今日初めて知ったよ。下味をつけるとか、順番に野菜を煮ていくとか、お料理って技が一杯あったんだね」

「・・・でも、食べられるものができていたんだらう？」

シノが辛うじてフォローを入れる。

「うん・・・だけど、なんか変な味がしてたんだよね・・・なんでらう？」

「と、とりあえず食べてたんならいいんじゃないかねーのか」

「そ、そうだよな。ネジは食ってたんだろ？」

「ううん、あの頃はネジ兄さん、家にいなかったもの。あ、そうか。ネジ兄さん好きな人がいたから帰ってこないんだと思ってたけど、ご飯がおいしくなかったのも理由のひとつだったんだ」

びきーん。

かける言葉のひとつも見つからずきれいに固まる4人の男を余所に、ヒナタが脳天気続ける。

「今もおいしくないままなんだけどね。うーん、練習しなきゃまたいなくなっちゃうのかな？」

につこり笑って小首を傾げて聞いてくる様子がかわいらしいのだが、訊ねる内容が少々重くてシカマルでさえ返答に困る。さほど広くもない里でおまけに同年代なら、お互いの所行など知りたくなくても耳に入ってくる。ネジとヒナタの結婚を知らなかった者たちでも、彼のお遊びは知っていた。彼らの結婚時期と、ネジが花街で目撃され始めた時期が重なるということにも自ずと気付く。

「ま、まあ、大丈夫じゃねーのか」

「そうかな？だといいんだけど……。ネジ兄さん、お料理上手なんだよ。時々教えてもらってるんだけど、なかなかうまくならなくて。ああいうのも才能があるのかなあ……」

「ありますよ！」

いきなりかけられた威勢のいい声に全員が振り向く。そこには白い歯も眩しいリーが立っていた。「どうしたんだ？手伝ってたんじゃないのか？」

内心、助かったと思いつつキバが声をかける。ヒナタがネジを責める気などないのはわかっているし、もちろん彼女は嫌みなど言ってるわけでもない。そんなことはキバもシノもシカマルもチヨウジも皆わかっているのだが、同じ男として微妙に気まずい雰囲気味わっていたのだ。

「……追い出されました……」

「う……まあ、座れよ」

熱い男はどこまでも熱く、たかが料理ごときにそこまで落ち込む必要はないだろうとキバは思うのだが、これがリーのいいところとも言える。彼の何事においても真面目な態度には呆れと、それ以上の驚嘆を感じる。今現在アカデミーで教師をしているリーだが、彼の生徒は皆異常にノリが良く優秀だということを知りながら、彼は不作続きだと言われる昨今だが、彼の生徒たちが巣立つ頃には豊作が訪れるだろうと密かに楽しみにしている。

「お茶、持ってきてきましょうか？」

「あ、いいですよヒナタさん。もう一人来ると……ほら、来ました」

得意気に指さした先には盆に乗せた2人分の湯飲みに急須、もう片方の手にポットを提げたサスケが慥然とした表情で立っていた。

「だいたいメシなんぞ、食えりゃーいいんだ」

「そうですね!」

「それをあんな、ちまちまちまま・・・」

「同感です!豆のすじがあつたからつて、何の不都合もありませ
ん」

珍しい2人がタツグを組んで、料理ネタで意気投合する。それをキバが横目で見ながら、「すじは取れよ、食い難いからな」なんて言っている横でヒナタが「豆のすじつて何?」などと何気に爆弾を落してくれた。それにまたシノが律儀に説明を始めたものだから、シカマルはつくづく平和を感じてしまった。

一歩外に出れば、この里はあちこちで闇に浸食されている。気付いている者は僅かだろうが、それは確かに起きていること。参謀役として里の中核に座り初めてまだ数年だが、まさかここまで里が疲弊しているとはシカマルも思っていなかった。3代目が偉大だったのか、代替わりというのはどこでもこうなるのか。今日の会の発案者はサクラだが、彼女はただ昔話に花を咲かせただけではない。サクラも参謀役補佐候補として、シカマルと近い位置にいる。シカマルに劣らず聡い彼女は、サクラ独自の情報網で何かを掴んでいるのだろう。あるいは今日、シカマルが何かしらの行動を起こすのではないかと、見ているのかもしれない。若しくは、面倒くさがり彼の背中を押しているつもりなのか。

いのも、感づいている。シカマルと婚約したばかりの彼女は、幼少期からずっとサクラと競い合ってきた。負けず嫌い同士で張り合つて、なのに何故か認め合つて。いのはサクラが何かをしようとしたとき、わけも聞かずに協力するところがある。彼女も今日、何か起きるのだと覺つていた。

どいつもこいつも、シカマルはうっすらと雪が残る庭を見ながら、

にやりと笑う。

今年は去年に比べ、雪が少ないようだ。

黒い土を覆う、雪は少ない。

「そういえばヒナタさん、黒の森にいたんですよね？」

リーが思いついたようにヒナタに問う。シカマルが何気なく問おうと思っていたことを、いともあっさり口にするリーに脱帽した。天真爛漫なところは金髪の少年と負けない。いやもう金髪の方もこちらも、少年などというかわいらしい表現は似合わない体格の良さだが。

「はい」

「どうでしたか？僕、まだ二回しか通ったことないんですよ」

「どう・・・と言われても。相変わらず、騒がしかったですよ」

「あれからまた、侵入者があつたのか？」

「うん。前に任務に就いたときはさほどでもなかったんだけど、最近多いね」

「侵入者？黒の森を通るのか？」

シノがサングラス越しに視線を送る。

「うん。たくさん来るんだよ。案内した木の葉の忍より、侵入者の方が圧倒的に多かったから。・・・私、みんな殺しちゃったんだけど、一人くらい生かしておいたほうが良かった？」

窺うようにシカマルを見た。別に上目遣いに見ようと思ったわけではないのだが、誰も彼もによきによきと大きくなってしまった。

サクラたちと比べても相変わらず小柄なままのヒナタでは、必然的に見上げる形になってしまう。

「いや、いい。黒の森では不審者は即、討つことになってるからな。それに捕らえたところで口は割らねーだろ」

そう言つと、ほつとしたようにヒナタは笑った。その笑顔に吸い寄せられそうになって、焦る。ガキの頃はどこにいるんだかわからねーほど存在感がなかったのに、反則だ。わずか4、5年の間にこ

うも変わられると、まるで術をかけられているような心境になる。ときまぎとし始めたシカマルの心臓を止めるつもりなのか、ばーんと大きな音をさせてチヨウウジが菓子袋を破った。

「……終わっちゃった」

「もうひとつ、貰ってくるね」

残念そうに呟いたチヨウウジにくすくすと笑いながら、ヒナタが立つ。そのまま家の中へ消えていく華奢な後ろ姿を見送って、キバが口を開いた。

「……お前ら、なんも感じねーの？」

「何が？」

シノが答える。

「ヒナタだよ。なんか変じゃねー？」

「何が変なんだ？」

キバの言わんとしているところが掴めず、サスケが怪訝な表情を浮かべた。

「何って……なんつーかこう、いままでのあいつと違うだろ？」

「いままでって？」

興味の全対象であった菓子袋が無くなったので、チヨウウジも話に参加する。

「いままでは、おどおどしてるつーか、弱々しいところがあっただろ？いまはそういうのが一切ねーんだよなあ」

「いいことじゃないの？」

「いい……まあいいことなだけどさ。なんかいきなり変われると……本人じゃねーような気がするんだよな」

「いきなりではないだろう。俺がスリーマンセルを出たのが13だ。それから7年、ヒナタとまともに話をした覚えがない。その間に、ヒナタが変わるきっかけがあったとしても不思議ではないだろう？お前も似たようなものじゃないのか」

「まーな」

「何、キバたちってスリーマンセル解消してから全然会ってない

の？」

「普通そうなんじゃねーのか」

「普通、違うよ。僕たちとこは何かにつけて会ってるし、7班もそうでしょ？」

「まあな。リーもそうじゃないのか？」

「ええ、今は飲みにも行きますよ。三人で。それに三人で任務に就くこともあります。やっぱり勝手がわかってますから、何かとやりやすいんですね」

「そうだよね。僕もシカマルやいのと任務に就くのが一番やりやすいよ。今はシカマルが参謀にいつちやっただから無理なだけだよ」

「・・・そういうものなのか」

呆然とキバが呟けば、「そうだ」と異口同音に返答された。

「8班つて、つれないんだね」

チヨウジの何気ない言葉がキバや、そして意外にシノの胸に刺さる。ヒナタが言わなかったとはいえ、彼女の結婚に3年も気付かなかったのだ。忍の里にあつてスリーマンセルの絆は強い。それなのに自分たちは、あまりにもお互いを知らずにいたことに気付いた。

「確かにオレはこの数年、ヒナタに何があつたとか知らねーけどさ。・・・でも、ああ変わるとは思えねー方向に変わってるんだよな」

「・・・そんなに変わっただろうか？」

「さっきの会話だつてそうだ。前のあいつなら、人を殺すなんて平気で口にしたりしないだろ？ヒナタが自ら手を下すなんてのは、考えられねえ。それに・・・あの化け犬のときも・・・」

「忍なんだから、当たり前だ」

サスケが切り捨てるように言う。キバとシノの会話を聞いていても、キバが何に拘っているのかサスケにはわからない。

「んなんわかってる」

「・・・キバは、ヒナタが弱いままのほうがいいのか？」

「違う、けどさ……」

「ではどのように強くなればいい？人に優しく、殺さず、強く・
・器用だな」

「そうじゃねーって！」

皮肉に笑うシノにキバが吠える。ヒナタには強くあつてほしい。

忍の道で弱いということは、遠からず死に辿りつく。彼にもそれは十分わかってている。だが自分の知っていた儂い少女のあまりの変化に、キバの認識がついていけないのだ。

「お前は、ヒナタに弱いままでいてほしいんだ。強くなったとしても、程度があるんだろ。例えば、キバを頼らなくてはならないくらいには弱くあつてほしい……。お前は突っぱねていながらも、ヒナタを助ける自分に優越感を感じていただろ？」

異論を唱えようとしたキバだが、告げる言葉が見つからず口ごもる。凶星を指された気がした。

「……安心しろ。ヒナタは昔から、誰も頼つてなどいないさ」
サングラスの隙間からちらりと覗くその目には、寂寥感が浮かんで見える。

「あの頃のヒナタは、僅かな波風が立つことさえ怖れていた。自分を殺して平穏が訪れるなら、迷わずそちらを選択していた。オレやキバ、紅の顔色をいつも窺って、誰かを慕っているわけでも、誰かに添っていたわけでもない。誰も頼りにしていない、あの子は誰よりも自分の力で立っていたさ。……ああ、違うな。一人だけ例外があつた……」

「ナルトか？」

「違う」

サスケの言葉にシノは首を振る。

「ネジですね」

「ああ。ヒナタはいつも、あいつにだけは特別だった」

「……そうか？怖がっていたと思えねーが」

「ヒナタが俺たちに遠慮していたのは、争いを怖れていたからだ。」

三人で描く輪が、少しでも乱れることを怖れていた。だが輪を繋ぐ人間が誰に変わろうとも、それは関係ない。俺がサスケに変わっても、お前がシカマルに変わっても、何ら関係ない。ただ、空気が乱れなければそれでいいんだ。・・・だが、ネジは違う。ヒナタは、あいつだけは、ネジ自身を怖れた」

「それが、特別なのか？」

わけがわからないと、キバが頭を掻いた。いつの間に戻ってきたのか、広い庭で駆け遊んでいた赤丸が彼の前で座る。

「特別だ。・・・あの中忍試験。お前はヒナタに棄権を促しただろう？相手がネジでなければ、ヒナタは迷わず棄権していたはずだ。その方が、スリーマンセルであるキバが満足するからだ。だが、相手はネジだった。だからヒナタはお前の意見を聞かなかったんだ。誰が何と言おうと、ヒナタにとってはネジの真意の方が大事なんだ。あいつはお前と同じように棄権しろと言っていたが、その実ヒナタとの試合を望んでいたと俺は思う」

「ええ、僕もそう思いますよ。ネジは分家である自分、宗家であるヒナタさんに拘っていた。けれどいつまでも拘る自分を変えたいとも、思っていた。彼が本当にヒナタさんと戦いたくなかったのなら、一撃で終わらせていたはずですから。ヒナタさんの戦い方を見たかったのだろうし、見せたかったのではないでしょうが。・・・ネジにとっても、ヒナタさんは特別な人でしたよ」

「・・・そういうことだ、キバ。ヒナタはネジが好きだったんだろ？な。だがネジに受け入れられない。あの頃のあいつは、変に意地を張っていたから・・・」

「そのとおりです！ネジはいつつも、肩に力が入っていましたよ」

「ネジに受け入れられない、だが一人でもいられない。人は、独りで生きるのは寂しい。だから必死に誰かを求めようとするんだ。ヒナタは自分を変えてまで、俺たちの型に収まろうとしていた」

「ナルトは、叫んでアピールしてたな。自分の存在を」

「・・・俺が、何？」

火影になる、いつもそう叫んでいた賑やかな少年の姿を思い出し
皆がふつと笑ったところに、当の本人が顔を出した。きよとんとど
こか間の抜けた顔で、自分の名を口にしたサスケを見る。

「いや・・・なんでもねえ」

「なんだつてばよ」

少し口を尖らせて抗議する姿からは、任務中の精悍さはない。

「・・・お前、何持っているんだ？」

竹で編まれた大きな籠を片手で持って立つナルトに、嫌な予感を
覚えつつシカマルが訊ねた。

「これ？サクラちゃんがさ、縁側でくつろぐ面々にも働かせるつ
てさ」

そう言つてどさつと降ろされた籠には、大量の空豆が入っていた。

「・・・また、豆かよ」

頂垂れるサスケとリーの意味がわからず、ナルトがシカマルを見
る。

「ま・・・色々とな」

「ねえ、それよりヒナタは？お菓子、取りに行つてくれたんだけ
」ど

「ああ、あれそういう意味だったのか。ヒナタがさ、座敷に菓子
袋並べてじーっと見てんだよな。何やってんのかと思つてただけ
どさ、どれ持っていこうか悩んでたんだつてば」

「喜ベキバ。・・・変わらないところも、ある」

高く立てた襟の下で、シノが薄く笑つてみせた。

「ふん、んでもさ、オレはちよつとわかるつてば」

漸く戻つてきたヒナタも含めて、先程の会話を繰り返す。本人に聞かせるのもどうかと思うのだが、ナルトに説明しているときに彼女が戻ってきてしまったので仕方なくそのまま続けたのだ。

「オレもさ、だーれもいなかったときは、どうしていいのかいつも迷つてた気がする。初めてイルカ先生が認めてくれて、そんで、オレはオレでいいんだつて思えたんだよな」

豆を置いて、そのまま戻るつもりだったナルトだがそのまま落ちて着いてしまった。ヒナタと似たような境遇だった彼には、彼女の心境がわかる気がする。

「・・・私、無理してた？」

「無理をさせていると、思っていた。だが今は、俺がヒナタを傷つけたら、ヒナタは嫌だ意思表示してくれるだろう？だから安心して、話ができる。壁がなくなったと感じる」

シノが空豆の剥き方をヒナタに教えながら言った。ヒナタは今日初めて、空豆が鞘に入っている状態を目にした。枝豆よりも遙かに大きな鞘を開けると、白い綿の寝床に艶やかな緑玉が収まっている。それに素直に感動するヒナタの姿が、眩しいものでも見るかのような印象をキバやシノに与えた。

彼女が本当に喜びの感情を表すのを、彼らは初めてみた。

「・・・よし！シノ、ヒナタ、飲みに行くぞ。えーと、明日、いいな！」

何を思いついたのか、キバがいきなり叫ぶ。

「何を言っている・・・」

「どうしたの？キバくん」

「オレたちには、会話が足りねえつて思ったんだよ。せつかく縁あつてスリーマンセルになつたんだからな、もつとお互いのこと知

「つっててもいいんじゃないか？」

「まあ、一理あるな」

「・・・そう？」

「ヒナタ、お前冷たいぞ。たまたま同じ班になったからって、解散したらはいそれまで、つてのはなんか哀しくねーか？」

自分の意見に珍しくシノが同意したこともあって、キバはなんだから盾をもらったような気がした。

「ヒナタは、嫌なのか？」

「嫌・・・というのじゃないんだけど」

シノの問い掛けに、小さく首を傾げる。

「どうしていいのか、わかんねーんじゃないのか？」

「・・・え？」

「オレもずっと里の奴らに無視されてただろ？んでも最近、なんか妙に親切つーか、暖かいんだよな。始めはどう接していいのか、わかんなかったってば」

火影になる、今の彼がそう口にしても馬鹿にするものは、もう誰もいない。彼もまた、あの頃からは信じられないほどの変わり様だ。彼らの代が優秀だと称えられる所以は、ひとえにナルトのお陰かもしれないなかった。他を圧倒するほどの速度と強さで、成長していった。周りの大人たちの度肝をいくつも抜きつつ、風のように駆け抜ける。そんなナルトに置いて行かれまいと、サスケもキバもシノも、リーやネジ、チョウジにシカマルでさえ追いつがった。もちろん、負気だけは異常に強いくノ一たちも一緒に走ったのだ。

「そりゃさ、いきなり水ぶっかけられたりするより嬉しいんだけど。嬉しいんだけどさ・・・騙されてるんじゃないかって。また、すぐに元に戻るんだらって、思った」

子供の頃にはわからなかった。何故、ナルトがここまで里の大人たちに邪険にされるのか。だが彼に納められている獣の存在を知りたいま、彼の背負ったもの、彼の背負らされたものの大きさを理解する。

「・・・そうだね。戸惑いは、あるよ。キバくんも、シノくんも・・・みんなも、前と違う。どうしていいのかわからない。私の頭がどこかに行っちゃってる間に沢山変わってて・・・特に、日向が違うの。父上やハナビ、日向の人たちがすっごく優しいの・・・不気味なくらい」

「不気味つてなー、そんなに違うのか？」

シカマルも参謀に席を置いてから、何度となく日向宗主に会ったいつも厳めしい顔をしている彼が、娘に不気味と評されるくらいどう変わったのか興味をそそられる。

「ヒナタさ、癪なんじゃねーのか？」

「え？」

「うん、だからさ、親父さんが変わったのは嬉しいんだけど、すんなり受け入れるのはなんか引つかかる。そんな感じじゃねーのかなって」

「・・・そうだね・・・父上が優しいのは嬉しいの。嬉しいんだけど、素直になれない。ぎこちない態度をとってしまったって、父上が哀しそうな顔をされると、悪いなあって思うんだけど・・・」

ナルトの言葉を反芻する。ずっと父に会うたびに感じていた胸のもやもやを、言い当てられた気がした。

「意地を張ったって仕方がないって、わかってる。だけど・・・だけど、そんなにすぐ飲み込めないよ。昨日、今日、諦めたわけじゃないもの。ずっとほしくて、でも駄目で、それじゃあ仕方ないやっつて言い聞かせて諦めたのに・・・父上も日向も、何事もなかったような顔して・・・それですんなり受け入れていたら・・・」

ヒナタは手にしていた鞘を、庭に投げる。

「あの頃泣いてた私は、どこにいけばいいの？」

きつ、と正面を見据える彼女の心は、何年もずっと傷ついたままだ。自分を傷つける刃を振り下ろしていた者たちと和解するには、まだ時間が浅い。震えて泣く幼い自分を抱きしめていたのに、いま放り出すことなどできない。

それではあまりに都合が良いではないか。

「意地を張ったって、仕方ないんだけどね」

「いいんじゃないの。意地なんて、張るためにあるようなもんだ。なんならさ、一度ぶん殴ってみるよ？そうすりゃ、案外すっきりしてどうでもよくなるかもな」

「ああ、それいいってばよ！さすがだなあ、シカマルは」

「む、無理だよ・・・！」

「なんで？腕つぶしの問題で歯が立たねえってんなら、めんどくせーが、俺が影真似で押さえつけといてやるよ」

ナルトやキバはともかく、サスケやシノ、リーにまでやれやれと囃し立てられヒナタは返答に困った。ヒアシを殴る、そんなこと考えたこともなかった。だが確かに、すつきりしそつだ。

「考えとくね」

「おう」

楽しそうに笑ったヒナタに、シカマルもにやりと応えた。

ヒナタは変わり始めていた。角も壁も取り去られて、本当の彼女の姿が見え始めた。悪くない。この場にいる誰もが、そう思った。

「ナルト、いつまでここにいるんだ？」

この男の白眼にはいつからヒナタの、仮面の下の素顔が見えていたんだろう。シカマルはふと、思う。

「ネジ、なんだってば」

「お前が豆を持っていったまま、いつまで経っても帰ってこないと、春野が怒っているぞ」

「うわっ、やべってば！サクラちゃん、怒るとむちゃくちゃ怖いんだよな」

ナルトは叫ぶと、慌てて家の中に駆け込む。だが身ひとつで行ってしまったので、大量の空豆は残されたままだ。仕方がないな、そう呟きネジが籠に手をやり止める。流れる微妙な空気に、気付いたのだ。

「ヒナタ？」

嫌なものではないのだが、何とも言えない雰囲気。このメンバーでは大丈夫だと思っていたが、まだ周りの変化に対応しきれないヒナタが面倒事に巻き込まれてやしないかと、ネジは窺う。そんな彼の心遣いを感じ取って、ヒナタは安心させるようにゆっくりと微笑んだ。

「あのね、ネジ兄さん。明日、出かけてもいい？」

わけもわからず、だが頷いたネジの視線の先で、キバとシノが笑った。

あんなに大量にあった料理が、あつと言う間に姿を消す。制作に奔走した者たちとしてはもう少し味わってほしいと思うのだが、残されるよりは遙かにいい。

「ネジはともかく、あなたがそんなに料理がうまかったなんて驚きだわ」

「ほんと、ラーメンしか食べてないと思ってた」

テンテンの意見にいのも賛同する。少年の頃の彼の思い出といえば、ラーメンと火影になる！、くらいだ。

「下忍になったときにさ、カカシ先生に栄養管理もりっぱな忍の証だぞって言われたんだってば」

「あいつが料理つーのも、想像がつかねえ・・・」

キバが覆面忍者を思い出す。

「ま、今思えばそうなんだけどさ。あの頃は確かにそうだ、って思ったんだよな。ほらオレってばさ、火影になる男だから、栄養管理もばっちりやんなきゃなってさ」

久しぶりに聞いたナルトの口癖に、シカマルは笑う。彼らといえるのは居心地がいい。いつも腹のさぐり合いばかりで、気も抜けない世界に身を置くシカマルは特にそう思う。

この居心地の良さを、失いたくはない。

「ナルト、サスケ、ネジ、シノ、結界を張ってくれ」

何故、と問うこともなく名を呼ばれた四人は印を結んだ。四人の上忍の、強力な結界にうちは邸が包まれる。

「サクラ、いの、幻術を」

「了解」

二人のくノ一は短い返事後、術を仕込むための札を取り出す。

「・・・さて、本題に入ろうか」

全ての作業が終わったことを見届けたシカマルは、徐に口を開いた。

「薄々気付いているだろうが、いま火の国はやべー状況に置かれている。・・・多分、近いうちに内乱が起こる」

「感づいていた者と、そうでない者とで反応が別れた。前者でも、推測通りのことを告げられただけのサクラやネジ、シノと、ただ感づいていただけの者とは反応は違う。」

「やっぱりね」

「大名や領主、軍部に妙な動きがある。それに他国も拘わっているみてーだな」

「音と雲でしょ？」

「それと、霧だ」

「水の国も？」

「ああ、だがこつちは国や隠れ里自体が関与しているというより、一部の反乱分子が首を突っ込んでるつー感じだ」

「ふ〜ん、それでか。私も霧は怪しいと思っただけど、音や雲ほど頻繁じゃないし統率もないし考えすぎかなと思っただのよね」

「まあな。確かに動きは鈍い、だが関係あるのは間違いない」

「ま、待ってってくれればよ！一体、何の話なんだ？」

「全く気付いていなかったナルトには、シカマルとサクラの話についていけない。」

「・・・でたわね、激鈍三人衆」

「なんのことですか？」

「あんたとナルトとヒナタさんのことよ。ほんつと鈍くて、いつもなーんにも気付いていないでしょ？ま、そこがかわいいんだけど」

「三人とも他人の負の感情に対しては敏感過ぎるくらいなのだが、こと里の状況だの他国の情報だのといった大きな対象のことには鈍

くなる。他人同士の会話や噂話しに、興味も縁もないのだった。

「つまりな、火の国の乗っ取りが計画されてるんだ。大名、若しくは將軍だな、こいつらの誰かが火の国主の座を狙っているんだ」

火の国にも他国にも軍が存在し、兵士やそれを統率する將軍たちがいる。情報収集活動や暗殺などは忍が行っても、戦争となれば主体となって動くのは軍だ。他国同士が微妙な関係で友好状態を保つ現在ではまだ、軍の需要は大きく軍部の力も国政に於いての発言力も強い。

「どうしてそんなことがわかるの？」

「手に入れた情報と、あとは分析ね。権力を握ってる人たちの交流、というか交流の仕方でわかるのよ。腹黒いものを持つてる人たちってのは、自分たちは怪しまれずに動いているつもりでも、変なところがいっぱいあるものなのよ」

「目的も数がしれてる。金か権力が・・・稀に名譽だな」

サクラとシノの説明にリーは感嘆の息を洩らした。だが、すごいすごいと連発されてもあまり嬉しくない。なぜならこの場にいる彼ら三人以外の人間は、程度の差こそあれ皆気付いていたのだから。ここで褒められるままに悦に入っただとしても、虚しいだけだった。

「それで今回は火の国の乗っ取りなんですね！」

「そうだ。奴らの目的が何なのか掴み難かったんだけどな、黒の森の報告で掴めた」

「黒の森？」

「ヒナタ、侵入者が多いって言っただろ？確かにあそこは前から侵入者が絶えないとこだったかな、それでも月に一、二度だ。んな頻繁にあるもんじゃねえ」

「・・・私が未熟だったから、多くなってたんじゃないのかな・・・」

「いや、違う。前の奴が死んだって言っただろ。あれも侵入者にやられたんだ。思えば、あの頃から多くなってたんだらうな」

「でもシカマル、あんたさつき水の国自体は関与してないって言

「つたわよね？黒の森を抜けたほうが火の国には入って来やすいけど、水の国が関係ないんだったら変じゃない。音や雲がわざわざ水の国に侵入して、そんでまた黒の森でしょ？それって余計な手間だわ」

「そうでもねーんだな。確かに音にしろ雲にしろ、自分ちから直で入ってくるほうが楽だ。黒の森なんて案内人がいなきゃ自殺行為だからな。だが、奴らはどうしても黒の森から入ってくる必要があるんだ」

「・・・どういうこと？」

「黒の森を抜けたら、何がある？」

シカマルのこの一言で、サクラの脳は一気に覚醒する。

「公累市！・・・そうか、奴らの目的はサンキ様の確保だわ！」

「ご名答」

シカマルとサクラの問答で、ネジは疑問に覆われていた全ての箇所が見えてきたのを感じた。自分の読みもまずまずだと思っていたが、この2人の読みの深さには感服する。

「なあなあ、サンキ様って誰だつてばよ？」

「・・・あんだ、ほんつと馬鹿だわ。いい、サンキ様ってのは現

国主の孫娘よ」

「しかも曰くつきの・・・」

いのが合いの手を入れる。彼女にも段々と見えてきた。

「サンキ様のお母上が国妃の娘なの。で、お父上が国主の息子・・・」

「つまりね、お二人揃って浮気をなさったのよ。なので国妃がどこかの方と遊ばれて出来たのが娘で、国主がどちらかでお作りになったのが息子なの」

「まあそれが原因なのかどうかわからないけど、国主夫妻の仲は長年冷えてて、それを改善するために仕組まれた結婚だったのよ。結果生まれた一粒種のサンキ様は、あらゆる意味で重要な方なの」

「そう、今では父親も母親も死んでしまっただけからね。国主夫

妻の仲をこのまま維持させるための糊つゝか、鍵だな。しかも、2人に溺愛されてるし」

「ふ、複雑なんだなあ。大人の世界ってわけわかんねーてばよ。嫌ならさっさと別れて、好きな奴と一緒にになりゃいいじゃねーか」

「あんだ、ほんつとに馬鹿だわ。それができれば誰も苦労しないのよ。地位のある人や権力を望む人つてのは、そう簡単思考じゃないのよ」

「そうだよ。私たちが日向に仕組まれた結婚だったものね。政略結婚って言うのかしら？」

相変わらずのナルトの言動で深刻な話題にも笑いが生まれていたが、ヒナタの一言で一瞬にして凍り付く。こちらも相変わらずの呆け振りだった。

「・・・きっかけはともかく、俺は日向に感謝しているぞ」

「うん、私もだよ。だってこんなことでもなきや、ネジ兄さんと結婚するなんて絶対に思えないもの」

そう言っ隣に座るネジに柔らかく笑う。ずっとネジが好きだったが自分も彼も、相手に対して行動が起こせたとはいえない。

年を重ねて経験を重ねて、見えてきたこともある。あんなに嫌った日向も、苦手だと思っていたかつての仲間たちも、そんなに悪いものではないと気付いた。

「ちよつと、2人の世界は別のとこでやってよ。ったく、何年経ってもそんなに甘くいられるものなの？」

この春には面倒くさがりの幼なじみと結婚するのが茶化す。彼女は甘い生活など期待するのは、端から諦めている。どう考えても自分とシカマルで、それは無理だ。結婚自体、お互いの母親同士が井戸端会議で意気投合し、当人を無視して勝手に日取りから何から全部決めてしまったのだ。

だがそれについていいのは、密かに感謝している。あのシカマルが自分で動くとは考えにくい。かといって彼が満更でもないのは知っているから、彼女は安心して春を待っていられるのだ。

「まあそういうことで、サンキ様を奪われると火の国の動きは鈍らざるを得ない。人一人でいきなり国が転覆することはねーだろうが、それでも腕の一本や二本、もぎ取られるだろうな」

「ちよつと、今サンキ様ってどうなってるの？公累市なんて、襲われても里からだど1日はかかるわよ」

「それは大丈夫だ。適当な理由つけて、カカシにアスマ、ガイに行ってもらってる。火種が完全に消えるまで張り付いているだろ」

「それなら安心ですね」

「問題は、里だ。いま木の葉隠れの里は疲弊していると思われている。つて、まあ凶星なんだが。だが、火の国に火種が生まれたら真っ先に動くのは木の葉だ。疲れていようが傷ついていようが関係ねえ。それはどこの里も同じだ。だからせつかく作った火種を猛火にするために、奴らは絶対に木の葉を潰しにくる」

予測はしていたが、改めて告げられるとその内容の重さに息を呑む。誰が言ってもまさかと言いたくなるが、シカマルの言葉だからこそ疑いようなない真実だと理解する。彼は不用意な事は決して言わない。憶測や推測の段階なら決して口にしないのだ。そのシカマルが言ったということは、紛れもない、これが真実だ。

静まりかえったうちは邸の大広間で、シカマルが茶を啜る音だけが響く。

「俺の読みでは来月、木の葉で行われる中忍試験、あれが狙われているな。他国の大名も忍も大手を振って入ってくる。音も、雲も、霧もだ」

「取りやめられないのか？」

シノの提案に皆頷く。

「無理だ。前回の木の葉崩し以降、7年目にして漸く木の葉に任された試験だ。中止の意見もあるが、反対に襲撃を打破して木の葉の復活を見せてやれという意見もある。・・・これには一理あると、俺も思う。いつまでも蹲ってるままじゃ仕方ねーだろ？」

「オレもシカマルに賛成！オレだって、あの頃のままじゃねって

とこ見せてやるつてばよ！」

「うるせーナルト。成長してんのはお前だけじゃねー、なあ、赤丸」

「そうですよ。僕だって同じです！」

「落ち着け。闇雲に向かっていっても余計な犠牲が増えるだけだ」

「ああ、ネジの言うとおりだ。前回の二の舞はしたくねーからな。被害を最小限に食い止めたにしても、火影をやられちゃ意味がない。今回は情報を掴んでる以上奇襲じゃねーんだからな、火影だけは何としても守る」

「どうするの？」

「代理を立てる。ありきたりだが、一番効果的だ。ただ、代役は囷にもなる。守りは固めるが、何が起こるかわからねー。相手は、大蛇丸だろう・・・今回の件もあいつが首謀者のような気がするんだよな。火の国の奴らは、踊らされてるだけじゃねーのかつてな」

三代目火影がその命と引き替えに、両の腕しか奪えなかった相手だ。無くした腕を取り戻してから、あの手この手で木の葉に被害を及ぼしている。いい加減決着をつけたいと思っているのは五代目や自来也だけではなかったが、未だに望みは達成されていない。

「本人が来るかしら？」

「来ねーだろうなあ。木の葉だって馬鹿じゃない。あいつに対しては警戒を怠っていないからな。それに当日、火影には引っ込んでもらっ予定だが、自来也にも側にいてもらおうと思っている。あの2人を同時に相手にはしたくねーだろ」

「まあ、そうね。火影さまがすんなり了承してくれるとは思えないけど、それが一番いいわ。シズネさんと相談して、なんとか聞き入れてもらっわ」

「ああ、頼む」

「・・・で、代役は誰なんだ？」

ネジが核心に触れる。今日集められたメンバーはシカマルが一番信頼している者たちだ。力の度合いも十分把握しているし、何より

裏切られる不安が全くない。事を起こすにしても重要箇所には彼らを配置したいのだろう。ということは代役もこの中から選ばれる、ネジの心中に不安が広がる。

「ヒナタ、頼む」

「断る！」

「・・・即答するなよ。つーかヒナタの意見も聞いてやれ」

「そうよ、ネジ」

「代役が必要なら俺がやる」

断固ヒナタの代役案を拒むネジに、シカマルが頭を掻く。

「ヒナタには悪いと思ってる。黒の森の任務も延びた上に、やっと帰って来られたと思っただらこれだ。今回の計画では、どー考えても代役が一番危険だ。・・・だが適任は誰かと言えば、どー考えてもお前しかいねえ」

「どうして？」

逡巡するようにシカマルが黙り込む。

「これは、俺の推測だ。証拠もねーし、確定じゃない・・・だが、かなり真実に近いんじゃないかとは思う・・・」

珍しく言い淀むシカマルの姿に、皆固唾を呑んだ。

「・・・木の葉に、裏切り者がいる」

「まさか・・・！」

リーが叫ぶ。

「信じたくねーが、どう考えてもそうとしか思えねー。嫌なこと思い出させて悪いが、ヒナタ、一年前の事件、覚えてるだろう？」

「あの巻物の・・・？」

「そうだ・・・化け物を納めた巻物がある、そういう言い伝えで巻物の存在を知っていたが、所在については誰も知らなかった。大体言い伝え自体、火影補佐のコハルばーさんがそのまたばーさんに聞いたような気がする、つー程度なんだからな。かなり眉唾ものだったんだ」

暗部第7班の捜索に加わらなかったくノ一たちも、事件の概要は

知らされていた。

「それがな、三代目遺留品がひよっこり出てきて、その中の紙切れにそれらしき記載があつて、そこから俺が大体の場所を特定したんだ。それを火影に報告して、お前たちに任務が下つた。その間、僅か三日だ。つまり俺の頭ん中で大凡の位置が現れて火影に言つて、暗部に任務が伝えられるまで三日しか経つてねーんだ。なのに、音も雲も霧も、他国・・・つーか、今更隠してもしかたないから言うが、土の国に入り込んでお前たちとやりあつた。・・・内通者がいるとしか思えねーだろ？」

「まさか・・・参謀に・・・」

サクラの脳裏に、参謀やその補佐役たちの顔が駆け巡る。

「そうだろな。情報を握つてた人間なんて限られてる。火影に火影補佐、参謀全員にその補佐役・・・どいつが怪しいと思う？」

「そんなこと、わかんないわよ！怪しいなんて考えたら、全員怪しいと思うもの・・・」

「物的証拠はねーし、どいつかもわかんねー。だが、確かにいると思う。前回の木の葉崩しでは、木の葉の忍は一丸となつて対処した・・・だが、今回は無理だろう。火影役には守りをつけるが、その守り役自身が裏切り者かもしれねーんだ」

「疑心暗鬼ね・・・」

「ああ、いのの言うとおりだ。隣に座る奴が敵か味方か、ずっと疑つてなきゃいけねー。それだけでも疲れるが、実際にクナイを持つて向かつて来る奴が知り合ひだった場合、お前らに立ち向かう根性があるのかどうか・・・」

「・・・自信ないわね・・・いざとなればもちろん戦う。けれど、すぐさま頭を切り換えるのは無理だと思つわ」

サクラが呟いた。

「ヒナタは、できるだろ？」

「うん。敵の名前を知っているか、知らないか、それだけだもの」
「火影代役の適任者がヒナタなのは、こういう理由だからだ。相

手が誰であろうとも、敵だと判断すればすぐに戦える。それにな、純粹に実力だけで言えば、そりゃあナルトやサスケ、ネジらには敵わねーだろう。だが場数は、この場にいる誰よりもお前が多い。戦いになれば、実力より経験の方がものをいう。ヒナタ、お前が生き残る確率が一番高いんだ」

ナルトもサスケも、ネジもキバもシノも、暗部は経験した。だが補充として一度や二度、任務に就いただけで誰もヒナタのように、暗部の通常メンバーとして在籍したわけではない。シカマルに異を唱えるものはいなかった。

「それに、お前らにはやってもらいたいことが別にある」
シカマルは全員を見渡した。

「まず、ネジ、お前にはキバと一緒に試験会場で怪しい奴を捜してほしい。霧はともかく音忍と雲忍は自分たちが見張られていることくらい見当ついているだろうから、術をつかつてはるはずだ。お前の目とキバの鼻でそういう奴らを挙げていってほしいんだ。んで、シノはいつでも攻撃が仕掛けられるよう虫を仕込んでいってくれ。ナルト、サスケ、チョージ、リーには里の警戒。できるだけ里外で侵入を食い止め、里に入れるのは試験を受ける下忍と担当教官くらいで留めたい。つまり許可証を持ってない奴は全部、倒していい。とにかく里に入られる前に食い止めたいたからな、ここが一番重要だ」
名を呼ばれた者は神妙な顔で頷いた。ネジも自分の役割を聞けば、嫌だとは言えない。彼の白眼は巧妙に仕込まれ隠された武器も全て見逃さない。

「俺とサクラは当日、試合を動かすために本部から出られねー。いのは会場内の、テンテンはナルトたちとの連絡係をしてくれ」
皆口々に、あるいは暗黙に了承した。

「・・・ヒナタさん、やっぱり変わったわね」

サクラがヒナタを見て、しみじみと言った。

「そうかな・・・？」

「そうよ」。だって私の中のヒナタさんは、教室で本を読んだり

花を生けてた記憶だけだもの。くノークラスでケンカがあっても、どちらかと言えば仲裁役だったでしょ？」

「そうよね。ケンカの当事者はいつつも、いの、あんだだったわ」「うるっさいわね。そういうあんたはいつつも虐められてて、ベソかいてたわよね？デコリンちゃん」

「懐かしいこと言ってくれるじゃない？いのぶたさん」
見えない火花がバチバチと散る。2人に挟まれたサスケは非常に居たたまれないのだが、口を出しても余計に面倒なので無言で耐えた。

「やめなさいよ。・・・それにしてもあんなたちの代って、元気よね。私たちはケンカも少なかったし、交流もないのよね」

「そうです。羨ましいですよ。僕だって、同じ教室で学んだ仲間でも付き合いがあるのはネジだけですから」

「他の連中で忍になれた者は少なかっただろう？確か、同時期に卒業して下忍試験に合格したのは俺たちの班だけだ」

「そうだったわ。それで不合格になってアカデミーに帰されたのにショックうけて、忍と違う道を選んだ子が沢山出たって、先生が言ってたわよね」

「ええ、お前達の代は異様に打たれ弱いつて、アカデミーの先生に言われましたよ」

「よかつたな、ナルト。お前は絶対に打たれ弱いとだけは、言われねえぜ」

「おう！俺つてば、絶対に諦めねーもんね！」

茶化したサスケだが、彼もナルトの諦めの悪さ、いや粘り強さは幾度も助けられた。復讐という因縁に囚われ、兄との圧倒的な力の差を見せつけられ、自暴自棄になったことは何度もあった。自分がいま光の中にいられるのは、ナルトの影響力が大きいと自覚している。今手にしている力も、諦めそうになる度思い出して自分を奮い立たせた、この明るい少年の姿がなければ無理だったのではないかと思う。

「俺はお前らを信じているし、頼りにしてる。んで、今日みたいな暢気な場をまた持ちてーし、よぼよぼのじーさんになって畳の上で死にてーんだ。だから・・・木の葉を守るーぜ」

「おう！」

「はい！」

にやりと笑ったシカマルに、あちらこちらで賛同の声が上がった

後かたづけは男たちで、サクラのその提案にいのもテンテンも乗った。用意もしていないからとヒナタは手伝おうとしたのだが、ネジに止められサクラたちと共に居間で落ち着く。ネジは、何気なく使われていたうちは邸の食器類が高価なものばかりだと気付いていた。ヒナタの中には丁寧さと、生来からの呆け振りが同居していた。彼女がもし手を滑らせて皿の一枚でも割ればと、考えるだけで恐ろしい。サスケは気になどしないだろうが、こちらも生来からの落ち込み易さでヒナタが地中深く潜ってしまうのが目に見えるようだった。うちは邸は台所まで広い。男8人が入っても、狭さは感じられなかった。手分けして作業を進めていく。ただ食器の置き場所については、取り出した記憶を頼りにネジが行った。うちは邸の主人があまりにも頼りなかったからだ。

「よう・・・悪りーな」

声をかけられて振り向くと、シカマルが神妙な顔つきで立っていた。

「本当はさ、俺が代役やればよかったんだけどな。いざとなりや影真似で敵の動きを封じられるし・・・」

「それは無理だな。向こうだって馬鹿じゃない。お前の得意術くらいは見当がついているだろうし、対処法だって考えているだろう。俺たちならともかく、お前は有名になってしまったからな」

「なんだそれ・・・んな面割れの忍がいていいのか」

「嫌ならカカシの真似でもしろ。まあ参謀に名を連ねるのなら、

仕方のないことだろう」

中忍の頃より、自分の術を増やして選択肢を広げるより、仲間の術を把握して作戦を練るほうを得意としていた。参謀となつたいまでは忍として任務に就くより、里の舵を取るために忍を動かし情報を集め他の隠れ里と駆け引きを行うほうが圧倒的に多くなつた。日々の業務に忙殺され、修練をすることさえままならない。シカマルはこの場にいる誰よりも、自分の持つ術の数が少ないことを自覚している。

「それにもう決まつたことだ。あの人も了承したのだし、お前が気にすることはない」

「・・・そうか。ヒナタは、本当に強くなつたな」

「昔から強かつたさ。ただ手を出すことも、足を動かすことも何一つあの人の意志では行えなかつただけだ」

「日向か？」

「それも、ある。ヒナタは、周囲の期待に応えようとしていた。それはもう必死に。だが周りがひとつのことだけを望んでいればよかつたのだが、皆が銘々に自分勝手なことをヒナタに押しつけていたんだ」

「強くなれ、の以外にも何かあつたのか」

「もちろん一番は強く、だろう。日向宗家宗主嫡子として誰よりも白眼をつかいこなせ、いずれ日向を背負つて立つ者として誰よりも強くあれ。精神的にも、それに統率力も必要。そして、女としては優しく、姉としてしっかりと、それでいて控えめに。あの人は亡くした母親の代わりもしなければならなかつた」

「・・・なんか、めんどくせーな」

「本当にな。なぜヒナタに、あそこまで勝手な期待を押しつけていたのだろう。アカデミーに入つてからは当然日向の子として、体術でも忍術でも勉強でも一番を望まれた。日向だけでなく、教師にもな」

「ああ、たしかにそんな感じだつたな・・・教師にはお前の記憶

も強かつただろうし」

「期待に応えなければならぬ。強くなければならぬ。優しくなければならぬ。人の輪を乱してはいけない。．．．それにまた生真面目にこなそうとするから無理が生じる。どう考えても、周りの期待がばらばらで八方塞がりにはかならないのにな」

「．．．どこで吹っ切ったんだろう．．．？」

「暗部じゃないのか？．．．暗部の仲間はヒナタが否定していたあの人の全てを受け入れてくれたんだろう。だから仲間の全てを失ったとき、ヒナタはあそこまで衝撃を受けたんだと思う．．．ちょっと、悔しいが」

「．．．いまは、お前が全てなんだろう」

「だといいがな．．．」

ネジはシカマルから受け取った大皿を箱に入れ、棚に戻す。

「人は、独りでは生きられない」

縁側でシノが言った言葉と同じものを、ネジが呟いた。

「ヒナタの本質は、周りが望んでいたものと大なり小なりズレがあった。だがあの人は自分をさらけ出すことはできなかった。実の両親にでさえ、そのままの自分を受け入れられなかったのだから、他人では無理だと思っていたんだろう．．．」

「無理をしていることくらい、キバやシノもわかっていただろう」

「そうだろうな。俺も、知っていた。だが誰も彼も、彼女に伝えることをしなかった。そんなもの必要ないと、ただ一言口にすれば済む話なのに。ヒナタは、自分の全てを受け入れてくれる存在があれば、たとえそれが一人であつてもそういう存在が側にあれば、いくらでも強くなれたんだ．．．」

「いまはお前がいるだろう？それに俺たちももう、ヒナタに自分勝手な理想を押し付けたりしないさ」

「そうだな．．．」

ネジが小さく頷き振り返ると、シカマルの背後にいつの間にか残りの面々が集まっていた。皆、穏やかな笑みを浮かべ頷いた。

幼い頃に傷つけられた彼女の心は壊れやすい。切り捨ててよい相手にはいくらでも無情になれるのに、少しでも心を通わせたい相手には途端に臆病になる。彼女が傷つかないように、二度と泣くことのないように、彼女を守る籠になろうと思っていた。自分一人でも、彼女を絶対に守るのだと。だが彼らは、そしていま彼女とともにいる彼女達は、ヒナタを不用意に傷つけることはもう決してない。それどころか時には自分と同じように、彼女を守る籠になってくれるのだろう。

心強い味方を得て、ネジは無意識に強張っていた肩から力を抜いた。どこかほつとしたような穏やかな空気が彼らの間を流れる。だが、そんな穏やかさを打ち破るようなくノ一たちの雄叫びが台所にまで響いた。

「・・・あいつらは、何を騒いでいるんだ・・・」

「どーせ、碌でもねえ話してんだろ・・・」

「なんつか、すっげえ、めんどくせーことが起こりそうな気がする・・・」

呆れ返ったサスケとキバに、シカマルが溜息混じりに答える。彼女たちのいる居間からここまで、それなりに離れているのにいまも彼女達の弾けた声が届いている。内容までは聞き取れないがシカマルの見解に、ナルトやチョージ、ネジは頷いた。

その耳で正確に聞き取ったシノだけが、黒いレンズの向こうから気の毒そうにネジを見ていた。

台所で男どもが穏やかな空気を垂れ流していた頃、4人のくノ一たちは居間で暢気に語らっていた。会話の内容は専ら、春に控えたいの結婚。サクラやいのはともかく、テンテンやヒナタまで混じってこんな長く話をするのは初めてだった。始め彼女たちの間に流れていた微妙な空気も、いまではどこかに飛んでいってしまっている。不安定な心を抱えた少女たちも、視野の広がった大人になれ

ただ。自分たちの苦しみも、ヒナタの苦しみもただ色が違っただけで同じものだと思付いた。

「それで、ドレスにするの？打ち掛けにするの？」

「もちろん、ドレスでしょ！」

「ということは、シカマルがタキシード着るのね・・・に、似合わない」

「あれは何着ても似合わないわよ。着物が合うとも思えないもの」

「ちよつとテンテンさん。他人の旦那にけちつけるの止めてくださる？って、まあ私も同意見だけさ。本人も、忍衣で構わないなんて言うのよ？どこの世界にあんな汚れた服で結婚式を挙げる人がいるのよって説得して、ようやく納得させたんだから」

「シカマルが説得されるとも思えないけど。あんたが脅迫したっていうのならわかるんだけどね」

「どつちでもいいのよ。ようは、みつともない格好を私の横でしなければ・・・それより、ドレスよ！ドレス！あんなにいるんな型があるとは思わなかった。もう迷っちゃって・・・」

「色は、白にするんでしょ？」

「そりゃやっぱ白でしょう。でも、どんなのにするか・・・ねえ？ミニなんてのもあるし。あ、そだ、ヒナタさん」

「はい？」

「ヒナタさん、どういったの着たの？」

「・・・え？」

聞いていなかったわけではないのだが、彼女たちのテンポの良さについていけずヒナタは話の流れを掴めていなかった。

「ドレスよ！ネジさんとの結婚式のとき、どういうドレスを着たの？それとも、やっぱ日向は着物なのかしら？」

「着物・・・と言えば着物だったけど。母上のお下がりの着物を着ていたし、ネジ兄さんは忍衣だったから・・・」

「・・・えー！・・・なにそれっ！？」

三人の大音響にヒナタは持っていた湯飲みを落としかけた。

「あゝの唐変木！ここまで無粋だとは思わなかったわっ！」

「女の子の夢をなんと思ってるのかしらっ！！！」

「ヒナタさん・・・かわいそうに・・・！」

三方から手を握られ肩を揺すられ盛大に同情されたのだが、如何せん、その姿に似合わずヒナタは結婚式というものに左程の夢は持っていないかったのだ。それにあの時はネジと結婚できる、ただそれだけで幸せだったのだから。

正直にそう言うと、また盛大に気の毒がられた。いのなどは涙まで浮かべている。

「なんって健気なのっ！・・・いいわっ！ヒナタさん、私に任せよう！！！」

・・・なにを？とは聞けない雰囲気だった。

その後三人は片寄せあつて密談を続け、その内容を黙って聞いていたヒナタは嬉しいような逃げ出したような気持ちになったのだ。

準備は着実に進んだ。サクラは根気と忍耐力でどうにか火影を納得させた。木の葉の忍に裏切り者がいる、火影は信じたくないようだったが薄々感じてもいたのだろう。彼女にしては珍しく苦悩の表情を浮かべ、シカマルの案を全て了承した。

中忍試験前日までをかけ、シカマルとサクラは情報を集めた。ネジヤキバ、サスケやシノも里内外を奔走する。内通者だと怪しまれる人物は皆、任務で外に出した。それでも全てを排除できたわけではないと、シカマルはわかってる。ぎりぎりまで、思いつく限りのことをやった。幾つもの手をうち、何十通りもの場面を想定する。だがしかし当日になってもなお、やり遂げたという確信が彼の心に浮かぶことはなかった。

「シカマル、雲忍も音忍も本選に残ってるわよ」

「何人だ？」

「雲3に音1」

「ちつ・・・できれば予選で消えて欲しかったな」

本選に里の忍が残っていないければそれを理由に、入り込む者たちを拒否することもできたろう。だが本選に残った下忍が一人でもいれば、彼らの担当教官、つまり上忍や応援と称して入ってくる忍を断ることはできない。

「ちなみに・・・木の葉は全滅よ」

サクラが呆れた様子で、予選の結果を告げる。残った者が多すぎて急遽、最終予選などというものをさせられた過去が懐かしく甦る。

「木の葉は、枯れたと思われてんだろーな」

「そうでしょうね。2年連続予選で消えてるし・・・たしか・・・ヒナタさんが合格して以後、木の葉で中忍試験に合格した下忍っていないんじゃない？」

「つーことは・・・6年、ただの一人も中忍に受かった奴がいな

いつてことか・・・そりゃ舐められて当然だな」

「・・・たしかにね・・・」

長い溜息をサクラが吐いた。

試験に早く合格すれば良いというものではない。自分たちより何歩も遅れて合格したヒナタがいまでは、サクラやいのを遙かに凌ぐ実力者となつている。だがせめて年に一人くらいは中忍が出てほしい。上忍、中忍、下忍、いまの木の葉はすべての層が薄いのだと改めて実感する。

「今回の件が終わつたら私、アカデミーの初っぱなから叩き直したいわ」

「ああ、そうしてくれ。サクラは教育者が向いている・・・俺はんなんめんどくせーこと、絶対にしたくねーけどな」

「まあね。私はナルトで馴れてるもの。体術はリーさんがみてるし、私は学術を仕込んでみるわ・・・でも、もつと根本的な体制を変えたいわね」

「そうだな。ここ数年の不振は、教育者が一人や二人変わったからつて直るもんじゃねーだろう。体制を見直す時期にきてんのかもしれねーな・・・だがまずその前に、目前の虎・・・いや、蛇か」

「ええ。まずこれをどうにかしなきゃ、アカデミーがどうのこうの言つてられないわ。里があつてこそ、だもの」

サクラが高台に設けられた本部席から会場を見下ろした。続々と招待客と、招かれざる者たちが入ってくる。

里外の様子をテンテンが報せてきた。数日前から配置したナルトたちの手によつて、すでに何人もの不審者を始末している。しかし、水も漏らさぬ守りという代物には程遠い。シノが仕込んだ虫の数が30を越えたことを、いのが告げる。

「ヒナタは？」

「火影控え室にいるわ。暗部が二人、ついている」

「二人か・・・少ないな」

「ええ。本当はシズネさんについていて欲しかったんだけど、自

来也様と一緒に火影様の側にいらつてるし・・・」

「仕方ねーだろ。俺たちが守りたいのは、ヒナタじゃなくて火影、なんだからな・・・」

「・・・そうね・・・」

ネジが聞いたら血相を変えて怒りそうだな、シカマルはそう思いながら会場内に鋭い視線を巡らす長髪の男を見た。彼も、彼の愛する人も、そして自分の仲間や賑やかな婚約者も、家族も里も守りたい。守りたいものが多すぎて、シカマルの手足は年々自由に動けなくなってきた。

何も起こらなければいい、誰も死ななければいい。

誰かが死んで誰かが泣いて、誰かが慰めて。そんなめんどくさいことは考えただけでも辟易する。ただ平穩に平和に時が過ぎればいいと、ただそれだけを望んでいるのに。なぜこんなにも風は強く吹き荒ぶのだろう。

里の平和、シカマルが望むそれと同じことを、どこかの隠れ里の誰かも望んでいるのだ。ただそこに『繁荣』の文字が入ってしまうが故に、争いが起きる。

「・・・つとに、めんどくせーよな」

空に浮かぶ雲を見て呟くシカマルに、サクラが怪訝な表情を見せる。だが彼女は口を開くその前に実行係に呼ばれ、仕方なくその場を立ち去った。

一人残されたシカマルは、周りを行き交う係員たちの喧騒に頓着することもなく、遠くにまで続く祭りの様子を見ていた。7年目にして行われる木の葉での中忍試験。ここぞとばかりに里は祭り一色と化した。里の下忍が一人も本選に出ていないというのにも拘わらず、あちらこちらで明るい笑い声が聞こえる。シカマルは設置された高台の欄干に凭れ、語り合う人々を見ていた。

笑い合う人々の中に、険しい表情の者はいないか、彼は眠そうな目でぼんやりと、見ていた。

「シノ、どうだ？」

「数が多すぎる。親父にも手伝ってもらっているが、これ以上増えれば統率がとれん」

シノの泣き言は珍しい。だが自分が挙げた不審者の数を思い出せば、何も言えなくなる。会場にいるネジも同じだけの数を挙げていたとすれば、総数は膨大なものになるのだろう。取りこぼしがないように、少しでも怪しいと思った人物は全員、シノに告げていた。彼らが会場内に留まっていればまだマシだが、祭りの様子に釣られ里中に散らばったのだとしたら、涼しげに見えるシノの労力は想像に難くない。

「悪いいが、まだ増えるかもしれねー。安全だと確信が持てねえ奴は放つて置けねーからな。・・・ヒナタを危険に曝したくねーんだ」

「わかつている。俺も、後悔はしたくない。見くびるな、油女一族の底力を見せてやるさ」

先程吐いた弱音はどこへ行ったのか、不敵に笑うシノにキバモにやりと応える。

スリーマンセル時代、彼らはいつも自分たちの間にヒナタを挟んだ。そうしないと小さな少女をどこかに置いてきてしまうからだ。風のように駆け抜ける少年たちに付いてもいけず、小さな体で必死に駆けてきた。漸く追いついて息を切らしながらも、待っていてくれた少年たちを見るといつも安心したような笑みを浮かべた。

弱々しくて頼りなくて、大きな瞳を不安に揺らしていた。いまやつと、三人で肩を並べて走れるようになったのだ。この先もずっと歩いていきたいと、キバモシノも望んだ。

ネジは会場内を隈無く見渡す。どうやら大名の中に紛れ込んだ者はいないようだ。だが会場内に怪しい者はまだ何人もいる。忍なのだから、誰も皆武器を持っている。怪しい者と怪しくない者、その選別には洞察眼を要した。

会場に散らばる日向の面々、その中にヒアシとハナビの姿もあった。一人や二人ならともかく、十数人の分家を動かそうとすれば彼らに話が届かないはずはない。分家を動かせば宗家に伝わり、宗家に伝われば理由を聞かれることは計算内だった。だがまさか宗主と次期宗主が動くとは、ネジにも考えられなかった。彼らは里や火影の安全よりも、ヒナタが計画に加わっているのかどうかを執拗に確かめた。さすがに火影の代役です、などと話すわけにはいかないがネジが僅かに見せた動揺が彼らを動かせたようだ。宗家を守る分家の一人として己の不手際をネジは悔やんだが、正直、彼らが加わってくれることは心強かった。

9割方埋まった会場をもう一度見渡し、すり鉢状に設置された試合場を見下ろす。試験進行役の上忍が出てきたところだった。彼の前に並んだ下忍、6人。雲忍3人、音忍1人、砂忍1人、霧忍1人。会場が静まり火影と、霧隠れから招待された水影が姿を現した。

試合が、始まる。

ヒナタは試合会場を見下ろした。そこでは雲忍と砂忍が戦っている。現砂影は、かつて共に試験を受けた我愛羅だ。身に納めていたという化け物をナルトに排除されても彼の強さは変わらず、若くして風影の座に就いた。就任の挨拶で一度、彼は木の葉に来た。研ぎ澄まされた刃のような雰囲気は僅かに緩ませ、どこか余裕さえ感じさせるその姿に、同い年であるということをおぼろげに疑った。

シカマルやサクラ、そしてシノやサスケもまた、同い年だとは思えぬほどの落ち着きを持っている。1歳しか変わらないネジの冷静さには、幼い頃から一度も敵わない。キバやナルトでさえ、危機に面しては冷静沈着に判断を下す。

それなのに、ヒナタは己を省みた。

かつてほどではないとは言え、今でもやはり、不安に駆られることがある。無表情の仮面を被り必死に覆い隠さなければ、この瞳は

また無様に彷徨うのだろう。

こそりと、隣を窺い見た。穏やかな笑みを浮かべて会場を見下ろす水影は、ヒナタと数歳しか違わない。血継限界を持っているわけでもない彼だが、圧倒的な強さと冷静さ、そして統率力で人望を集め水影の座についたという。

里で穏やかに亡くなる者より、戦場で息絶える者のほうが多い忍の世界では代替わりはどこでも早い。だからこそ幼くして自立を迫られ、若くして冷静さを身につけるのだ。父や母はヒナタの愚鈍さと甘さを、どれほど苦々しく感じていたのだろうか。愛してくれぬ彼らを憎んでいなかったと言え、嘘になる。だが彼らの心情も、今のヒナタにはわかるような気がした。ただ彼女の心が受け入れるまでには、もう少し時が必要なのだ。

砂忍が苦戦しながらも雲忍を倒し、1戦目が終わる。

「シカマル、とりあえずめばしい不審者にはシノが蟲を仕込んだわ。でも数が多すぎて、もし一齐に動かれたらチャクラが分散されてシノだけでは対処できないみたい」

シカマルの背後に立つ係員が、いのの言葉を伝える。

「数が多いのは計算の内だ。始めの一瞬、足止めができりゃいい。ネジもキバも、1秒でもあれば動ける。それに・・・何だかよくわからねーが、日向がうようよいみるみてーだしな」

暗部の多くは火影の側に配置せざるを得なかった。元々数が少ないうえに、現在の部隊ではその実力が頼りになるとは言い切れない。質を量で対処するため、5代目の周りに暗部を集結しなければならなかった。

代わりに、代役であるヒナタの周りが手薄になる。火影及び水影のいる壇上への出入りは厳重に行っているが、忍なら会場席からひとつ飛びで乗り込める位置だ。ネジの話で日向のお家騒動が、おかしな方向へ動いていることは感じていた。ネジが信用する数人の分家をつかうことも、またそれで宗家へ話が流れることもシカマル

にはわかっていたが、彼にもこれほどの人数の日向が動くことまでは予想外だった。

シカマルの不安材料は手駒の少なさだ。だがそれも嬉しい誤算で解消されようとしていた。

「・・・ところで、いの。お前、体はどうしてんだ？」

「あ、大丈夫よ。ほら、あそこで座ってる」

無骨な男の指で示された先に、長い金髪を垂らして俯くいのの姿があった。

「お前な・・・よくこの状況で、んな術がつかえるよな。何かあったら、どーするんだ」

「あら、心配してくれるの？」

「・・・まあな」

シカマルの言葉に、いのの頬が染まる。この男は普段無愛想なくせに、他の者なら照れくさくて言えないようなことを、すんなり口に出してくれる事があるのだ。

「どーでもいいがな、その格好でそういう反応は止めてくれ。・・・

・おかしな噂が立ちそうだ」

「仕方ないでしょ？一番ぼんやりしてたのが、この男なんだから腰に手をあてて、ぷんつと怒った表情を見せても、してるのがシカマルよりも一回りがたいのいい男だからかわいくも何ともない。思わず冷めた目で見てしまうシカマルの視線に気付きたいのは、ひらひらと手を振りつつ高台を降りていった。

ヒナタの眼下では第一試合が終わり、第二試合が始まっていた。

最終試験に木の葉の下忍は残っていない。今年のアカデミー卒業生についてネジが話してくれたが確かに今、里の質は落ちているのだろう。それを5代目火影のせいや、アカデミー教師のせいにする者もいるが、本当にそうだろうかと思う。

人は、家庭が育てる。

体制やアカデミーがどうであったとしても、結局はその親が、保

護者が主体なのだ。アカデミーがどれほど素晴らしい教育をしようとも、家庭に帰って保護者が教師の悪口を言い、アカデミーのやり方を馬鹿にすればかならずその子もアカデミーでの指導を素直には受け入れない。他からの働きかけを素直に受け入れない者が成長するはずがない。

三代目火影やアカデミー教師であったイルカがどれほど指導しようとも、ナルトを差別し続けた子らがいたように、家庭の教育が第一なのだろう。

里最大の危機であった九尾の襲撃後、里の歴史上、一番穏やかな時代であった三代目火影の時代を過ごした子ら。ヒナタたちのように九尾の記憶が鮮明な頃に生まれた者たちではなく、その数年後に生まれた子らがいまアカデミーを卒業しようとしているのだ。穏やかな時代に幼少期を過ごすというのは幸せなことだ。だが、穏やかな時代が甘い考えを生み、これくらいならと親が与える余計な蜜が子供の毒になっていく。

しかし世の中は流転する。いまの時代に危機感を覚えるものは多い。これからの時代を過ごす子らは少しだけ多く、親から試練を与えられるのだろう。そしてまた、里の新たな力となるはずだ。

甘えた時代に危機感を覚え、厳しい時代を生み出し、それでは可哀想だろうとまた甘えた時代を作り出す。いつの時代に己が生まれるかは運命なのだろうが、自分の生まれた時代が悪い、不公平だと嘆いたところでどうにもならない。人知の超えたことは仕方ないと諦め、さっさと受け入れた方が楽というものだ。受け入れた上でなければ先にも進めない。

ヒナタは自分の生まれた家を嫌った。自分を受け入れてくれない周囲を恨んだ。自分の周りで楽しむ子らを妬んだ。だが自分自身が誰よりも先に、まず自分を受け入れなければ誰も他人など受け入れてくれるものではないのだ。悩み苦しんで漸く自分を、与えられた世界を受け入れて、どうにか他人に受け入れられたと感じた。ネジに愛されていると、心の底から信じられた。

会場から湧き上がる歓声で試合に決着が着いたことを知る。隣で水影がにこやかに拍手を送る。

ふと、自分たちの子のことを考えた。ネジとの子を。ネジと二人で子を育てる。それは、ごく自然なことのように思えた。

第3戦目、雲忍と霧忍の試験が漸く始まろうとしていた。2戦目で傷ついた雲忍が担架に乗せられ運ばれて行くが、擦れ違った雲忍は振り向きもしない。その様子を見、シカマルは僅かに目を細めた。事が起きるのなら、第2戦目だと思っていた。裏で手を組む音と雲が共に戦う第2戦が、絶好の機会だと考えたのだ。だが、何も起こらなかった。下忍には報されていないのかと疑ったが、どうやらそうでもないようだ。傷つき倒れた同胞に、一瞥もしない。忍なら仲間の死を平静にやり過ごすことも珍しくないが、それも経験を重ねた者ができること。年端もいかない、しかも下忍にできることではない。

3戦目に臨む雲忍の、固い横顔をシカマルは観察した。15、6だろう。幼さを残すその顔は、緊張で引き攣ったようにも見える。10を漸く過ぎた頃にしか見えない霧忍を前にして、そこまで緊張する必要があるだろうか。

シカマルは、サクラ、いの、テンテンに厳戒態勢を執らせた。

3戦目は緩やかに進んでいた。先程の音忍の強さを忘れ去ることのできない観客には、殊更物足りなさを感じるのか、所々から野次が飛んでいた。

水影は里の下忍が野次られても、穏やかに笑っていた。ヒナタの目には、僅かに霧忍が押しているように映る。だが実力の差というより、雲忍が固くなりすぎているせいでは、そう思ったとき傍らに立つ暗部がヒナタに耳打ちした。その言葉にヒナタは顔を引き締め、微かに頷いた。

試合は無駄に引き延ばされていた。数度のぶつかり合いで雲忍の実力が上だと、ネジにはわかる。だが雲忍は一気に責めていこうとはしない。あと僅かなところで引き、相手の攻撃を受けた。

この試合、警戒しろといのが伝えてきていた。ネジは白眼を開眼させ、周囲に視線を巡らせる。会場の火影席正面にネジ、右側にキバ、左側にシノが立っていた。彼らは会場の壁を背に三方に立ち、観客席を見下ろした。誰も、不審な動きはない。

まただ。ネジは訝しげに、試合場の雲忍を見た。

雲忍は、何度も視線を巡らせていた。よく見なければわからないほどの変化だろう。だが確かにその目を揺らし、視線を移らせていた。何かを待っているのか、ネジは注意深く雲忍の行動を窺う。

雲忍の動きに、シカマルも気付いた。欄干に肘を付き、雲忍の視線を追う。

「・・・空・・・？」

少年の視線は会場ではなく、高く作られた試合会場の壁越しに上を向いているようだった。自分じゃあるまいし、試合中に雲を眺める酔狂がいるとも思えない。それに、そんな穏やかな表情でもない。一体空に何が、そう思って向けたシカマルの視界に、白い羽が映る。

鳥が、飛んでいた。ゆるやかに旋回しつつ、鳥が、飛んでいた。

ネジはふと、空を見上げた。白い鳥だった。ああ、鳥か、そう思ったが何かがひっかかった。飛び方が、空の舞い方が、どこか違う。白眼を発動させ、改めて見た。

「上だっ！！」

鳥の足に起爆札を見つけ、ネジは叫んだ。日向の者たちが一斉に空を見上げ、宗家に連なる者たちはすぐさま回天を始めた。一瞬遅れて上空で爆発が起きる。だがネジが発した声で身構えることができた者たちが多く、重症を負った者は少なかった。戦闘員ではない者たちも、日向宗家の回天でその身を守られた。

ネジはすぐさま状況を把握し、ほっと息を吐く。重傷者は少なく、ヒナタも無事だった。客席に駆け上がったきたサクラはあらかじめ編制しておいた医療班を指揮し、重傷者を運び出す。

「ネジさん」

慌しく指示を出しながらサクラが近寄ってきた。

「なんかおかしい。仕掛けるにしても爆発ひとつのわけがないわ」

「確かに」

「私はこれから治療に入らなきゃならないから、ここ頼める？客席におかしなのがいたら、いのに伝えて。心を読むわ」

「わかった」

「もし起爆札を探せそうならお願い。十分に確認したから建物には仕掛けられていないと思うけど、さっきみたいに動物に運ばさられたら面倒だわ」

「ああ・・・」

ネジの額に汗が浮かぶ。小動物に起爆札を括りつけ走らせたなら、とんでもないことになる。どこで爆発するか仕掛けた本人にもわからないだろうが、どこで爆発するか予測できないだけに守る側の注意すべき箇所が無限大に増えるのだ。

ネジは分家の一人を捉まえこのことを伝えた。相手はひとつ頷くと会場内を走り、数人の分家に耳打ちして散会した。火影席を見上げる。ヒナタは無事だ。それを確認し再び会場内を見渡した。

守りたいものがある。守りたいものがあつたのだ。

『サスケ！里で煙が上がった！！』

「落ち着け、ナルト」

イヤホン越しに焦ったナルトの声が聞こえた。

『ここからは爆発音も聞こえました！里で何かあつたんですよ！』

『！』

「わかっている」

サスケは声の苛つきを隠そうともせず、リーに答えた。

『どうする？』

「各自、その場から動くな」

チョージの問いかけに指示を出す。

『なんでだよ！？里が襲撃されてるんだぞ！！』

「だからだ。ナルト、陽動作戦でのを知ってるか？」

『んなの俺でも知ってるってばよっ！！』

「それなら、動くな」

『だけど里がっ！！』

『そうですよ！！ここを守り抜いても、里が致命的な攻撃を受けたら終わりですっ！！』

イヤホンを着けているから仕方ないのだが、直情型二人に耳元で怒鳴られサスケのこめかみが震えた。

「やかましいっ！！怒鳴るんじゃないっ！！」

『・・・サスケこそ怒鳴るなつてばよ・・・』

『そうですよ・・・木から落っこちやいましたよ』

息を整え、サスケは努めて落ち着いた声を出す。里の現状を考え

れば、すぐさま駆けつきたい。それはサスケも同じことなのだ。

「俺たちは、ここを動かない。いまの爆発が里外の守りを手薄にするつもりのものであれば、これから敵が雪崩れ込んできてもおかしくはないんだ。いまは里の心配より、ここを守り抜く心配をすべきだ。・・・それに、里を守る奴らがあっさりとやられると思うのか？向こうには、シカマルもサクラムもいる」

「そうだよ！シカマルが敵の作戦にあっさりとやられるわけがない」

チヨージが断言し、ナルトもリーも腹が固まった。

「そうだな。キバだつてシノだつている」

「そうですよ！ネジもテンテンもいますからね」

仲間の声を聞いて、サスケは不敵に笑い正面を見据えた。仲間がいる。里に黒いシミが付いていたとしても、自分の仲間たちが輝いているのなら、そこは確かに彼の守りたい里なのだ。

「・・・いのと、ヒナタもいるよあ・・・」

遠慮がちに呟いたチヨージの声が届き、三人は爆笑した。

ネジの声で鳥を認めた瞬間、キバと赤丸は地を蹴っていた。上空高く飛び上がり、キバは赤丸の背を蹴りさらに上昇した。起爆札が燃え始めたのを視界に捕らえながら、鳥を蹴り上げた。少しでも高く、少しでも遠くで起爆すれば、それだけ被害は抑えられる。自虐趣味などないが、ここぞというときは我が身を棄てても何かを守ろうとするヒナタの戦いに触発されたことは確かだ。キバが守りたいものは仲間だった。自分の身ではなく、仲間を守りたかった。

空中でバランスを失い落下していく目で、遠のく鳥を見ていた。起爆札が燃え尽きる、穏やかな頭でそう思ったとき、強く身体が引っ張られた。いささか乱暴に地面に叩きつけられ、耳をつんざく爆発音を聞いた。小さく砕けた石や客席の残骸が、ばらばらと降り注ぐ。咄嗟に頭を抱えて身を守った。漸く収まった頃、静かに頭を上

げると、無然とした顔でシノが立っていた。顔の大部分が隠れているくせに、なぜだか怒っているのがわかった。

ふと見ると、小さな蟲がキバの右手の甲を這っていた。

「・・・わりいな」

なんだかバツが悪くて、へへへ、と笑いながら片手を上げて詫びた。

キバが己の身を省みず仲間を守りたいように、困難な中、キバを守ろうとする仲間がいるのだ。

再び客席に戻っていくキバの後ろ姿を見ながら、シノは汗に濡れる手を握り込んだ。

ネジの声が発せられる前に、蟲を仕込んだ者のなかで不自然に動こうとした者がいた。傍らに控えた上忍にそのことを伝え、彼らがその者たちを捕らえるのを蟲で手助けする。完全に捕縛されたのを見届けて、漸く蟲を解放することができた。それでもまだ、数十人に仕込んでいる。立てた襟で隠した口元から漏れる息が微かに乱れる。ここが踏ん張りどころだ。自分に言い聞かせた。あんな思い、二度としたくはなかった。

化け犬と対峙したとき、自分のチャクラがもっと残っていれば、もっと早くネジを解放できたかもしれない。もっと修行を積んで、もっと強ければ、ヒナタはあれほどまで傷つかずに済んだかもしれない。己の不甲斐なさを後悔した。今後こそ、仲間を守りたかった。里を守りたかった。

シカマルは爆発に備え地に伏せていた身体を起すと、辺りを見回した。一足早くネジが叫んだおかげで被害は最小限だったようだ。キバが咄嗟に鳥を蹴り上げたのも功を奏したようだ。

はっとしてキバを探す。彼が一番、爆発物に近かった。

「……どうやら無事みたいね」

隣に立ったテンテンが正面を指さして言う。

「……そのようだな」

遠くて声は届かないが、なぜだかシノに詫びるキバの姿があった。すつくと立ち上がって赤丸を撫でているところを見ると、怪我もなさそうだ。

「しかし……第8班は、むちゃくちゃする奴らばかりだなあ・

」

「ほんとにね」

腰に手を当てて、テンテンがほっとしたように息を吐き出した。

ネジが叫んだときには、火影席付近は、水影の出した水壁で強固に守られていた。滝の向こうで起こった出来事にヒナタは息を呑んだ。キバが飛び上がったのが見えた。爆風が火炎が、客席に降り注がれたのが見えた。

椅子から飛び上がり水壁に走り寄る。だが、本当の壁のように先に進めない。水なのに、突き進むことができなかった。

「……落ち着きなさい」

穏やかな水影の声が聞こえて振り返る。口元に笑みを湛えた水影は、爆風が収まるのを待って術を解いた。

火影席から客席を見渡した。

無事だ。みんな無事だ。よかった。無事だった。

ヒナタはほっと息を吐いた。

「どうやら、被害は少なかったようですね」

隣に水影が立つ。

「はい……」

「こうなることを、予め予測していたのですか？」

水影は客席に目を向ける。サクラの指示で、重傷者たちが次々と運び出されていた。

「とても手際がいい。木の葉は、いい参謀がいるようですね」
にこりと笑った水影にヒナタも笑い返す。仲間を認められるのは嬉しかった。仲間が褒められるのが、自分のことのように誇らしかった。

試験を受けている下忍の動きがおかしいことに、いのも気づいていた。白眼の日向ほどではないが、心を読む一族の端くれとして、洞察眼は常人以上のものはあると自負している。あの目の動き、汗の掻き方、身体の緊張の具合。何かを仕掛けてくるとわかった。しかしあの様子では知っていることなど高が知れているだろう。だが、少なくとも、あれに任務を与えた者はわかるはずだ。

いのは素早く印を結び、精神を飛ばす機会を狙った。

シカマルのように対象人物を完全に縛る誰かがほしいところだが、贅沢は言っていられない。この人ごみの中、身体を無防備に晒す危険は十分に理解していたが構わなかった。彼女にも守りたいものがあった。シカマルが仲間を守りたいというのなら、彼女もまた仲間を守りたかった。この先添い遂げる予定の、夫の寝ぼけた目が見つめる先に何があるかと、絶対に付いていくと決めたのだ。

ふと、下忍の目が対戦相手から逸らされた。微かに上を見上げる。その動作を疑問に思う間もなく、いのは心を飛ばした。幼い頃よりずっと早く飛ばすことができる。それでもこの距離、成功するかどうかぎりぎりだった。必死に飛ぶ彼女の耳に、ネジの叫ぶ声が聞こえた。

「ネジさん！」

振り向くと、いのが息急ぎ切って立っていた。

「探して！」

「・・・なにを？」

どうして女というものは、こつも突拍子もない話し方をするのだろう。かつてスリーマンセルを組んでいたテンテンも、よく主語を飛ばして話していた。

「え・・・と、あーもう、面倒くさいなあ！」

悔しがられても仕方ない。

「具体的に言え」

「起爆札よ！」

「どういうことだ？」

「さつき、下で戦っている雲忍の頭の中を覗いたの」

「・・・こつという状況下で、よくそういう技が使えるものだな・・・」

いのの無防さに溜息が出る。人のことは言えないが、シカマルのこれからの苦労を心中で労った。

「まあ・・・それは置いといて。そんで、見てたら、起爆札を付けたネズミを放しているのが見えたのよ！全部で7匹！あいつが一人でやってるわけじゃないだろうけれど・・・」

「ああ・・・そうだろうな。・・・だが、対象物が限定されれば探しやすい」

ネジは腕を組み、周囲を見渡す。

「しかし、考えたな。・・・さつきのように鳥だと、札をつけたやつ動きを辿っていかなければ意図した範囲で爆発させることは難しいだろう。やつらは起爆札程度の爆発では被害を与えられないような上空や、森にいたることが多いだろうし、今の状況ではこちらが警戒しているからこれ以上の爆発はさせられない」

「その点ネズミならいいわよね。元々人目につかないように隠れる動物だし、それでいて町中を住処としている」

「そういうことだ」

「じゃあ、私はシノに言ってくるわ。ネジさんは、シカマルにこのことを伝えて」

「了解した。ついでにそこにいる日向にも声をかけてくれ。シノの蟲と日向の目で探したほうが早い」

離れて立つ日向分家の一人を指し示す。いのが駆け寄るのを確かめながら白眼を開眼させた。

会場の中、シカマルを探す。下忍一人が仕込んだネズミの数が7匹。試験前から他里の忍の動向には目を配ってきた。その中をかくぐり放したとすれば、口寄せなど、何かの術によるネズミかもしれない。どちらにしるシカマルならどの程度の数が仕込まれているか、およそ間違わずに判断を下すだろう。

客席、執行役員席にはいない。どこだ。入り口、選手控え室。ネジは順に探していく。おかしい。絶対に近くにいるはずなのだ。この状態で、連絡もせず、遠くに離れるはずがない。ネジは僅かに焦りを感じた。探索距離を延ばす。

・・・いた。

会場から少し離れた民家の木々や塀に囲まれた空き地に、その姿はあった。ネジはほっと息を吐き、シカマルのいる場所へ行こうと身を屈めたところで、動きを止める。

何かがおかしい。

そもそも、なぜシカマルはあんな場所にいるのだ。仲間から離れて。

身を起こし、もう一度白眼を開眼させた。

確かにシカマルだ。だが・・・一人ではない。二人、三人・・・四人いる。シカマルを取り囲むようにして、四人。話をしているのか？いや、そうではない。会話をしているにしては妙に距離がある。それぞれ2m程度離れている。

背中に冷たい汗が流れた。身を屈め、一気に飛び出す。

「・・・ちっ！」

印を結んだ手が微かに震える。上忍クラスを四人、一度に縛るのには力がある。正面に揃っていればまだ楽だったが、相手はシカマルの技を熟知しているのか四方に立っている。自分を支点に影を四方向に伸ばして縛るのは、正面に伸ばした太い影を枝分かれさせてそれぞれ縛るよりチャクラの消耗が激しい。しかも彼らは無理に動いて己の体力を奪うようなことをせず、シカマルが崩れるのを待っている。その顔に、歪んだ笑みさえ乗せて。

額に汗が浮かぶ。己の迂闊さを呪った。ずっと動向を注視していた木の葉の忍がああ爆発の後、会場を出るのを見つけた。騒動の中心地から離れるのだ。何をしようとしているにしろ、よからぬ企みだということくらい誰にでもわかる。相手が一人だということにも油断した。相手が中忍だということにも。

影が薄くなる。目の前に立つ一人が僅かに足を動かせるのが見える。後ろの奴は腕を動かせたようだ。だが、改めて縛り付ける力が自分には残っていない。

「くそっ・・・！」

テンテンと離れなければよかったか。彼女には件の中忍をつけてもらっている。自分はこれ以上、第一の爆発地である試合会場から離れるのはまずいと、テンテンと別れた。だが彼女が側を離れるのを待っていたように敵が現れたのだ。

影がもう一段薄くなる。右前の一人がクナイに手を伸ばそうとしている。上忍四人が、自分一人を狙う意図が読めない。だが、せめて一人でも倒して仲間の負担を減らしたい。

片手印に直し、空いた手でクナイを握る。

四人の縛りが弛む。それぞれがぎこちなく手を動かし、印を結ぼうとしているのを感じた。

・・・ちっ！一人でも無理か・・・

冷静な頭で己の力量をはかり、冷たい鉛を飲み込むように覚悟を決める。一瞬、生まれたときから知っている婚約者の顔が過ぎった。申し訳ないと思い、結婚する前でよかったと安堵し、他人が奪うのかと、少し、焦燥した。

クナイを握り直し、印を消す。片手印でチャクラを分散させて戦うより、刺し違い覚悟で踏み込んだほうが僅かにでも勝機がある。ヒナタの戦い方を真似ようとは思わなかったが、彼女がなぜあんな戦い方をしたのか、いまならわかる。自分の肉を切れき、骨を砕き、血を吐き散らしても守りたい何かがあるのだ。

四人が印を結ぼうと素早く両手を組んだのがわかった。シカマルは足に力を込め踏み込む。だが、狙いを定めた相手に届くことはなかった。

頭上を、鳥が掠めたのだと思った。黒い影で、何かが飛んだのだ。一瞬後、粉塵が舞い上がる。気づいたときには四人の敵は薙ぎ倒されていた。

「間に合ったか」

「・・・わりい。助かった・・・」

仲間の顔を見て、情けなくも脱力してしまった。座り込んだシカマルにネジが手を貸す。

「こいつらは・・・？」

「霧だ。しかし・・・里一つ襲撃途中にしては、あまりに非効率な戦い方だな・・・」

ネジは倒れている四人を縛り上げながら、シカマルの疑問に頷く。以前の木の葉崩しと同様の事態を想定し、最小限数しか他の里、とくに音、雲、霧の忍は里内に入れていないのだ。少ない人数で木の葉を襲撃するならば、もつと大技を駆使しなければならぬだろう。に、四人も割いて一人を倒すのでは到底目的は果たせないだろう。

頭の片隅で今の事態をネジなりに分析しながら、いのの見た起爆

札のことを伝えた。

「……こういう状況下で、どうしてそういう技を使うんだ……」

ネジの予想通りの反応を返しながらも、シカマルは里にばら撒かれてるだろう起爆札の数を言った。

「多分、90から110個でとこだな。試験を受けている下忍が音、雲、霧を併せて8人。8人がそれぞれ7個の起爆札を仕掛けていたとして56個だ。それぞれに付いて来ている上忍が5人。下忍の1.5倍を仕掛けたとして52個から53個。上忍なら下忍の10倍仕掛けたとしてもおかしくないが、こちららも警戒を強めていたからな。火の国に入国してからやつらの宿場に至るまで、ずっと日向が監視していたんだし、その目をかいくぐって仕掛けるにはこの数がせいぜいだろう」

「……そうだろうな」

「最終試験に残った奴らを見てても、さつき戦っていた雲の下忍が一番つかえそうだ。そいつが7匹だとしたら、後のやつらは1匹がいいところかもしれないし、そもそも下忍全員が木の葉崩しをしているとも思えんが……」

「だが被害は、想定する最大限を目安に動いたほうがいい。日向と油女にそのことを報せてくる。ついでにこいつらをイブキに渡そう」

「頼む」

すんなり吐くとは思えないが、尋問のプロに任せればいだろう。イブキなら信用できるし、もはやこの状態では隠しようもない。木の葉崩しが再び起きているのだと、里の誰もが気づいている。

「……待て」

背後から掛けられた声に、ネジは素早く身構えた。縛っておいた一人が気づいたようだ。

「我らは何も、木の葉を狙ったわけではない」

「なんだと……？」

ネジの回天で痛めつけられ、僅かに青ざめた顔でシカマルを見る。「じゃあお前らは何が目的なんだ。お前らの後ろにいるのは誰だ？」

「他は知らんが、我ら、霧の目的は……」

僅かに言い淀む。尋問を恐れて口を割る忍がいるとは思えない。自ら進んで話す内容が正しいとは思わないが、聞いておく必要はあった。

人が嘘を吐くときは、真実に添った嘘か、全く逆の嘘になる。どちらであったとしても嘘という情報を得ることにまた意味があるのだ。嘘から何を導き出すか、シカマルの頭脳なら決して真実を違えることはない。ネジは確信している。

「我らの目的は……お前だ。奈良、シカマル」

「……俺？俺なんか狙ってどうするんだ？」

「……お前の力を欲している」
「力だと？……自慢じゃないが、俺はどっちかてーと非力だぜ？ここにいる奴のほうが明らかに強い」

親指でネジを指す。火影の判断如何では放す可能性もある敵国の忍に、ネジの名を明かすことはしない。

「忍術や体術が強い者を欲しているのではない。そのようなものは我らの中にもいる。我らが必要としているのは、お前の頭脳だ」

ネジは僅かに目を見開いた。この忍、真実を語っているのではないか？

「我らの中には満足な作戦を立てられる者が少ない。だが、優秀な参謀の立てた作戦は時として、下忍で上忍を倒すこともある。お前の頭脳、ぜひとも我が里で生かしてみないか！？」

「……何を言い出すかと思えば……」

「冗談でも嘘でもない！これが我らの目的だ。木の葉の里の混乱に乗じて、お前を連れ出すつもりだった。十分に時間をかけて説得をするつもりだったのだ」

「なんつーか・・・まあ、買い被ってくれてありがたい、と言っべきなのか・・・」

「買い被りなどではない！！一昨年の化け犬のときもそうだ。我らもあの犬に関しての情報を得ていた。我らは巻物に封印されているのが化け犬だということまでわかっていたのだ。だが、場所の特定に時間を要した。我らは木の葉より多くの情報を持っていたはずだが、その情報量を持ってしても場所の特定ができる者がいなかったのだ。・・・だがお前は僅かな情報量で確実に場所を特定した」

「結構、大雑把だったと思うぜ？広すぎて探索に一ヶ月近くを要した上に・・・巻物の正体を見誤って、多くの損害を出した」

シカマルの口調に悔しさが滲む。自らが立てた作戦で、里の忍が傷つくの誰よりも恐れる参謀の姿がそこにはあった。

「・・・お前も気づいているのだろうか？木の葉には我らに与する者がいる。その者から木の葉の握る情報を我らも知っていた。・・・あの情報量では我らより先んじることはないだろうと安堵していたのだ。それなのに、お前は我らよりも早く、導き出したのだ」

試験会場の喧騒が微かに届いている。起爆札のこと、早く報せねばと思いつつも、この場を離れることはネジにはできなかった。シカマルが、あと数年もすれば木の葉最大の武器になるだろうこの参謀が、どのような判断を下すのか見届けなければならぬ。木の葉を、仲間を裏切ることはないとわかっている、彼に対する木の葉の待遇を考えると安心はできなかった。

「木の葉では未だに旧来然とした古い頭の参謀たちがいるのだろうか？木の葉の重鎮は、若いお前の頭脳に嫉妬し、話を聞かないことも多いのだろうか？そして、若い参謀たちも、お前の頭の切れについていくことができず、理解されないこともあるという」

確かに・・・ネジは心中で頷いた。ずば抜けた頭脳というものは孤独を生む。圧倒的なリーダー性を発揮し、強力に物事を押し進めようとする者であったならば、まだよかったのだろうか。だがシカマ

ルは朴訥とした気を纏い、押しが弱い。自分が正しいと思うことでも周りの賛同が得られなければ、迂回して物事を進めようとする。彼の言うように参謀たちが動き、全面的に重鎮たちが支持すればもっと簡単に、もっと早く進むのに。変わらぬ表情の下で、シカマルが鬱積とした気分を溜めているのをネジは知っていた。

「・・・自分を取り巻く人間、6割の賛同が得られたら上等って言わねーか？」

ぼそつとシカマルが呟いた。

「俺はさ、全員の賛同なんて得たかねーよ。そんなもん、自惚れた馬鹿を生むだけだ。・・・俺には仲間がいる。こいつらがいる。とりあえず、6割とは言わねーけど、まあ、5割くらいは俺の味方がいるわけだ」

口の端を微かに上げて、ネジを見た。頷いてやる。そうだ。例えお前が間違っていたとしても、俺たちはお前の指示で動く。

「・・・だが、自分の計画を全て受け入れ、着実に速やかに行動に移すことができれば・・・そう思うことはないか？」

シカマルは肩を上下させただけで返答は避けた。

「我らはお前の計画の全てを受け入れる。我らのために余すところ無くその頭脳を生かし、我らの目的を果たすための力となってくれないか？」

「・・・目的って、なんだ？」

「この世の、戦いの、全てを終わらせる」

力強く言い放ち、まっすぐシカマルの目を見た。嘘ではない。本当に、それがこいつらの目的なのだ。

ネジの洞察眼がそう判断した。

「いまそれぞれの里が国の政策に踊らされている。強い国が強い里を有し、弱い国を攻め滅ぼすために里の忍が動いている。それならば忍同士が手を結び、一気に国々を倒し世界を統一すれば、戦いなどなくなるはずだ。そうは思わないか？」

「・・・思わねーな」

「なぜだ!？」

「戦いつーのはさ、国同士だけでやってるわけじゃない。人と人も始める。理由は五万とあるさ。金、見栄、信仰、文化、習慣の違いから歴史に絡む心情まである。俺たちはさ、忍界大戦なんて歴史書でしか知らないくせに、他国との関係を良好に保とうと思えば、必ず考えなきゃならねー問題になる。あの国にあんなことされたから腹が立つ、つってもあの大戦をナマで知ってる奴がいまどれだけ生きてるんだ?・・・にも関わらず、いま生まれて生きてる人間の、むかつく、つー言い分だけで上手くいかなくなるんだ。世界を統一したからって、人の心までは統一できねーよ」

「しかし・・・!戦いを無くすためには・・・」

「戦いを無くすために行動するのはいいだろう。だが俺は、未来永劫の平和なんて望んじやいない。そうだな、100年先の平和でいいや。俺と、これから生まれてくる子供が生きてる間の平和だ。・・・その先のことはまた、次の奴らに任せる。それがちっせえ人間にできる精一杯だと思うぜ」

「しかし・・・それならば・・・この世からは、絶対に、戦いは無くならないと思うのか?・・・我ら霧の里は激しい戦いに何度も晒され、国には悲惨な情景が広がる。我らはこの先も、ずっと、他国に踏みつけられて生きるのか!？」

「戦いを、したくなければ強くなることだ。戦いを、仕掛けられたくなければ、強くなることだ。だがその強さを、他国に攻めるためにつかうとおかしくなるんだ。一つの国が平和に治められる土地の容量って、決まってるんじゃないかと思う。・・・動物の身体のでかさが決まってるみてーにさ。でか過ぎれば倒れるだけだ」

「どうあっても我らと共に来ないのか・・・」

「まあ、そうだな。・・・木の葉も色々あるが、それでもまだ、居心地は悪くない。・・・仲間がいるからな」

霧忍の首ががくりと垂れた。シカマルを説得することは無理だと

わかったのだろう。男の全身から張り詰めた気が抜けるのがわかった。

「ひとつ、確認する」

今度はシカマルから口を開いた。その声音は優秀な参謀のそれだった。

「お前たちは、里の意思で動いていたのか？・・・水影は、お前たちと共にあるのか？」

そうだった。自分としたことが・・・！ネジは両拳を握り締めた。いま、水影はヒナタの側にいるのだ。

「水影さま・・・ああ、あれは違う」

先ほどまでの勢いと打って変わって、男は弱々しく答えた。

「そうか・・・」

シカマルがほつと息を吐いた。ネジも握り締めていた拳を開く。だが、次に吐かれた言葉に二人の身体は弾かれたように飛んだ。

「あれは、水影さまではない」

他に仕掛けられた起爆札はないか、赤丸と共に鼻をひくつかせながら客席を一巡したところで、キバは火影席を見上げた。水影の術で火影席には被害はなかったようだ。暗部二人に水影も側にいるのだから大丈夫だと自分に言い聞かせるが、やはり気になる。ヒナタが強いとわかっていても、どうしても、自分の中では未だに弱々しい少女のままなのだ。

「ちっ……！」

駄目だとわかっていつつ、飛んだ。

「キバ、お前もか」

「……で、シノ！なんでお前がいるんだよ！？」

「なぜならば、蟲はどこにいても操れる」

火影に変化したままのヒナタの横にはシノがぴたりと張り付いていた。暗部は彼女の後ろを守っている。キバはシノとは反対側の、ヒナタの横についた。キバとシノ、二人の間にヒナタを置く。これが自分たちが一番安心できる形だ。

「客席を一巡したが、火薬の臭いはしない。どうやらここに起爆札はないようだ」

「そうか」

シノがそう答えたとき、街の中心部で爆発が起きた。続けて二発。

「……！」

「動くな。キバ」

思わず身構え飛び出そうとしたキバを、シノの声が制する。

「爆発が弱い。おそらく、日向がネズミを見つけて爆発させたのだろう。俺たちはここを離れるべきではない」

確かに立ち上る黒い煙は細く弱い。

「そのようだな」

キバが身体に溜めていた力を抜いたとき、もう一つ爆発音が響いた。今度は大きい。しかも、里の中心街ではなく火影岩の方面。

「火影の屋敷の方角だっ！」

「二人とも、行ってください」

後ろに控える暗部に、ヒナタが言った。一瞬躊躇した暗部に、守るべきは自分ではないとヒナタの目が語っていた。

木の葉の忍、一枚一枚の葉が振り所にする火影という大樹が倒れたら意味がない。6代目に相応しい人物がいらない今では、5代目火影が倒れるわけにはいかないのだ。

暗部二人は軽く頷くと姿を消した。

また爆発音が響いた。今度は街から少し離れたところ。立ち上る煙は大きい。

「・・・いつたい、いくつあるんだ!？」

「焦るな。街中でなければ被害は少ない。街中を重点的に見ているのだろう。なぜならば、日向も数に限りがある」

小さな爆発音が立て続けに起きた。三つ。

「里の被害は少なそうですね」

手摺に手をかけ、水影が言った。見渡すように街を見ている。

「ああ、でも、森の方がすごいな」

森、と聞いて三人の背に電流が走った。森にはサスケ、ナルト、チヨージにリーがいる。

「ほら、火影さま。里外の森で大きな煙が上がっていますよ」

ヒナタは手摺から身を乗り出すようにして、指し示された森を見た。大きな黒い煙が上がっている。音は聞こえなかったが、爆発か。手摺を掴む手に力が籠る。少し離れて白い煙が上がった。近くの木々が倒されたようだ。

少ない人数で守りきるには無理があったのか。犬塚一族が手を貸しているが、里を囲む森は広い。

「大きな戦闘のようですね」

「・・・シノ!」

「ああ」

水影の冷静な声を背に、キバが森へ向かおうと手摺に足をかけた。ぐつと力を籠めたとき、ヒナタが、持っていた剣を抜きざま水影に斬りつけるのを視界の端で捉えた。

水影の防御動作が一瞬遅れる。淡い色の衣が肩から切裂かれた。

「・・・なにを・・・」

肩を押さえる指の間から、赤い血が流れる。キバと赤丸は彼女を守るように、ヒナタの前に出た。シノの蟲が水影の足に絡みつく。

「火影さま・・・一体・・・」

水影の秀麗な眉が顰められた。

遠くで爆発音が響いていたが、四人の間には静かな時間が流れていた。構えた剣はそのまま、ヒナタの眼光は鋭く水影を捉えていた。キバと赤丸、シノも警戒を解かず、一切の隙もない。

どれほどの時間が流れたのか、三人を見据えていた水影がふつと気を緩めた。頬に笑みさえ浮かべる。

「・・・いつ頃、気づかれました？私が偽者だと」

「私が偽者だということにも、気づいていましたよね」

「ええ、始めからね」

その言葉を確かめてから、ヒナタは変幻を解いた。

「ああ、日向の方でしたか。では、白眼で私の正体を？」

「白眼で、変幻を見破ることはできません。・・・あの時、私とあなたの間にいた彼が飛び出そうとしたとき、あなたは私の背後に回ろうとしたでしょう？」

「・・・どうして、そう思いましたか？」

「指先も目も森を見ていながら、足先だけが、私の背後を指していました」

”水影”が己の足元を見て、くつくつと笑い出した。

「おもしろい人だ。足の向きを見ただけで危険かどうかを判断し、

私に斬りつけたというのか・・・もし、私が本物の水影で、たまたま、足先がそちらを向いていただけだとしたら、どうするつもりだったのですか？」

「間違っていたら謝罪するだけです。殺すほどの斬りつけではありません」

「相手が水影なら、謝罪だけでは許されないのでしょ」

「そうでしょうね・・・でも、躊躇して何もせず、敵に傷つけられ後悔の中で命を終えるより、自分の判断が間違っていたと責任を取って罰を受けるほうが遥かに納得のいく一生を終えられると思います」

「その結果、他人が傷ついても・・・？」

「お互い忍でしょう？傷つけられたなんて、言い合っても仕方のないことです。それが嫌なら忍など辞めるべきでしょう」

「ますます、おもしろい人だ。うちにスカウトしたいくらい・・・で、君たちも私が敵だと思ったわけか・・・」

「お前が怪しいなんて、今の今まで思ってもいなかったがな・・・ヒナタがお前を敵だと判断したんだ。俺はヒナタを信じる」

「同じく・・・なぜならば、ヒナタは仲間だからな」

「おもしろい人たちだ・・・仲間一人の判断を即座に信じきるか。なかなかしようと思っただけのことではない。三人纏めてうちをスカウトしたいな・・・」

「・・・で、お前は誰なんだよ？」

「ヒナタっ！怪我はっ!？」

”水影”の言葉を遮るように、決して広くない火影席にシカマルとネジが飛び込む。ネジはヒナタの無事を確かめると、彼女の前に立ちはだかった。ヒナタの守りはネジに任せ、キバと赤丸はそれぞれ”水影”の両脇に回り込む。

「・・・ここで戦う気はないよ。こちらはもともと、今回は様子見だけのつもりだったしね」

肩から手を放すと、指を組み変幻を解いた。

「……！薬師カプト！」

やはり、という思いがシカマルの中で広がった。当初、今回の騒動の主体は音だと思っていた。だが、僅かに集まる情報を分析していくと、音ではなく、雲か霧、どちらかだと思い始めていた。

霧が水の国の要望で動いているのだとすれば、ザンキ様を拉致し、公累市を手に入れることが目的だろうと。そうすれば火の国は水の国に挟られるように国土を失う。すぐさま失うことはなくても利権を抑えられ、教育や文化、治安に関するこの政策を水の国の意向で行うようになれば、遠からず公累市を失うだろう。

雲は国ではなく、里の意向で動いていると見ていた。力を無くしていく木の葉だが、それでもまだ雲より上にいた。しかし、木の葉がこれ以上弱体化すれば、雲が一番、忍里としての力を持つ。あと少し、そう、火影を傷つけることができれば。

最後の最後まで、どちらが主体なのか見極めることができず、力を割くような配置しかできなかった。雲も霧も、損害を出してでも木の葉に真意を読ませないために、わざわざ黒の森を何度も通ったのだ。だがここにきてようやく、シカマルにも見えてきた。主体は雲。霧は里の意向でもなく、国の陰謀でもなく、ただ、雲に協力姿勢を見せつつ木の葉と雲の現状の力量を測っていたのだ。もちろん、自分という、小遣い程度の利益を得ようとはしたのだろうか……

そして、音。嚴重な、特に音に対しては嚴重な警護の中、音忍が簡単に入り込むことはできなかつたはずだ。だがこの機会を大蛇丸がみすみす逃すとも思えない。もし万が一、何かしらの絶好の機会があれば、そう考えれば誰も入り込んでいないはずがない。大蛇丸に近く、大蛇丸の意向をほぼ間違いない捉え、いざというときには確実に実行に移せる者。それは薬師カプトを置いてほかになく、また、そのような絶好の機会に恵まれる場所は火影の側を置いてない。水影が偽者だと言われれば、それは薬師カプトだろうとシカマルは

判断していた。

「お前を捕らえたいところだが、そう易々とはいかねーだろうなあ。お前はこういう事態を想定してるだろうしな・・・見物なら、見物らしく、さっさとお引取り願いたいもんだがな」

人数では圧倒的に有利だが、シカマルのチャクラは残り少なく、シノも同じことだろう。里内に入っている他里の忍をここ数日間偵察し続けたネジやヒナタも、同じく疲労感は拭えない。まともに戦えそうなのはキバと赤丸だけだが、甘い相手ではない。

「そうだね・・・まあ、あらかた見させてもらったし、そろそろお暇するよ」

印を結び、一瞬にして姿を消した。ほっと、気が弛むのをシカマルは感じた。音という、木の葉にとっての一番の鬼門は退いたようだ。

「霧の目的が本当にあれ程度なら、もう霧はいないと考えていいだろう。としたら、残るは雲だ」

「霧を捕らえたのか？」

「ああ・・・ま、いろいろあつてな」

比較的近くで爆発音がした。しかし、音は小さい。

「まずはこの起爆札をどうにかしなきゃな・・・ネジ、動けるか？」

「ああ」

「んじゃまあ、悪いが、日向に残りの数を伝えてくれ」

「わかった」

ネジは火影席から会場に飛び降り、すぐさま駆け出した。

「数がわかったのか!？」

「まあ、多分、てとこだがな。それよりキバ、お前はどうか？動けるか？」

「もちろんだ!」

「じゃあ、お前は森を頼む。さつき木が倒れたあたり、あれはチヨージだと思っからお前はその反対側に行ってくれ。森みたいなことだと、お前ら接近戦タイプが強い」

「おしっ！！行くぜっ！赤丸！」

白い犬の背に飛び乗り、弾丸のように飛び出した。

「ヒナタ、イブキの部隊と一緒にシノが蟲を仕込んでる奴を全員捕獲してくれ。それから、捕らえた霧忍四人を執行役員席付近に運ぶよ言ってるから、イブキにそいつらの尋問を頼んでくれ」

「うん」

ふわり、と火影席から飛び降りる。

「シノ、もう一踏ん張り頼む。全員捕獲されたら、とりあえず休んでてくれ」

「了解した」

背を汗が流れ落ちたが、声を乱すことなくシノは答えた。

里内に入り込んでいた敵は少なく、捕獲は比較的簡単に済んだ。手を煩わされたのは起爆札を付けて走り回るネズミの捕獲であった。悪戦苦闘する日向一族の中にはヒアシとハナビの姿も見られた。

イブキ率いる尋問部隊と山中一族が、捕らえられた雲と霧の聴取を行った。霧に関してはシカマルに話した内容がほぼ全てであった。この事実は、シカマルを軽んじていた重鎮たちがその認識を改める継起となる。後に、この騒動の中で、その一点だけはよかったと言えることだと彼の同期たちは語り合ったのだった。

雲の陰謀は想定していた以上に深いものであった。木の葉の裏切り者はテンテンが後をつけた中忍だけではなく、上忍に特別上忍、暗部に至るまで多岐に渡っていた。大木が内部から腐りかけていたのだ。里中が疑心暗鬼に襲われたが、裏切りの中核にいた者を嚴重に罰した後、火影の出した収束宣言で落ち着きを取り戻した。当初、アカデミー教師に裏切り者が多数いるのではないかと憶測されたが、

幸か不幸かそのような者たちは一切おらず、アカデミーの質の低下は全く別のところに原因があるということが明らかにされた。

里外の、森での戦闘は熾烈を極めた。最初の爆発を合図に、一斉に木の葉に雪崩れ込もうとした多数の雲忍と、反対側から攻めてきた霧忍を食い止めるためにサスケにナルト、チョージ、リーが奮闘した。犬塚一族と秋場一族は四人が取りこぼした敵を門前で確実に仕留めた。チョージが木を薙ぎ倒してできた空間で、リーが敵を引きつけナルトが螺旋丸で仕留める。途中参戦したキバと赤丸は、遠隔攻撃を行うサスケを援護した。圧倒的多数に対して僅か五人で立ち向かったのにも関わらず、一人の死者も出さなかったことは木の葉の存在を改めて内外に知らしめる好機となったのだ。

「よく似合ってるわよ。いの」

「そりやそうでしょう。私は何を着ても似合うもの」

「ま、馬子にも衣装と言うものね」

サクラの言葉に、にっこり笑ったいのの頬が引きつる。

「言ってくれるじゃないの〜デコリンちゃん。先を越されて悔しいんでしょう?」

「まさか、そんなわけないじゃない。これでサスケくんは私のものよ」

いののは持っていたブーケを握り潰しそうになった。これは母と一緒に作ったものだ。慌てて籠めていた力を抜く。しかし、平静を保とうとしたが、心中は穏やかではない。シカマルがいい、そう思っ
て決めた結婚だが、幼い頃から抱いたサスケに対する恋心を棄てたわけではないのだ。心のどこかで、僅かに、微かにだが、振り切れない想いもある。それは真実だった。

「・・・確かに、私はサスケくん争奪戦から一抜けするわけだけど、だからと言って、あんたにお鉢が回ってくるとは限らないのよ」

「ちよつと〜いい加減にしなさいよ?こんなお目出度い日に」

テンテンが見かねて仲裁に入るが、幼い日に戻ったように二人は睨み合っていた。二人ともわかつているのだ。こんな風にじゃれ合
っていられるのも今日限りだということ。

「こんな時にまでサスケサスケって、お前ら本当に懲りねーなあ」
とつくに用意を済ませたシカマルも一緒に、男忍たちがやってきた。無理矢理タキシードを着させられたシカマル以外はみんな忍衣
である。

「うるさいわよ、キバ。第一、花嫁の支度場所に、なんで、ぞろ
ぞろあんたたちが入ってくるわけ?あ、もちろん、サスケくんはい
いのよ〜」

「いの……その変わり身の早さって、シカマルが気の毒になつてくるよ……」

チョージが哀れみの視線を送ってきたが、シカマルはのんびりと受け流した。いまに始まったことではないのだ。アカデミー入学日に誰かが発したサスケ熱は、あつと言う間に同期女生徒全員に感染し、未だ癒えないのだから。

「ん？……そーいえばヒナタ、お前だけは違ったよなあ？」

そうなのだ。クナイを投げればきゃーきゃー、変幻の術でわーわー、と姦しく騒いでいた彼女たちの中に、確かヒナタはいなかったはずだ。

「ヒナタって、サスケに全く興味なかったのか？ずっとネジ一筋なのか？」

「え……あ……うん……ネジ兄さんがずっと……その、よかつただけけど、それだけじゃなくて……」

今となつては刺々しさはすっかり薄れ、同期たち、心を許した仲間の中にあつては、幼い頃からずっと知っている彼女の姿があつた。

「サスケくんはかつこいいと思うけど、でも、男の子というより、お兄さんて感じだったから……」

「……それって、どーいう意味？」

ナルトの疑問に同調するように、皆一様に首を捻る。頼りがいがあつてお兄さんみたい、というのならわかるが、いや、しかし、お世辞にもサスケは頼りがいがあるとは言えない。戦闘時には頼りがないもある強さだが、平常時においておいそれと他人が頼れるような穏やかさは、ない。

こいつのどこをどうとって、お兄さん？

日向一族以外の者の視線を一身に受けて、サスケの眉間に皺が刻まれる。

「……お前たちの言いたいことは、わかる」

「そうだろう？お前はお兄さんて感じじゃないってばよ。鬼さんてのなら、わかるけ……」

みなまで言わせずサスケの鉄拳がナルトの腹にめり込んだ。

「お・・・お前な・・・っ」

「口は災いの元てのを、いい加減覚えろ」

「ナ、ナルトくん。あのね、サスケくんは私より先に産まれているから、だから、お兄さんなんだよ」

「ヒナタ、それで言えばここにいる多くの者がお前のお兄さんでお姉さんになるぞ。なぜなら、お前は12月生まれだろう？」

「うん」

「・・・ヒナタ、そういう言い方では誰にも意味がわからない」

ネジはこめかみを震わせながら、シノの言葉に頷くヒナタの肩に手を置いた。

「つまりだな、ヒナタはサスケと暮らしたことがあ・・・」

「えーーーーー!!!!!!」

「なんですつてえーーーーー!!!!!!」

「どういうことおーーーーー!!!!!!」

ネジの言葉が終わらないうちに、三人のくノ一たちの雄叫びが響いた。何事かと入ってきた式場関係者や親族たちに、何でもないからと追い返し、改めてネジに向き合った。

「僕も驚きましたけど、テンテンがそんなに叫ぶほど驚くとは思いませんでしたよ」

「いや、だって・・・いい男はやっぱり気になるじゃない？」

「で、ネジさん、それってどういうこと!？」

「そうよっ!どーしてヒナタさんがサスケくんと一緒に暮らすわけ!?!そもそも、それっていつのことよっ!?!」

サクラといのに両脇から襟首を掴まれ、がくがくと揺さぶられながら、こういう女と結婚しなくてよかったとネジは心中でシカマルに手を合わせた。まあヒナタの場合、キレ方が怖いと言われるのだろっが・・・

「うるさい。騒ぐな・・・ちっ、面倒くせーな」

お前が余計なことを言うからだ、そうシカマルを睨みつけてから

サスケが少々説明した。

「俺らが4歳くらいの頃に、うちはで預かったことがあるんだよ」

「あの頃、ヒナタの母上はハナビさまを身籠っておられたからな。日向では色々あって、ヒナタは日向を離れたほうがいいだろうとヒアシさまが判断されたんだ。うちはは日向の遠い親戚とはいえ、あの頃はまだ、比較的密度の濃い付き合いがあったからな」

「え・・・二番目を妊娠したからって、上の子を外に出す？普通・・・」

「母上は私のことはあまり好きじゃなかったから・・・ハナビがお腹にいるとき、気が立ってみたいで、私がないほうが胎教にもいいだろうって。だけど、ハナビが産まれて直ぐに戻るはずだったのが、母上が寝込んでしまわれたからそのまま、うちはおうちで厄介になってたの。結局、母上が亡くなられてからもしばらく居させてもらったから、4歳から6歳の手前くらいまでいたんだよね」

懐かしそうに笑ってサスケを見上げると、サスケも頷きながら補足した。

「1年と半年くらいか。あの馬鹿が錯乱する前に帰ってよかったな」

「イタチ兄さま・・・優しい方だったけど・・・」

その名は、ふん、と鼻を鳴らしただけで無視した。イタチの名を出されても心が平穏で居られるようになったのは、やはり、この場にいる仲間の功績が大きいのだろう。特に、今も殴られた腹をさすっている金髪の青年の力が。

「そ・・・そういう理由だったのね・・・私も子供の頃、ヒナタさんが全然サスケくんを騒がないのとおかしいと思ってたのよね」。

そのくせ、すんなり話しかけたりするし」

「そうそう。それで、私らには冷たいサスケくんが・・・て、もちろんそんなところもいんだけどお、ヒナタさんには優しく答えてるんだもの。おまけに、あれ・・・」

「そうそう。時々、ものすごく、心配そうな目で見てたのよね」
「うんうん。そんで、あ、とか言ってヒナタさんに手を貸そうとしてたから、サスケくんの好みってヒナタさんだと思ってた」

「私もそう思ってた!」

本日の主役とその介添人が手を取り合って昔話に花を咲かせている姿を見ながら、案外、外れてもいないとサスケは思っていた。出合った頃はおどおど様子を窺うばかりで、同い年とは思えないほど小さかった子を兄貴面で構ううちに手放せなくなっていたのだ。日向に戻るとき、白い目にいっぱい涙を浮かべていた。別に一生会えなくなるわけでもないし、アカデミーに入学したら毎日会えるだろう、そんな言葉で突っぱねたが、夜通し泣いて翌朝目が腫れ上がった開かなかったのは自分だ。アカデミーに入学する前に一族全てを亡くし、塞いだ心のまま再会した。笑いかけてくれた彼女を無視した。馬鹿なことをしたと、いまでも思うのだ。

「そろそろ始まるんじゃないのか。・・・面倒くせーなあ」

溜息を吐きながらシカマルが出て行くのに、チョージヤナルト、男忍たちが続く。

「ヒナタさん。これが終わったら、すぐ、だからね」

「え・・・でも、本当に・・・いいの?」

「もちろんですよ!ネジさんだつて了承したんだし」

「ネジ兄さん・・・怒ってないかなあ・・・」

「だーいじょうぶ!ネジはああ見えて、結構乗り気だと思っわよ」
「?」

シカマルといのの結婚式の後、残った参列者と同期たちだけでネジとヒナタの結婚式を行う。これはサクラやいの、テンテンが中心となって進めてきた計画だった。当初渋っていたネジだが、ヒナタが望んでいるはず、というくノ一たちの言葉と、名字が変わらなかつただけに未だ独身だと思われヒナタに想いを寄せている男の名前

をシカマルやらキバやらリーやらに囁かれ、今では完全に乗り気になっっている。もちろんテンテンには後者の理由が大きいという事はわかっていた。

「じゃあ、ちゃっちゃと済ませてくるわよ」

真っ白なウエディングドレスを身に纏ったいのが、父であるいのちの元へと歩いて行った。

「・・・ヒナタつてはきれー」

ナルトに褒められ、ぼつと頬を染める。その姿が初々しくてその場にいた者の笑みを誘う。

「いのの着るんじゃないのか？」

「シカマル聞いてよ」。そのはずだったんだけどお、ヒナタさんにいののドレスは無理だったのよ」

サクラが含み笑いをしつつ、意味深な視線をいのに送る。

「え？なんで？いのよりヒナタのほうが細いと思うけど・・・」

「うっさいキバ！・・・あーもう、いつとくけど、私は普通だからね！普通！！」

「・・・なんの話？」

「袖もウエストも丈も大丈夫だったのよ。ま、ウエストはちょっといののほうが大きかったくらいで・・・ただね」

「えーい！！うるさいっ！！・・・胸よ！胸！！悪い！？」

開き直つたいのの横で、サクラとテンテンが笑い転げた。事情を薄々感じ取った男たちが、改めてヒナタを、というか胸を見つめる。四方から凝視されてヒナタは持っていた豪華なブーケで顔を隠し、ネジが慥然とした表情で立ちはだかった。

「え・・・あ・・・ゴホン・・・まあ、えと・・・合っドレスがあつてよかつたな」

ネジに睨みつけられながら、キバが慎重に言葉を選んだ。

「ちよっと・・・派手じゃないかなあ？・・・白でもないし・・・」

「ヒナタは白より、そつちのが似合うつてばよ！」
力説するナルトの言に、みんな頷いた。

ヒナタはワインレッドのドレスを着ていた。身体にぴたりと合わさったドレスは、彼女の腰の細さや胸の豊かさを強調していた。比較的大きく開いた襟で胸の谷間が見えていた。肌理の整った白い肌や漆黒の髪がドレスによく映えていた。山中家から贈られた白いカラーで作られたブーケはカスケードで、それもまたドレスを引き立てた。

ナルトが言うように、白い肌の彼女は白いドレスより、こちらのほうが似合っていたのだろう。このドレスを選んでくれたくノ一たちにはネジは感謝した。

「ではヒナタ。先に行っている」

白いタキシードのネジがヒナタの手を握り、穏やかに声をかけた。あの暗部の仲間を失ったときから、ネジはいつも穏やかに優しい声で話してくれる。ヒナタはその度、心に温かなものが広がるのを感じた。

ここに居てもいいのだと、確認させてくれるようなネジの態度が嬉しかった。

笑顔一杯で仲間たちが支度室から出て行く。優しい声をかけていってくれる。この人たちに受け入れられたのだと、仲間だと声を大にして言ってもいいのだ。みんなの力で木の葉崩しを回避したときより、自分も彼らの仲間の一人だと胸を張れるようになった。安心して話すことができるし、安心してチームを組める。

支度室を出て会場へととなっている広場へ行くと、沢山の人が笑顔で迎えてくれて驚いた。いのたちの結婚式に参列した両家はもとより、忍仲間たちもみんな残っているようだった。この式を手配してくれた仲間たちだけで行うものと思っていたヒナタには、この人数は信じられなかった。みんな、口々におめでとうと言ってきてい

る。自分たちの結婚が、こんなに沢山の人に祝福されるとは思ってもいなかった。

「ヒナタ、あれ」

シカマルがそつと寄ってきて、少し先を指す。彼の指を辿って視線を巡らせた白い目が、驚きに見開かれた。

花嫁が進む赤い絨毯の上に、ヒアシの姿があった。夫の元へと導く父親の役目は、キバに頼んでいたはずだ。だが、キバの代わりにヒアシが立っていた。

「ど……どうして……？」

「さあ、どこから聞いてきたんだろうなあ。……どうする？ とりあえず殴ってからいきたい、てんなら影縛りで抑えといてやるぜ？」

シカマルを見上げると、口元はにやりと笑っているが目が案外真剣だった。ヒナタは僅かに逡巡しただけで、微笑んで首を振った。

「ありがとう。でも……やめとくね」

「まあ、そうだな。あの顔を見させられたらなあ……」

ブーケで口元を隠しながらすすくと笑うと、父の元へとゆつくりと歩いていった。

側に立ったけれど、どうしてよいのかわからない。父の、自分に対する感情の変化には気づいていた。しかし長年築かれた溝は、どうやって埋めればいいのかお互いわからなかったのだ。なんと声をかけていいのか、どう接すればいいのか、わからない。

来てくれてありがとうと言うべきなのか。いやしかし、声をかけなかったのだからまずそれを詫びるべきか。ヒナタはブーケを握りしめ、父を見上げた。いつも厳しい顔しか見たことがなかった。最近では窺うような表情もよく見たが、未だに父の顔といえは難しい、怖い表情しか思い浮かばない。

会場が静まり返る。多くの人が、名門日向宗主を見ていた。その

中にはハナビや日向一族の面々もあった。彼らは自分たちの宗主がこのような顔をするのを始めて見たのだ。

ヒアシは泣いていた。その表情は、哀しそうで嬉しそうで悔しそうで。しかし流される涙は、滂沱の涙となっていた。おずおずとヒナタに両手を伸ばし、がしっと抱きしめた。

「ヒナタ・・・ヒナタ・・・」

力任せに抱きしめられ、痛いと感じたが何も言えなかった。母が亡くなっても父は泣かなかった。父が泣いているのを始めて見た。いや、男の人が泣いているのを始めて見たのだ。

ヒナタは片手を父の背に回し、そろそろと擦った。まるで幼子のように泣き続ける父を、慰めるように。

静かな会場にヒアシの泣き声と咳きが響いた。やがて参列者たちからも、つられてすすり泣く声が漏れた。結婚式の様相で、通夜のような雰囲気垂れ流す集団に、通りすがりの者たちの足も止まる。

しかし・・・

野次馬の層が三重になったところで業を煮やした花婿がずかずかと歩み寄り、抱きしめて離さない花嫁の父を殴り倒す。あっけに取られる参列者の間を、花嫁を片手で担ぎ上げて立会人の前まで進んだものだから、会場は一気に爆笑の渦へと変わった。

参列者や通りすがりの野次馬たち、みんなの笑い声が木の葉の里を揺るがせるほど大きく響く。

これが幸せというものなんだねと、花嫁は花婿に囁いた。

麗らかな、春の薄い青空。参列者が祝福して投げ掛けてくれる淡い紅色の花びら。一族の祝福の言葉。涙を浮かべて笑い転げる仲間たち。

これが幸せというものなんだよと、花婿は花嫁に囁いた。

それは本当に、幸せな光景だった。

月が満ちる前　サスケの悪寒

えらく深刻な顔をして歩いているものだから、所要中だというのに思わず声をかけてしまった。

食い殺すような目で凝視され、地の底から吐き出すような声で、話したいことがある、などと言われて逃げ出すようなことができるだろうか。だが、非常に面倒な話になる予感がしたので、奴にも声をかけた。同期の中では唯一の妻帯者。シカマルなら同じ立場として意見もできるだろう。

こいつがこんな顔をしている理由が奴の配偶者にあることくらい、俺にもわかる。

この面子で酒を呑んだことなど初めてだ。

話したいことがあるなどと言ったはずだが、酒を呑み続けるネジは一向に口を開こうとはしない。

シカマルは責めるような視線を俺に送ってきたが黙殺した。騙されたお前が悪い。

自慢じゃないが、揃いも揃って無口の部類に入る俺たちだ。三人雁首揃えて黙々と呑んでいれば陰鬱なことこの上ない。店や客の連中も遠巻きにして不必要に近寄ってこない。

「・・・話・・・というか、聞きたいことがある」

ようやく話す気になったようだ。

「・・・なんだよ？」

猪口に口をつけながらシカマルが聞き返す。

「ヒナタと・・・一線を越えたいんだが、どうすればいいと思う？」

「・・・ぶっ！」

派手に咽び始めたシカマルに黙っておしぼりを手渡し、目線でネ

ジに先を促した。

「・・・いや、まあ、なんというか・・・俺とヒナタは結婚してそろそろ4年が過ぎようとしているんだが、色々あって、まあ・・・その・・・夫婦の営み、というやつを・・・まあ、したことがないんだ・・・」

「・・・一度も?」

「ああ・・・」

「不能かこいつ?と思ったが、よく考えてみれば花街に日参していたような男なので、それはないだろう。」

「言っておくが、身体的な問題はない」

さすが、日向の洞察眼だ。

「きつかけがないと動けなくなってしまったんだ。だが、そのきつかけとやらを、どうやれば作ることができるのかと思って・・・お前なら何か案でもあるのではないかと・・・」

「・・・なんで俺なんだ?いっておくが、俺は独身だ」

「お前は子供の頃からもてていただろう。経験のひとつやふたつやみつつやよつつ、あってもおかしくはない」

「経験で言うならお前だろう。花街での武勇伝はよく知っている」「あんなもの、何の役にも立たない。金を出す。金に見合った接待を受ける。それだけだ」

臆面もなく、よく真顔で言い放てるな。店内に油女一族がいないことを祈った。こんな会話、聞かれたくもない。

「・・・助言なら、シカマルに求める」

「なんで、俺なんだよ・・・」

落ち着いたはずなのに、一向に話に加わろうとしないシカマルに水を向けた。

「ネジと同じ妻帯者だろう」

「こんな面倒くさい話、他人に押し付けるに限る。」

「なんの関係があるんだ・・・」

心底面倒くさそうに脱力する奴を無視して、俺は酒を煽り始めた。

いくら呑んでも酔わない性質だが、今日ばかりは酔わせてくれ。ガキの頃から見知っている奴らの、下の話なぞ聞きたくもない。

「お前はどうかやって持ち込んだんだ？」

「……う……」

それを聞くか、ネジ。

「やってるわけだろう？」

この男、言葉を選ばんな……

「きっかけはなんだったんだ？」

無邪気とも言えるような真剣な目で聞いている。本気で、悩んでいるらしい。

「きっかけって……」

面倒くさがりを装っているが、こいつは案外面倒見のいい男だ。

ネジの真剣さにその口が開き始めた。

「何か、きっかけがあつて、いまもやっているのだろう？」

「やって……て、きっかけっか、まあ……いろいろと……」

「

「いろいろと……？」

珍しく、シカマルが本気で焦っている。俺はおもしろそうなものが見えそうだと、完全に傍観者に徹することに決めた。

「なんっか、まあ、ちよつと、仕事を立て込んで……俺が参謀室に数日詰めていたときに、深夜……あいつが差し入れを持ってきてくれて……」

「……て？」

「そんでまあ、疲れてたら、なんっか、元気になるだろ？ ナニが」

この会話がバレたらこいつ、嫁に殺されるんじゃないだろうか。

「んで、まあ、参謀室で……ちよつと……」

「……！参謀室でやったのか！？」

「まあ、ちよこつとだよ……」

「よく、ちよつとで済んだな」

感心するところか、そこ。参謀室と言えば、火影の執務室から数メートルと離れていないぞ。深夜で人が少なかつたからといって、それなりに、上忍だの特別上忍だのがうようよいたはずだ。日向一族がいたら見られていた可能性も高いし、油女一族がいたら聞かれていたはずだ。

案外、無用心な奴だな。

「あの時は里内の裏切り者が誰なのか、俺なりに調べたくて残っていただけだからな。見張り以外、ほとんど誰も残っていなかったのはわかっていたんだ」

・・・それは・・・

「しかし、場所が場所だし、受け入れさせる準備ができなかっただろう？」

「いや、あいつも初めてじゃないし、そういうのは大丈夫だった」
シカマルは酔ってきたのか、口の滑りが滑らかになっている。
しかし・・・

「ああ、そうか。普通は房術の訓練は受けているはずだからな」

「ああ、そうか。ヒナタは特別枠だもんな」

「そうなんだ。それだけに、余計に気を遣ってやらないと・・・」
なにを、にやつているんだ。

「まあ、そうだよなあ。事前準備、いるだろうなあ」

「そうだろう？だから、いい雰囲気になったからといって、即、そこで、というわけにはいかないんだ」

獣か、お前は。

「だろうなあ。潤滑油とか、欲しいもんなあ」

「かといって、常に持ち歩くというのも、みつともないだろう？」

「そりゃそうだ」

・・・こんなところで指南を受けるのは、みつともなくはないのか。

「ああ、じゃあ、こうすれば・・・」

二人の酔っ払いを前にして、俺はいつまで経っても酔えない體質を呪った。シカマルの繰り広げる助言案に、ネジは真剣な顔で頷いている。たしかに、それは上手い手だった。

俺は、何十本目かの銚子を空にしつつ、背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

たしか、シカマルと山中いのの結婚は、お互いの母親同士が茶を飲みながら冗談で決めたようなものだったと聞く。

しかし・・・

いま、シカマルの口から語られる助言案を聞いてみると、その話が限りなく怪しいものだと思えてならない。もしかいつは、自分の母親と山中の母親をうまくつかって、事を運んだのではないのか？ お互いの母親と山中いのの本人が、こいつに操られているとも気づかないくらい、用意周到に練られた計画だったのではないのか？ 用意周到と言えば、こいつが先ほど語った山中との初体験も怪し過ぎる。

最重要機密の宝庫となっている火影の館に、透視術を操る日向一族も、僅かな物音さえも聞き漏らさない油女一族のどちらも、ただの一人もが警護していなかったわけがない。参謀の一人であるこいつがその気になれば、見張りの面子を操作することなど簡単なはずだが、今日明日にできることではない。余程緊急事態でも発生しない限り、火影の館の見張り当番は、一月も前には決定する。

眠そうな目をしたこの男を、面倒くさい面倒くさいと連発するこの男を、怖いと思った。

俺は、生まれて初めて、本気で誰かを、怖いと思ったのだった。

月が満ちる前 シノの笑い

珍しく深刻な顔をして歩いているものだから、所用中だというのに思わず声をかけてしまった。

不安気に揺らすこともなくなったその瞳がすがりつくように俺を見上げて、助けてほしい、などと言われて断る男がいるだろうか？道端で話せない用件だと言うから、夜に一献設けることになった。

いまとなつては過保護な彼女の旦那が、嫉妬に駆られて予想外の行動に出ないとも限らない。それに、奴が里にいるのに二人だけで酒を呑んだとわかったら後で何を言われるかわからない。面倒だがキバにも声をかけてやった。

相談事がある、そう言ったはずだが彼女は一向に話そうとしない。だがどう言えばいいのか迷っているようで、先程から俺たちに視線だけは送ってくる。彼女が口を開くまで、キバは待つことに決めたようだ。子供時代のキレ具合から言えば随分と大人になったものだ。まあ、あの化け物と対峙した一件以来、ヒナタに一目をおくようになったのだらう。いい傾向だと俺は思っている。

「あ・・・あのね・・・」

ようやく話す気になったのか。店に入ってかれこれ一時間が経とうとしていた。

「あのね・・・二人に教えてほしいことがあるの」

「なんだ？」

キバが無用心にも酒に口をつけながら聞き返す。俺は僅かに腹力を籠めた。

「花街で、どういうことをしてくれるの？」

「ぶっ！ー！」

ほらみる。ヒナタがこういう顔をして話すときは用心しなければ

ならないことくらい、俺たちにはわかりきったことだろう。

なぜなら、この子の爆弾発言は今に始まったことじゃないからだ。
「ネジ兄さんがよく通ってたんだけど、どういうことをしてくれるのかな・・・と思って」

盛大に嘔き出した後、苦し気に噎せているキバに気づかないくらい悩んでいるのか。

「それを知ってどうするつもりだ？」

キバを気遣うのは奴の犬に任せて訊ねた。

「・・・ネジ兄さんと結婚して、そろそろ4年が過ぎるんだけど・・・私たち・・・その・・・そういうことが、一度もなく・・・」

「え・・・？一度も？」

「うん・・・」

真つ赤な顔で頷くヒナタの姿に、それが真実だとわかる。

「なんだっ！！それはっ！あいつは不能かつ！！！」

さっきまでぜいぜい言っていたキバが、がばつと立ち上がるといきなり叫んだ。

「それは・・・」

「それはないよ！！だって、ネジ兄さん、花街に日参してたんだからっ！！！」

穏やかにキバの誤解を指摘しようとした俺を押し退けて、ヒナタが夫の面目を守るように叫んだ。

だからお前ら、少しは周りの状況を考える。

なぜなら、先程から店内に異様な空気が流れている。

「じゃあ、なんでだ？」

「やっぱり私が悪いんだと思う・・・」

「なんで？」

「だって・・・こんな貧相な体じゃ、その気になれないよね・・・」

お前が貧相なら、いのやサクラは貧弱を通り越して棒つきれだ。

「お前はいつもダブついた服着てるんだから、そんなんわかんねーじゃん」

「だって……一度、お願いしてみたんだもの……」

「え……?」

「ごくり、キバの喉が鳴ったのを俺は確かに聞いた。」

「ど……どうやって……?」

「お風呂あがりに部屋で待ってて、着物脱いで、お願いしたんだけど……ダメだったの」

涙を浮かべた目元がうつすらと赤い。どうやら酔っているようだ。

「やっぱり私なんかの体じゃ、男の人はその気にならないよね……」

店内中の人間が息を呑む音を、俺の耳は確かに捕らえた。

「いや……お前は、相当なもんだと思うぞ……?」

キバも酔ってきたようだが、まだ冷静さを失っていないようで俺は安心した。

なぜなら、どうにか言葉を選んでいる。

「だって……」

うつすらと上気した頬に涙目で見つめてくる。こっちは完全に酔っている。俺は一抹の不安を覚えた。

「ネジが拒否したのは、お前に魅力がないとか、溜まってなかったとか、そーいうんじゃないと思うぞ!」

ああ……キバが完全に酔った。

「……どういうこと?」

「つまりだな。男ってのは案外繊細な生き物なわけよ?」

「うん……」

二人を止めたほうがいとわかってはいるが、俺にはできなかつた。

「見たいけど、見せりゃいいってもんじゃない。見えそうで見えない。これが男のロマンよ!わかるかあ?」

キバ、語尾が延びてきたぞ。

「……どういうこと？」

ヒナタ、話を広げるな。

「つまりだなあ？見たいんだよ、本当はっ！だけど、ぱかっとながれちゃ面白くない。こっ、さあ、男の想像が働くようにしてくれなきゃなあ」

想像ではなく、妄想だ。

「ちよっを見せてやめる、フーチラリズム？」

「ちらりずむ……??？」

「そう！着物だろ？それなら、裾をちよっと上げて足首ちよい上見せるとかあ、襟元ちよい広げて胸元見せるんだよ。谷間なんか見えちゃってもいいなあ」

ぐふふと鼻を膨らませてキバが笑う。

「……そんなので、大丈夫？」

「おう！」

そんなので、大丈夫だ。

「男つてのは、繊細かつ単純な生き物だっ！ばっちり見えてるよ、ぎりぎりんとこで見えないっ！のが、ああだろうか、こっだろうか、て想像を働かせて、実際に見えるより萌えるわけよ？」

「う、うん……」

「それで女が頬を染めて上目づかいに見つめたりしてみ？もう下半身直撃の即勃よお！！」

仁王立ちで披露されるキバの妄想に聞き耳を立てていた店内の客たちが強く頷き出した。店員までもが足を止めて頷いている。

確かに……男の心理で真理を得ている。

「じゃあ、具体的に、どーいう風にすればいいの？」

メモでも取りそうな気配で、ヒナタが問いかける。目はとろんとして、完全な酔っぱらいだ。

「あのかな……」

この夜、異様な店内の雰囲気到最后まで気づかず、二人の酔っぱらいは際どい下ネタを繰り広げたのだった。

俺？もちろん、二人が酔いつぶれて突っ伏すまで見守っていたとも。

なぜならば・・・

そう、なぜならば、こんなにおもしろい光景がほかにあるだろうか・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6289o/>

月下美人

2011年3月9日15時42分発行